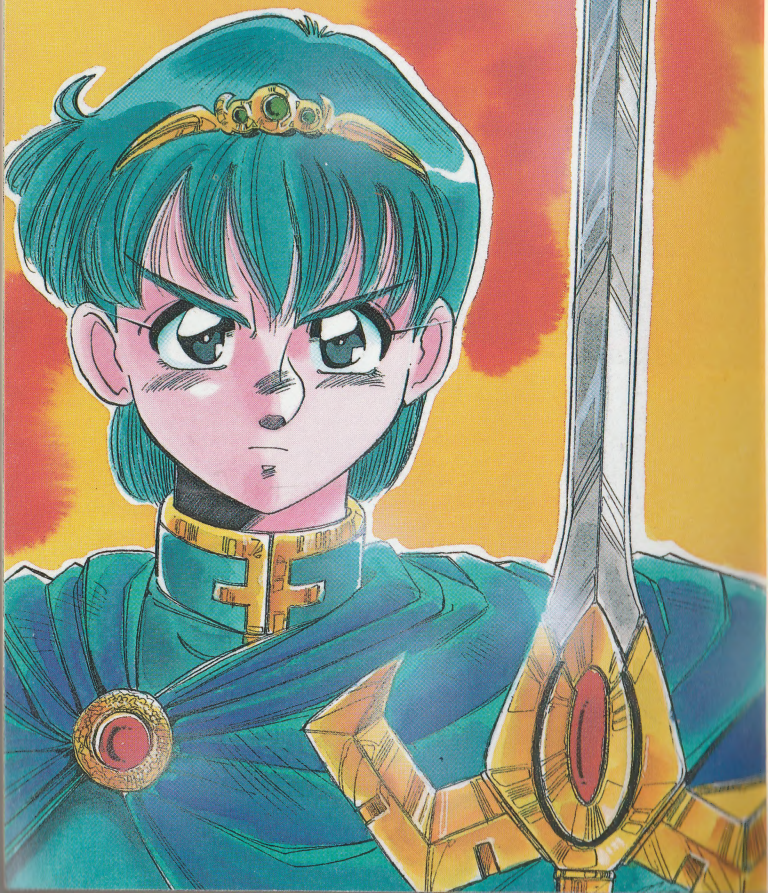
Fire Emblem

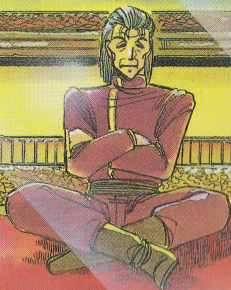
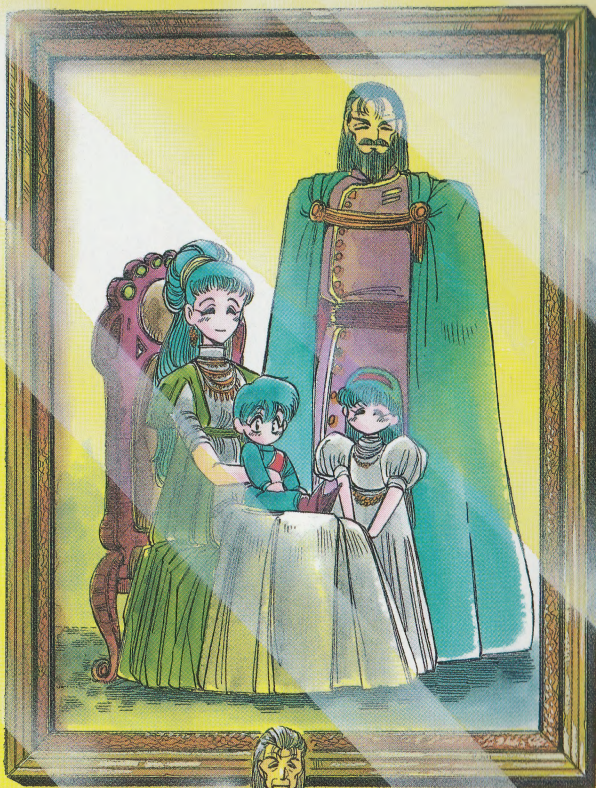
ファイアーエムブレム 紋章の謎 VOL.1

SUPEK QUEST
BUNKO
ファイアーエムブレム
紋章の謎
VOL.1
●小説
高屋敷英夫
●イラスト
おち よしひこ

マルスの姿に気づくと、
「出発はいつ？」
待ちかねていたようにエリスは駆け寄って尋ねた。
「明朝、一番の鐘の音とともに」
「長くなりそうなの？」
「そうならないことを願っているのですが……」
「そうよね。行ってみなければわからないものね」
エリスは思わず苦笑した。
長くなるかどうかマルスですら想像がつかないのは、エリスだって知っている。
知っていながら、あえて訊いてしまったからだ。

（本文より）

SQ

ファイアーエムブレム
紋章の謎

シーダはマルスとともに、
ペガサスで空へ…。
それが自由の空であるこ
とを祈りながら…。

三世代に渡りアリティア王家
に任えたエルキド・ジェイガン。
彼の安息の日々は、いつくるの
だろうか!?

スーパークエスト文庫

SUPER QUEST
BUNKO

ファイアー
エムブレム

紋章の謎 VOL.1

高屋敷英夫

イラスト
おち よしひこ

小学館

ファイアーエムブレム紋章の謎――登場人物紹介――

アリティア王国

暗黒戦争後、人々は平和をとり戻していたが、予期せぬ戦火と企みに、まみれてゆく。

モロドフ伯
騎士団の元軍師。

ジェイガン
騎士団の軍師

マルス アリティア王国の王子。この物語の主人公。

ドーガ
傭兵部隊長

ゴードン
弓部隊長

アベル
退役し武器商を営んでいる。

カイン
王国の留守をあずかる。

アラン
騎士団隊長

エリス アリティア王国の王女。マルスの姉。

◀**セシル**

◀**ライアン**

▶**ルーク**

▶**ロディ**

マケドニア王国

マケドニア王国の王女を中心として、帝国再建のただ中にあるが、クーデターが起こっている。

▲マチス

▼白騎士三姉妹

カチュア(右)パオラ(中)エスト(左)

タリス王国

ドルーア戦争後、マルスが落ちのびていた辺境の島国。2年間をこの国で過ごした。

▶シーダ タリス王国の王女。

◀**オグマ**

仮面の騎士シリウス

◀**リンダ**

グルニア王国

暗黒戦争後、アカネイア帝国の支配下におかれている。

ユミナ　ユベロ

グルニア王国の双子の王子と王女。

ロレンス

▶**マリーシア** マルスが救った魔道士。

レイソル　カシム　ウォレン　ジュリアン

◀**ハーディン** アカネイア王国皇帝。

▲**ラング**

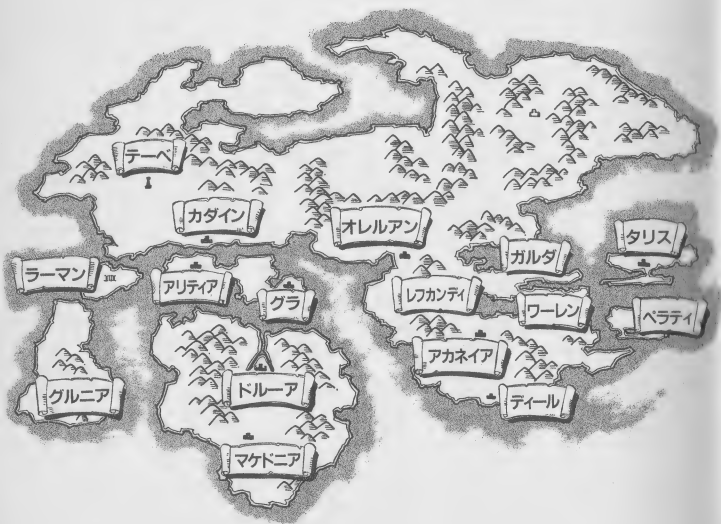
▶**ルーメル**

◀**リュッケ**

目次

ファイアーエムブレム 紋章の謎 VOL. 1

アカネイア大陸 全域

テーベ
カダイン
オレルアン
タリス
ガルダ
ラーマン
アリティア
グラ
レフカンディ
ワーレン
ペラティ
アカネイア
グルニア
ドルーア
ディール
マケドニア

序章

かつてアカネイア大陸の人々は、恐怖と絶望のどん底にあった。
竜人族の暗黒竜王メディウスがドルーア帝国を建国すると、大軍を率いて一斉にアカネイア王国の町や村を襲撃したからだ。
攻撃は止まることを知らず、戦火は一瞬にして大陸全域へと広がった。
さらに、この世を守るべきアカネイア王国の大軍も、恐るべき暗黒竜王の力の前にあえなく壊滅し、世界はまさに滅びようとしていた。
しかし、奇蹟が起こった。
ひとりの勇敢な若者が、敢然と暗黒竜王に挑み、苦難の旅の末、神剣ファルシオンを手に入れ、メディウスを見事打ち倒したのだ。
アカネイア暦四九八年のことだった。
こうして、五年におよんだドルーア戦争が終わり、世界は再び平和な時代を迎えた。
若者の名をアンリと言った。

第一九代アカネイア国王カルタスは、アカネイア王国を再建すると、英雄アンリにアンリの出身地であるアリティア地方を与え、アリティア王国として独立させた。
また、アンリとともにドルーア帝国と戦った地方の豪族や戦士たちも功績を認められ、オレルアン、グルニア、マケドニアなどの王国が相次いで誕生した。
以来、これらの国々は同盟国としてともに助け合いながら発展してきた。
そして、時は流れ、英雄アンリは伝説となった——。

ところが、ドルーア戦争が終結してから一〇〇年後のアカネイア暦五九八年——。
アカネイア大陸は再び騒然となった。
永(なが)い眠りから覚めた暗黒竜王メディウスが、隣国のグルニア王国とマケドニア王国を併合してドルーア帝国を再建すると、同じ世界征服の野望を持つ聖都カダインの大司祭カイネル・ガーネフと手を組み、一万三〇〇〇名の大軍を率いてアカネイア王国を攻撃した。
突然の襲撃に騎士団三〇〇名と傭兵(ようへい)八六〇〇名のアカネイア軍は必死に防戦した。
だが、名将グレイユ・カミュが率いるグルニア王国の黒騎士団とメディウスの圧倒的な力の前に、アカネイア軍は敗退を重ね、ついにパレス王宮とアカネイア王国はメディウスの手に落ちた。
そして、政治、経済、文化の中心としてアカネイア大陸に君臨し、栄華を極めてきたアカ

ネイア王国は、王女ニーナだけを残して、六〇二年の歴史に終止符を打った。

その報を受けた英雄アンリの血を引くアリティアの第四代国王のコーネリアスは、かつて英雄アンリがメディウスを倒したという伝説の神剣ファルシオンを持ち、騎士団二〇〇騎と兵三五〇〇名を率いてアカネイアへ出陣した。

ところが、同盟国であった隣国グラまで軍を進めると、なんとグラの国王ジオル将軍が四〇〇〇名の大軍を率いて、突然アリティア軍を強襲したのである。

このグラ王国の思わぬ裏切りにあって、アリティア軍は無残にも敗退し、コーネリアス国王の討ち死にとともに、アリティア王国もまたあえなく滅亡した。

しかし、一四歳になるコーネリアス王の子マルス王子は姉エリス王女の助けにより、辛うじてアリティアを脱出、辺境の島国タリスへと落ちのびていったのである。

メディウスのドルーア帝国の下、アカネイア大陸は再び暗黒時代を迎えた。

それから二年後――。

一六歳になったマルス王子は、マルスとともに逃げのびていたアリティア王国宮廷騎士団の残党を率いて、打倒メディウスのために、タリス王国を旅立った。

そして、壮絶な戦いの末、メディウスを倒し、この世に平和をもたらしたのだ。

のちに「暗黒戦争」と呼ばれたドルーア帝国との壮絶なこの戦いは、こうして暗黒竜王メディウスの消滅とともに終わりを告げた。

マルスがタリス王国を旅立ってから一年半後の、アカネイア暦六〇五年の終秋のことだった。
かつてアカネイア七王国と呼ばれた国々のうち、グラ王国とグルニア王国はすでに滅亡していたが、マルスとともに戦った戦士たちは、荒れ果てた祖国再建のため、それぞれの国へ散って行った——。

『真の愛？』
旅の魔道士と名乗った年齢不詳の男は思わず苦笑した。
『あなたさまは、この世にそのようなものが存在すると、心からそうお思いになっていらっしゃるのですか？』
『わからぬ。わからぬが、ある……と信じたい。人間として生まれ、人間として生きている以上は……。でなければ、あまりにも悲しいではないか』
『しかし、それは人間の思いあがりというもの。人間というものは、この世に生を受け、成長し、子孫を残し、やがて年老いて死ぬ。ただそれだけの生き物なのでございますよ。それなのに、この世で人間のみが神によって与えられた最高の生き物だと信じている。だからこそ、愚かにも人間は幻を夢見るのでございますよ。人間界が勝手に作りあげた夢、幻の世界、

そのなかに価値観を見出そうとするから、いたずらに惑わされ、悩み苦しむのでございます。愛を与えれば、いつかは必ず与えられる……そう信じてあなたさまは一途にあのお方を愛された。が、いくら愛されても、あのお方の眸にはあなたさまのお姿は映っていなかった。しかし、だからといって、それがなんだというのでございます？　あなたさまは、ただおのれが可愛いからあの方を愛されただけ。ただそれだけのこと。それだけのことなのでございますよ』

『しかし……』

『所詮、人間なぞそんなもの。おのれが一番可愛いのでございますよ。そうじゃございませぬか？　おのれの可愛さゆえに、人間は人を愛し、愛されたいと願う。が、それはすべて夢、幻なのでございますよ。あるのはおのれのみ。もし、この世に真の愛があるのなら、それはおのれへの愛。それだけなのでございますよ。そうそう、あなたさまにこれを献じましょう』

魔道士は、身にまとっている黒いローブの懐から漆黒の珠を取り出した。

鈍い銀色の光沢を発している高貴な珠だ。

『どうです？　妙に心が落ち着きませぬか？』

『たしかに……』

言われるように、両の手にすっぽりと収まったその漆黒の珠は軽くもなく重くもなく、持

っているだけで不思議と心が静まってゆくような気がする。
珠のなかに限りなく深い闇の宇宙が広がっている。
じっと見ていると、思わず吸いこまれそうな漆黒の闇だ。
『それはおのが心を正直に映し出してくれる不思議な魔力を持つオーブでございます』
『魔力を？』
『しかし、なにも臆することはございませぬ。映し出されたおのが心に素直に従えば、愚かな悩みや苦しみから解放されるのです。そして、そのオーブに映し出されたおのが心のまま、忠実に生きさえすれば、すべてはあなたさまの思うがまま……。あなたさまのお心ひとつで、この世の運命の振り子をいかようにも動かすことができるのでございます』
旅の魔道士はそう言い残して立ち去って行った――。

第1章　若き戦士たちは今――

1

アカネイア帝暦二年二の月の四の日――。
アリティア王国の王都は、近郊の町や村から集まった人々で賑(にぎ)わっていた。
街には大がかりな市(いち)が立ち、ずらりと軒を並べた出店の前を、人の波が埋めている。
この日、人々の挨拶(あいさつ)は例外なく天気のことから始まった。
ずっと寒い風の日が続いていたが、今日は珍しく晴れあがったからだ。
風もほとんどない。空はぬけるような青さだ。
だが、春告(しゅんこく)の節を迎えたとはいえ、まだ春とは名のみだ。
アカネイア大陸のはるか北の山脈から吹きつける雪まじりの凍(い)てつくような寒風が、三の月の声を聞くまで、地鳴りをあげ、容赦(ようしゃ)なく襲ってくる。

日中の最高気温が氷点下を割ることも珍しくない。
吐く息の白い日がまだまだ続く。
薄氷の張る水は身を切るように冷たい。
炊事や洗濯をする手は痛さを通り越して、感触さえなくなる。
川の水がぬるみ、木々が芽吹くまで、まだひと月以上も待たねばならない。
それでも、「春告祭」と聞くと、いやがうえにも人々の心が弾む。
アリティアの人々にとって春告祭のこの日が、閉ざされた厳しい冬のつかの間の解放感を楽しむ唯一の日だからだ。
そして、この日を境に農具などの手入れを始め、春の農作業のための準備に入る。
威勢のいい客寄せの声が飛びかう市には、さまざまな品が並べられていた。
軒から吊るされた色とりどりの衣服や布。堆く重ねられたラシャの反物。
穀物の種や花の種を山盛りにした箱や籠。
木製の鎌や鋤などの農具。
鍋や釜や食器、包丁などの台所用品から蠟燭などの日用品。
指輪や腕輪、首飾りなどの貴金属の宝飾品。
櫛や髪飾りなどの小間物類。
ところ狭しと並べられた地酒やワインや果実酒の瓶や壺。

乳製品や干し肉や魚の燻製、香辛料などの食料品。

それらの豊富な品々は、春を待ちわびた人々の目を楽しませる。

貧しい人々が多いから、ほとんどがひやかしの客だが、見るだけでも楽しいのだ。

そして、店主たちも嫌な顔ひとつせず、にこやかに客と応対する。

客も売る側も、これから訪れる春に胸を弾ませながら、やりとりを楽しむ。

ひと通り市を見終えると、懐に余裕のある者は、路上に張り出した食堂のテーブルで温かいスープを冷えた体に流しこみ、トウモロコシの粉を薄く焼いたトルティヤや砂糖をたっぷり使ったケーキやパイを頬張って胃袋を満たす。

広場や辻では旅芸人や曲芸団、ジプシー楽団などの見せ物が人気を集めている。

家族連れや子供たちは、道化師たちの曲芸や動物たちの芸に笑い転げ、拍手をし、若者たちはジプシー楽団の音楽に合わせて踊り狂い、またある者たちは吟遊詩人が朗読する恋の詩や歌に心をときめかせたりする。

またこの日、王都にある大聖堂ではマルス王子を迎えて、豊作と疫病撲滅を祈願する儀式が厳かにとり行われることになっている。

国王、あるいはそれに準ずる者が大聖堂へ出向いて儀式に参加する祭事は、アリティア王国には年に四つある。

最初が、今日の春告祭だ。

春告祭が終わると、今度は春分の日の復活祭だ。
この時代、アカネイア大陸一帯では、昼と夜の時間が同じになる春分の日が、太陽が復活する日だと信じられていた。
この日を境に農民たちは土地を耕し、雑草をむしり、春麦などの種蒔きにかかる。
そして、祭事は太陽への感謝と夏の過酷な労働の辛さを忘れるための夏至祭、秋の収穫を祝う感謝祭と続く。
アリティアには王都の他におよそ二四〇の町や村があるが、まだ農業の他に産業が発達しておらず、国民のほとんどが農民だった。
アリティアに限らず、他の国も同じようにほとんどの国民は農民だ。
大工、石工、鍛冶などの職人、宿屋や道具屋、呉服屋、食料品店などを営む商人は、国民全体からみればほんの一握りにすぎない。
鉱山労働者や狩猟を生業とする山の民、漁業を生業とする海の民も結構いるが、人口四八万人のアリティアの九割が農民である。
農業は気候に左右される。
毎年気候が一定せず、旱魃や冷害に見舞われることも珍しくない。
そして、その年の収穫が国を支える。それがそのまま国力になる。
だから、すべての祭事は農業を中心に考えられてきた。

このなかでとりわけ賑やかで盛大だったのが、秋分の日をはさんで一〇日間行われる感謝祭であった。

別名アンリ祭と呼ばれ、その年の収穫を祝うと同時に、暗黒竜王メディウスを倒してアカネイア大陸に平和をもたらし、アリティア建国の父となった伝説の英雄アンリの勇気と功績を讃えるのである。

だが、アカネイア暦六〇〇年の春告祭の直後、暗黒竜王メディウスによって再びアカネイア大陸は戦火にまみれた。

以後、五年もの間、これらの祭事は途絶えていた。

アカネイア暦六〇五年、メディウスを倒してアリティアに凱旋したマルスは、さっそく王国再建に着手した。

長い戦争のため、不作続きで国土は荒れ、人々は困窮と飢えに苦しんでいたが、マルスを迎えて希望を得た人々は祖国アリティア再建のために立ちあがった。

その年、好天候に恵まれ、暗黒戦争中に五分の一まで落ちていた農作物の収穫量を人々の力で五分の二にまで引きあげたのだ。

困窮と飢えの恐怖からは解放されるところまではいかなかったが、そのことが人々に大きな自信を与え、さらに意欲をかき立てた。

翌六〇六年、つまり昨年、マルスは春告祭から恒例の祭事を復活させた。

また、昨年の収穫量はさらに五分の三まであがった。
　よほどの気候の変化か恐ろしい疫病が流行しない限り、あと数年もすれば、暗黒戦争前の収穫量になるのは明らかであった。
　人々の表情にやっと明るさが戻り、町や村も活気づいてきた。
　そして、今年の春告祭を迎えたのである。
　この間に、アカネイア暦はアカネイア帝暦に変わっていた。
　アリティア王国だけでなく、アカネイア七王国と呼ばれた国々は建国以来アカネイア王国と同じアカネイア暦を使ってきた。
　アカネイア王国暦としてではなく、アカネイア大陸暦と解釈されていたからだ。
　アカネイア暦六〇六年の二の月、オレルアン王国の王弟ハーディン・ルイ・オレルアンがアカネイアの王女ニーナと結婚し、第二四代アカネイア国王を継いだ。
　ところが、その8ヶ月後、つまり六〇六の一〇の月、国王ハーディンは突如「アカネイア神聖帝国」を宣言し、自ら皇帝を名乗ったのだ。
　席上、ハーディンは大幅な制度改革と人事異動を発表した。
　その制度改革のひとつが、六〇〇年以上も使われてきたアカネイア暦の廃止であった。
　アカネイア暦を廃止したハーディンは、その年をアカネイア帝暦元年と制定し、他の国にもそれを強要した。

だから、年が明けた今年がアカネイア帝暦二年ということになる。
もっとも、アカネイア以外の国々では公式的なことを除いては今まで通りのアカネイア暦を使っていたし、人々においてはほとんどアカネイア帝暦を使うことはなかったが——。

正午の半時ほど前になると、市に群がっていた人々や旅芸人や曲芸団の芸を見物していた人々が、ぞろぞろぞろぞろと移動を始め、王都のメインストリートであるアンリ大路へと集まって来た。
そして、四分の一時ほど前になると、凱旋門からアンリの広場、大聖堂へと続くアンリ大路の両側に黒山の人垣ができていた。
この時代、アカネイア大陸一帯では、一日を一二に分けて時間を計算していた。だから、一時は現在の二時間に相当する。
半時は一時間、四分の一時は三〇分だ。
王都アリティアは、もともとは人口二〇〇〇人ばかりの半農半漁の小島だったが、アリティア王国が建国されて王都となってから、国の経済や文化の中心として急速に発展し、今では島全体が市街地になっている。
見あげるような高い街壁がぐるりと街を囲み、その中で一万八〇〇〇もの人が暮らしているアリティア最大の都市だ。

この王都のある島のすぐ西に、島全体が天然の要塞のような小島があり、森に囲まれたその小高い丘に荘厳華麗な美しい白亜のアリティア城がそびえている。
アリティアを建国したアンリ国王は、今のこのアリティア城がそびえている島の、さらに西にある小島に砦を築いて城としたが、のちに現在の小島に新城が建てられ、かつて城だった砦は今では牢として使われていた。
大路を埋めた人々は、このアリティア城から春告祭の儀式がとり行われる大聖堂まで行進して来るマルス王子と宮廷騎士団の雄姿を一目見たさに、胸をときめかせながら今か今かと待ち構えていた。
王都の街門でもある凱旋門は、英雄アンリが暗黒竜王メディウスを倒してアリティアに凱旋したことを記念して造られた五層建ての巨大なアーチで、壁面には壮大な彫刻がほどこされている。
アンリの旅立ちから暗黒竜王メディウスを倒すまでの苦難の物語が描かれているのだ。
またアーチの上の壁にはアリティア王家の紋章になっている神剣ファルシオンの像が彫られていて、その像の下に、「すべての者に愛と勇気とやすらぎを――」とアカネイア文字で短い言葉が刻まれている。
アンリが実弟のマルセレスに国王の座を譲ったあと、自ら暗黒竜王メディウスとの戦いを語って側近の魔道士に筆記させ、全一〇巻からなる「英雄伝説」を上梓したという。

刻まれた言葉は、その冒頭に記された献辞の一節から引用したのだ。
また、アンリの広場には、巨大な英雄アンリの銅像がある。
神剣ファルシオンを高々と掲げた馬上のアンリの雄姿の像だ。
その向こうにアリティア城に見劣りしない壮麗な大聖堂がそそり立っている。
アリティア王国には町や村と同じ数だけ教会や聖堂があるが、このアリティア大聖堂はそれらを総括している総本山である。
アリティア新城も、凱旋門も、アンリの広場も、大聖堂も、すべてアンリの跡を継いだ第二代国王マルセレスが、二〇年がかりで造らせたものだ。
国民の血税を惜しげもなくこれらの建造物に注ぎこんだために、当時マルセレス国王の政策を批判する者もいたというが、今ではかえってその大事業が建国間もない人々にアリティア国民としての自覚を促し、国民意識を高めたとして評価されている。
そして、マルセレス国王の跡を継いだマルセレスの長男カロスが第三代国王となってアリティアは安定期を迎えた。
カロス国王は故第四代国王コーネリアスの父で、マルスの祖父に当たる。
凱旋門を埋めた人々からどよめきとともに大きな歓声があがった。
騎士団が跳ね橋を渡って、凱旋門へ入って来たのである。
先頭は五名の宮廷楽隊である。

黄銅製の胴の長い先の広がった管楽器で行進曲を演奏しながら凱旋門をぬけた。
そのあとに、蹄音を響かせながら、騎士団の槍部隊一五騎が続いた。
鉄の甲冑と長い槍で武装した馬上の騎士たちに、人々は熱い視線を送っている。
人々が最初に注目したのは、騎士団を先導する副隊長のカイン・グサストだ。
騎士団小隊長のみに許される白馬に跨ったカインは、青地に橙色の神剣ファルシオンをあしらったアリティア王家の紋章入りの国旗を、空へ向けて誇らしげに掲げている。
騎士団の切りこみ隊長として敵に恐れられたカインは今年二四歳になる。
一六歳で騎士団に入隊したカインは、同盟国グラの裏切りによってアリティア軍が壊滅すると、マルスを護衛して遠国タリスへと逃れたが、その後マルスとともに暗黒戦争を戦いぬいたアリティアの英雄だ。
そのあとに、槍部隊長のアラン・アルギスが続く。
アカネイア暦六〇五年、マルスが祖国アリティアを奪還するために王都とアリティア城を占拠していたドルーア軍と激しい戦いを繰り広げたが、そのときマルスのもとに馳せ参じたのがアランだった。
その後、暗黒竜王メディウスを倒すまでマルスと一緒に戦い続けた歴戦の戦士だ。
アリティアの西部にある小さな村の出身で、今年三四歳になる。
戦後、村へは帰らずそのまま騎士団に入隊した。

二人の顔は、壮絶な戦いを勝ちぬいてきた自信と誇りに満ちていた。
彼らに向けられていた人々の熱い視線が尊敬の眼差しに変わったのは、槍部隊のあとにちょっと間をおいて続いて来た、矍鑠とした老騎士の姿を見たときだ。
老騎士の名はエルキド・ジェイガンだ。
騎士団の名誉隊長で、騎士団では最高位にある軍師だ。
今年五八歳になるが、全身からみなぎる気迫は老齢を感じさせない。
鋭い眼光と、無駄肉がひとつもない骨張った顔は、威厳すらある。
マルスの祖父カロス国王の時代から騎士としてアリティア王家に仕えてきた。
先の戦争で、故国王コーネリアスとともにアカネイアへ向けて出陣したが、同盟国グラの裏切りで敗北したあと、まだ一四歳だったマルスを連れて、遠い辺境の島国タリスへと逃げのびた。
その後、マルスの片腕として暗黒戦争を戦いぬいた。
老騎士ジェイガンが通過したあと、王子マルスと王女エリスが乗った四頭立ての馬車が続き、歓声が一際大きくあがった。
武装した騎士団と違って、この二人はきちんと正装し、王家の証である金刺繍で飾られた鮮やかな朱色のガウンをまとっている。
二人は軽く手をあげ、やさしく微笑んで、人々の歓声に応えた。

マルスの笑顔には神々しいばかりの輝きがある。
暗黒竜王メディウスを倒してアリティアに凱旋したときのマルスには、まだ少年のあどけなさが残っていたが、今ではその面影も消え、体もひとまわり大きくなって、逞しい若者に成長している。
エリスもまた一段と美しさを増していた。
人々は熱い眼差しで二人を見つめながら囁き合った。
――見るたびに立派になるなあ、マルスさまは。
――もう十九だろ。お妃を迎えて、国王を継いでもおかしくないよなあ。
――そうはゆくまいよ。まずはエリスさまの方が先だ。一〇日後には二二回目の誕生日をお迎えになられるんだからな。
――そうよ。いくらマルスさまでも、エリスさまをさしおいて結婚はできないわよ。
――しかし、ますますリーザさまにそっくりになってくるなあ、エリスさまは。
――ほんとだねえ。せめて王妃だけでも生きておられたら……。
マルスとエリスの母である王妃リーザは、グラ王国の裏切りにあってアリティア軍が壊滅したあと、ドルーア帝国の連合軍にアリティア城を攻めこまれ、自ら命を絶った。
マルスとエリスの馬車が通過すると、人々の熱い視線はそのあとの部隊へ向けられた。弓部隊一〇騎の先頭に立つのが部隊長のゴードン・ルセスだ。

暗黒戦争で腕をあげ、今では宮廷一の弓の腕前を誇っている。

最後に、傭兵部隊一五騎が続いた。その先頭に一際目立つ大男がいた。

部隊長のドーガ・ロドリオである。

ゴードンは二〇歳。ドーガは二五歳で、カインと同期だ。

ともに先の戦いでマルスを護衛してタリス王国に逃れたが、その後マルスとともに最後まで暗黒戦争を戦いぬいたアリティアの英雄だ。

傭兵部隊が通過すると、凱旋門を埋めていた人々は、騎士団のあとを追ってぞろぞろと大聖堂へ向かって歩きだした。

アリティア王国の騎士団は全部で四〇騎だ。

他にアリティア城の警備をかねた八〇名の歩兵部隊と、国内の防衛上の要衝にある六つの砦にそれぞれ二〇名から三〇名の歩兵が配置されているが、それ以上の兵はない。

騎士や兵を抱えれば抱えるほど、それだけ出費が増えるからだ。

だが、緊急時には国民を招集して傭兵や歩兵として雇うことになっている。

その予備兵はおよそ一八〇〇名である。

故コーネリアス国王の時代は、一〇〇騎の騎士団と四〇〇名の歩兵部隊を抱え、予備兵の数も三五〇〇名を越えていたが、再建途上にある現在、今の戦力を維持するのが精一杯であった。

騎士団がアンリの広場を過ぎて、大聖堂に到着すると、そのあとを追ってきた人の波が大聖堂前の広場をびっしりと埋めた。
大司祭グルノワ卿以下、およそ一五〇名の僧侶、魔道士、占い師、王都の実力者たちの出迎えを受けた王子マルスと王女エリスが、騎士団を従えて大聖堂へ入ると、大聖堂の巨大な回廊を埋めていた国中から集まった町や村の長や長老たち二〇〇〇名が盛大な拍手でマルスたちを迎えた。
やがて、マルスとエリスが大聖堂の一番奥の礼拝堂に立つと、
カーン、カーン、カーン……。
大聖堂の鐘楼（しょうろう）の鐘が王都に鳴り響いた。
正午を告げるとともに、春告祭の儀式の始まりを知らせる鐘の音（ね）でもあった。
一時におよぶ厳かな儀式が終わると、お祈りが始まる。
それを知らせる鐘が再び王都に鳴り渡ると、広場の前を埋めた人々はみな地面に跪（ひざまず）いて祈りを捧げるのがしきたりになっていた。

そのころ——。
蹄音を轟（とどろ）かせながらアリティア城へ向かう一頭の早馬があった。
鞍上（あんじょう）の兵は粗末な鎖かたびらの上に袖（そで）のない黄色の薄い軍服をまとっている。

その軍服の胸には太陽と光をあしらった朱色の大きな絵柄が染めぬかれていた。
アカネイア帝国軍であることを示すアカネイア皇帝の紋章である。
早馬は、このまま走りぬければ、夜にはアリティア城へ着ける距離のところにいた。

2

波穏やかな海に大小無数の島々が浮かぶ王都やアリティア城があるこの一帯は、昔から風光明媚なところとして知られていた。
海上に浮かぶ、美しい貴婦人のような城を建てたい――。
アリティア城を建てるとき、第二代国王マルセレスは側近にそう語ったという。
その美貌ゆえに見る者のすべての心を奪い、男たちを恋の虜にしながらも、いかなる男の誘惑にも決して乗ることのない貴婦人のような城を――。
つまり、何人の目をも奪う優雅で美しい、荘厳で華麗な、誇りと気品に溢れた、そのくせ、何人の手も届かない強固な守りを持つ城を――と。
そして、二〇年の歳月を費やして完成したアリティア城は、まさに国王の期待を損なわない素晴らしいものだった。
城は周辺の自然と調和してい、その美しさは見る者の心をなごませ、やすらぎを与えた。

特に、王都からの夕暮れの眺めは格別だった。
西の海にゆっくりと沈んでゆくやわらかな陽光が、波穏やかな海上と気品に溢れた優雅な城を黄金色にやさしく包むと、城はさらに美しさを増し、見る者はその場に立ち尽くしたまま、しばし時の経つのを忘れたという。
その上、国王が望んだように、城は強固な守りをしていた。
対岸から城門へ行くには、一〇の跳ね橋を渡って海を越えねばならない。
城門は三層建ての巨大な要塞になっていて、厚い大きな鉄の門扉が敵を拒んでいる。
また、島全体を囲むように高い城壁が張りめぐらされていて、東西南北の四隅に八角屋根の物見の塔が建てられている。
城門を入ると、欅並木に囲まれた手入れの行き届いた美しい庭園が広がっていて、欅並木と庭園はそのはるか前方の内濠まで続いている。
並木によって隔てられた庭園の左手、つまり東側には、騎士団の宿舎棟と剣術、弓術、槍術の道場棟、さらに厩棟が並び、その奥に騎馬を調教する馬場があり、やはり並木によって隔てられた庭園の西側には、歩兵部隊と警備部隊の宿舎棟、さらに武器蔵、食料蔵の棟が並び、その奥に練兵場がある。
内濠と森に囲まれた小高い丘の上もまた強固な城壁に守られていた。
内濠の橋を渡って、城壁の一部となっている中門を潜りぬけると、左手にアリティア城の

象徴である総大理石の四角い巨大な白亜の天守塔が天を突くようにそびえてい、手入れが行き届いた噴水のある美しい中庭をはさんで、右手に三層建ての荘厳華麗な黄金色の宮殿がある。

この夜、宮殿の食堂では、春告祭とシーダ王妃歓迎の晩餐会が催されていた。

牛の尻尾と玉葱のスープ、蛤と小海老のサラダ、白身の魚の揚げ物、羊肉の燻製、赤大根と瓜のソース添えの鹿肉の塊、地鶏の丸焼き、卵黄を繋ぎに使ったトルテイヤなどの郷土料理、年代ものの高価なワインや果実酒、地酒が長い大きな食卓を埋めていた。

食卓の上座の中央の席にマルスが、その右隣にタリス王国の王女シーダがいる。

一〇日後の二の月の一四の日、王女エリスは二二回目の誕生日を迎える。

そのお祝いのためシーダは、マルスと暗黒戦争をともに戦ったウルスタ・サジとミレイル・マジの二人のタリス国の騎士を同行させ、二〇日間の長旅の末、今日の夕方アリティア城へ着いたばかりだった。

今回のシーダの訪問は、昨年の秋、アンリ祭に招待されて以来のものだった。

〈見るたびにシーダ王女は美しくなられる〉

この宴に出席したアリティアの騎士たちは、一様に同じことを感じていた。

のびやかに成長した肢体とその仕種や振る舞いは見ていて気持ちがいい。

豊かで艶やかな青磁色の髪、白磁のような滑らかな肌、紺碧の眸、形のいい唇――なにひ

とつとっても魅入られるような美しさだ。眩しくすらあった。
シーダの隣の席に騎士団副隊長のカインが、またマルスの左隣の席に姉の王女エリスが、さらにその隣に老騎士ジェイガンがいる。
下座には、先の戦争で、大活躍した騎士のアラン、弓部隊長ゴードン、傭兵部隊長のドーガ、シーダに同行して来たサジ、マジ、そして騎士団一の槍と剣の使い手として有名だったアベル・スカロコと、先の戦争でマケドニア白騎士団を率いたマケドニア王国の王女ミネルバの側近として活躍したタルサ三姉妹の三女エストがいる。
アベルはカインやドーガと同期で、一六歳で騎士団に入隊し、マルスとともに暗黒戦争を戦いぬいたアリティアの英雄だが、戦後騎士団を除隊し、現在武器商人として王都に店を構えていた。
先の戦争をともに戦いぬいた気心の知れた戦友ばかりなので、楽しい宴席となった。
身分や地位によって言葉遣いの違いこそあれ、話す内容に遠慮はない。
すでに五本のワインが空になっている。
互いの国の近況の話題で席は盛りあがったが、それが一段落すると、
「おい、アベル。おまえたち、いつになったら結婚するんだ？」
酔いにまかせてドーガがアベルとエストをからかった。
メディウスを倒すためにタリス王国を旅立ってから二年後、グルニアの名将グレイユ・カ

ミシが率いる黒騎士団との戦いのさなか、アベルとエストは初めて出会った。
そのとき、アベルは二二歳、エストは一五歳になろうとしていた。
あれから二年半、アベルは男性としての魅力をさらに増し、当時まだ美少女の面影を残していたエストは魅惑的な大人の女性に成長しつつあった。
アリティア城で二人の仲を知らない者はなかったが、
「け、結婚だなんてまだ……」
困惑してアベルがうろたえていると、
「なんだよ、まだプロポーズもしてないのか。だらしがないなあ」
「戦争が終わってから、なぜエストがマケドニアへ帰らないで、アリティアに来たのか、わかってるんだろうな？」
さらにゴードンが追い討ちをかけた。
「少しはエストの気持ちを考えてくださいね」
「わ、わたし、そんなんじゃありません」
顔を赤らめながらも、エストは必死に否定した。
「わたしはただ……」
「ぼくが頼んだんだよ」
すかさずマルスが助け船を出した。

「ぜひアリティアに来てくれるようにってね」
父コーネリアスの討ち死に――。
祖国アリティアの滅亡――。
母リーザの自害――。
ほんの数日の間に襲った悪夢としか言いようのない相次ぐ衝撃のなかで、当時一六歳になったばかりのエリスは、マルスを遠国タリスに逃がすために自ら囚(とら)われの身となり、六年もの長きにわたって、ドルーア帝国の暗い牢で地獄の日々を送った。
その後、マルスたちの活躍でアカネイア大陸は解放されたが、エリスの心は深い傷を負ったまま立ち直れないでいた。
そこでマルスは、エリスのために、アリティアへ来てエリスの世話をしてほしいとマケドニアの王女ミネルバを通じてエストに頼んだのだ。
もちろんアベルとエストが互いに好意を持っていることは知っていたが、気立てのいいやさしいエストなら、きっとエリスのよい相談相手になってくれると思ったからだ。
エストは今、忙しくなったアベルの店を手伝っているが、いまでもエリスの相談相手として、暇をみては城へ来ていた。
「それはそうと、マルスさまの方こそどうなっているのです？」
ドーガは矛先(ほこさき)を変え、今度はマルスとシーダの顔を交互に見比べた。

「ぼ、ぼくは……」
今度はマルスが返答に困る番だった。
「もおっ、会うといつもその話になるんだから」
顔を赤らめながらシーダが話題を変えようとした。
だが、さっきと同じようにゴードンが追い討ちをかけた。
「いやいや、今日こそはっきりさせてもらいますよ。いいですか、われわれはですね、いや国民だって、一日も早くマルスさまとシーダさまがご結婚なされることを願っているんですよ。そして、第五代国王を継がれんことを」
「いい加減にしろよ、二人とも」
口をはさんだのはカインだった。
「エリスさまの前でなんという無礼な。口を慎まんか。少しはマルスさまやエリスさまのお気持ちをお察ししろ」
姉のエリスをさしおいて弟が先に結婚できるか――そう言いたいのだ。
「いいのよ、カイン」
エリスはやさしく微笑んだ。
「だって、おめでたいことに順番はないもの」
エリスには結婚を約束した幼友達の恋人がいた。

ガイソン伯の長男のマリク・ガイソンだ。
マリクはマルスたちと同じ一九歳だが、一六歳のとき、騎士団に入隊せず、魔道士の道を選び、修行のため大神殿のある聖都カダインへ留学した。
先の戦争で、マリクはマルスとともに暗黒竜王メディウスと戦ったが、その後アリティアへは帰らず、再びカダインへ戻って行った。
いずれはアリティア大聖堂の大司祭になるであろうと嘱望(しょくぼう)されている有能な若者だが、マリクが修行を終えてアリティアへ帰るまで、あと数年は待たねばならなかった。
マリクがカダインへ戻ったあと、マリクとエリスの手紙のやりとりが続いていた。
だが、昨年のアンリ祭が終わったあとから、マリクからの手紙が途絶えている。
エリスが何度手紙を出しても、マリクからの返事は来ず、エリスは日を追ってふさぎこむようになったが、それもひとりでいるときだけで、人前ではその素振りすら見せず明るく振る舞っていた。
そんなエリスの気持ちを痛いほど理解していたのはエストだった。
心配したエストは思いあまってそのことをアベルに相談したことがあった。
そして、カインもまたエリスの気持ちを思い、心を痛めていた――。
「ほら、みろ。エリスさまだってそうおっしゃってるじゃないか」
「おまえな、考えすぎだよ」

ゴードンとドーガは調子に乗ってカインに反撃したが、

「うるさいっ！」

カインは怒鳴り返した。

「おまえたちは、エリスさまのお気持ちをちっともわかっとらん！」

「カインの言う通りだ」

すかさずアベルがカインを援護した。

「大体な、無神経なんだよ。おまえたちは」

「なんだよ、二人して」

「そんなにむきになって怒ることはないだろ」

ジェイガンはにこやかな顔で騎士たちのやりとりを見ている。

寡黙なアランも、料理にはほとんど手をつけずに、黙々と度の強い地酒を飲んでいる。話を聞いているのかどうかもわからない。

みんなが笑っても決して笑わない。

ほとんど表情に変化がない。

といって、この場にいるのが嫌だという風でもない。

時々苦しそうに激しく咳きこんで、みんなを心配させることもあったが、咳がおさまると何事もなかったかのように、再び平気な顔で飲み始める。

異様なほど青白い顔をしているが、いくら飲んでも顔色に変化はなかった。
毎晩遅くまで自室で地酒を飲んでいるという噂だが、酔ったアランを見た者はいない。
「とにかくだな、人のことをあれこれ詮索するよりも、おのれのことを心配しろ」
「そうだよ。アベルの言う通りだ。おまえらだって、恋人のひとりやふたりはいたっていい齢なんだからな」
「あっ、カインだけには言われたくないな」
「そういうおまえはどうなんだよ？」
ゴードンとドーガが雑ぜ返すと、
「お、おれはだな……」
とたんにカインは言葉に詰まり、一同の笑いを買った。
だが、ジェイガンだけは、カインの顔に浮かんだ一瞬の苦渋を見逃さなかった。
ふと、ジェイガンの胸に青春時代の甘い感傷がよみがえった。
同時に、カインの心情を思い、心が痛んだ。
カインが密かにエリスに心を寄せているのを知っていたからだ。
とはいえ、平民出身のカインと王女とでは身分があまりにも違いすぎる。
いくら思いを寄せても、どうにもならないのだ。
「おれは、女になんか興味はないっ」

カインは一気にグラスのワインを飲み干した。

そのとき、廊下を駆けて来る騎士の慌ただしい足音がした。

ただならぬ気配に、真っ先に反応したのはアランだった。

「何事だ!?」

若い騎士が飛びこんで来たとき、すでにアランは立ちあがっていた。

「ただいま、アカネイアからの緊急の早馬が到着しました！」

「なに!?」

宴席に、緊張が走った。

宮殿の玄関へマルスや騎士たちが現れると、数人の歩兵に案内されて来たアカネイア帝国軍の兵が石畳に平伏していた。

「皇帝がこの親書をマルスさまへと……」

丁重(ていちょう)に兵が一通の封書を差し出すと、カインが受け取って、マルスへ手渡した。

封を切り、親書を読み始めたマルスの顔色がさっと変わった。

『親愛なるアリティアのマルス王子へ告ぐ。

アカネイア帝国の占領下にあるグルニアで、大規模な反乱が起こった。

ついては、貴国にグルニア反乱軍討伐の手助けをお願いしたい。
ただちに、アリティア全軍を率いて出撃し、グルニアの反乱を制圧されよ。』

末尾に、アカネイア帝国皇帝ハーディン・ルイ・オレルアンのサインがある。
「マルスさま、ハーディンさまはなんと？」
読み終えてひと呼吸おいたマルスにジェイガンが尋ねた。
「出撃の要請だ」
「えっ!?」
居合わせた者たちも驚いて顔を見合わせた。
暗黒戦争が終わって二年、アカネイア大陸は平和を迎えた。
どの国も再建へ向けて必死になっている。戦火の気配はどこにもないように思えた。
「グルニアで反乱が起きたそうだ」
グルニアという地名を聞いて、居合わせた者たちは再び驚いた。
かつてグルニアはアカネイア七王国で、一、二を争う強国だった。
だが、先の戦いでドルーア帝国に併合され、名将グレイユ・カミュが率いる黒騎士団がマルスたちとの戦いで壊滅すると、国王ルイは自害し、再建のめどが立たないまま、戦後アカネイアの支配下におかれた。

そして、アカネイアのニーナ王女のたっての要請で、元グルニアの将軍だったゲイツ・ロレンスが旧グルニアの統治と再建に当たった。

ロレンス将軍は、先の戦争でドルーア帝国に加担する国王ルイに反旗を翻し、マルスとともに最後まで戦った人物だ。

また、ロレンス将軍と懇意にしているタリス国の国王は、少しでも再建の手助けになればと、忠臣オグマ・スビルを将軍のもとへ派遣していた。

オグマもまた先の戦争をマルスとともに戦いぬいた歴戦の戦士で、アリティアの騎士たちにとっては戦友であり、気の置けない仲間であった。

だが、昨年の十の月、ハーディンがアカネイア帝国の皇帝に即位すると、ロレンス将軍は更迭され、新たな人物が総司令官としてグルニアに送りこまれていた。

3

「それにしても気に入りませんな」

珍しくジェイガンは憤慨している。

「これは要請などというものではなく絶対的な命令ですからな」

マルスとジェイガンは、宮殿の奥にあるモロドフ伯の居室へ来ていた。

「といって、無視するわけにもゆかぬじゃろう」
病に伏しているモロドフ伯は、ジェイガンが読む親書の内容を聞きながら、マルスの手を借りてやっとベッドから上半身を起こした。
「なんといっても、アカネイアはわがアリティアにとって、いやかつてのアカネイア七王国にとって、父なる国なのじゃからな」
今年六三歳になるモロドフ伯は、マルスの祖父である第三代カロス国王の王妃メルーダの実兄で、かつて騎士団の隊長として活躍したが、隊長をジェイガンに譲ったあと、軍師として騎士団に残った。
だが、先の戦争で、故コーネリアス国王とともにアカネイアへ出陣したが、グラ王国の裏切りによってアリティア軍が壊滅すると、マルスとともに遠国タリスへ落ちのびた。
その後、戦争が終わるまでずっとマルスと行動をともにしたが、戦後アリティアへ戻ると病に伏し、今ではほとんど寝たきりの状態だった。
「それで、今グルニアの司令官はだれなのじゃ？」
「ラング将軍と聞いております」
「なに、ラング？」
思わずモロドフ伯がジェイガンに聞き返した。
「あのカナルト・ラングか？」

「知っているのですか、その将軍を？」
横からマルスがモロドフ伯に尋ねた。
「かつて、アカネイア騎士団にこの男ありと言われた男じゃ。国別対抗の騎士競技会でジェイガンが何度か槍を交えたことがある。のお、ジェイガン」
「はい。あのころはわたしも若うございました」
「のちに隊長にまでなった男じゃが、身勝手な言動が国王の怒りに触れ、失脚したと聞いておったのだが」
「失脚したとはいえ貴族の出、騎士団にはかなりの影響力を持っていたようです。しかし、先の戦いでドルーア帝国に取り入って私腹を肥やしたと噂されておりまして、そのために要職にもつけず、冷遇されておりましたが、昨年の人事異動で将軍に抜擢され、グルニアを任されたとか……」
「しかし、ハーディンともあろう者がロレンス将軍に代えてなぜそのような前歴の持ち主を将軍に？」
「マルスさまが腑に落ちぬのはごもっともでございます。わたしにも、あのハーディン殿がなぜそのようなことをなさるのか、ハーディン殿のご真意が一体どこにあるのか、さっぱり見当がつきませぬ。それに、先の戦いでアカネイアのために戦い、アカネイア再建のために尽くしてきたお歴々が、昨年の人事異動ですべて要職を解かれたと聞いております」

「ハーディンのことだから、おそらくなにか考えがあってのことだろうが……」
先の戦いでオレルアン王国はドルーア帝国に加担したマケドニア軍によって侵略されたが、〈草原の狼〉の異名を持つオレルアン王弟のハーディンはオレルアン騎士団を率いて孤軍奮闘していた。
だが、オレルアン草原での戦いでマルスたちに合流すると、マルスとともにオレルアン城を奪還し、マケドニア軍に捕らわれていたアカネイアの王女ニーナを救出した。
その後、暗黒竜王メディウスを倒すまでマルスとともに最後まで戦いぬいた。
ハーディンは、鍛えぬかれた剣技だけでなく、明晰な頭脳、強靭な体力、なにものをも恐れぬ勇気——騎士に必要なすべてを兼ね備えた優秀な人物だった。
今年三十歳になるが、アカネイア大陸の指導者として、マルスはこのハーディンに全幅の信頼をおいていたのだ。
「で、いかがなされます、マルスさま？」
「モロドフ伯がおっしゃる通り、要請に従わざるをえないだろう」
「しかし、アリティア全軍を率いてとなると……」
「その必要はない。今、わが国には国民から兵を招集して軍を組織する余裕はない。精鋭部隊を組織して行こうと思う。ジェイガンもぼくと一緒に行ってくれるね」
「もちろんですとも」

「だが、マルスよ……」
　モロドフ伯が尋ねた。
「もしそのことがハーディン殿の耳に届いたら、いかように思われるか。精鋭部隊だけを出撃させて、お茶を濁したとでも思われたら……」
「ハーディンはそんな男じゃありませんよ」
「それならよいのだが……」
「とにかく、わがアリティアとしては、今それが精一杯なのです。それに、反乱がいかなるものかわからないまま、いたずらに国民の不安を募らせ、戦争に巻きこむことだけはしたくありません。ご心配ありませんよ」
　モロドフ伯の杞憂を払うように微笑むと、マルスは足早に部屋を出て行った。
「のお、ジェイガン。マルスはああ言っておるが、どうもわしには嫌な予感がしてならんのだよ。年寄りの取り越し苦労ならいいのじゃが……」
「はい……」
　ジェイガンは大きく頷いた。
　彼もまた拭いようのない奇妙な感覚にとらわれていた。
　グルニア出撃にどうしても積極的な気持ちになれないのだ。
　親書を読んだとき、なによりも戦うことの虚しさを先に感じてしまったのだ。

気が進まないのだ。長い騎士生活のなかで、初めて覚えた感情だった。
それが齢のせいなのか、よからぬ予感なのか、自分でも判断しかねていた。
「わしはこの通りなんの役にも立たぬ。マルスのこと、しかと頼んだぞ」
「ご安心下され。わたしもご覧のように老いぼれてしまい、先陣を切って敵を蹴散らすことはもはやできませぬが、軍師としてならまだ立派にお役に立てると信じております。たとえいくつになろうが、この命がある限りアリティア王家をお守りするのが、騎士団一筋に生きてきたわたしの使命。エルキド・ジェイガン、最後まで任務を全うする覚悟でございます。たとえ、この命にかえても……」
ジェイガンは感慨をこめて壁に飾られている若くて美しい婦人の肖像画を見た。
その婦人は、第三代国王カロスの王妃メルーダだ。
若き日、ジェイガンは密かにこのメルーダを愛していた。
だが、貴族と平民出身の一騎士では、あまりにも身分の差がありすぎた。
やがて、メルーダはカロスに見初められて結婚し、王妃となった。
そのときから、ジェイガンは一騎士としてアリティア王家に仕え、王家を守りながら一生独身でいることで、メルーダへの愛を貫こうとした。
そのことを知っているのは、唯一メルーダの兄のモロドフ伯だけだった。
だが、王妃メルーダは、第四代国王となったコーネリアスを産んだ直後に病死、二六年の

短い生涯を終えた。
「この命にかえても……」
メルーダの肖像画を見つめながら、自分に言い聞かせるように、ジェイガンはもう一度呟いた。
ジェイガンが天守楼の一階にある大広間へ行くと、すでに四〇名の騎士が緊張した面持ちでマルスの前に整列していた。
隊長、部隊長の幹部四名が最前列に並んでいる。
マルスの声が大広間に響いた。
「すでに知っての通り、グルニアで反乱が起きた。その制圧のため、遠征隊を率いて出陣する。ではそのメンバーを発表する」
騎士たちは、自分の名前が呼ばれることを期待し、熱い眼差しでマルスを見ている。
「軍師エルキド・ジェイガン」
「はっ！」
「隊長アラン・アルギス」
「はっ！」
「弓部隊長ゴードン・ルセス」

「はいっ！」
「傭兵部隊長ドーガ・ロドリオ」
「はいっ！」
いずれも暗黒戦争を戦った戦士だけに、当然といった顔で胸を張って答えた。
「騎士ルーク・カザス」
「はいっ！」
大声で答えたのは、早馬の到着を報せに宮殿の食堂へ駆けこんで来た若い騎士だ。入団一年目で、今年一八歳になるが、齢に似合わず大人びた精悍な顔をしている。背丈もすでに一八〇センチはある。
「同じくロディ・ベルソン」
「はいっ！」
ロディはルークに負けてたまるかとばかりにさらに大声で答えた。
ルークと同期で、やはり一八歳だ。
やさしい顔立ちをしているが、背丈はルークに負けていないように見える。
「同じくライアン・ルセス」
「はいっ！」
ライアンはゴードンの弟で、つい最近入隊したばかりの一七歳だ。

体も騎士団のなかでは一番小さい。顔はまだ少年のそれだ。
だが、選ばれた喜びに、童顔を輝かせている。
「同じくセシル・モザリー」
「はーいっ！」
騎士団の最後列から、一際明るい声が響いた。
セシルは騎士団でただひとりの女性騎士だ。
背はライアンとほぼ同等だが、見るからにまだ華奢(きゃしゃ)だ。
聡明(そうめい)な、美しい顔立ちをしているが、ふとした仕種に少女のあどけなさがのぞく。
やはり、入隊して間もない一六歳だ。
「なお、このメンバーの他に、歩兵部隊の槍部隊一〇名、弓部隊一〇名、武器や食料、野営の道具などを運ぶ輸送部隊一〇名、計三〇名の兵士を同行させるが、そのメンバーの選出はアランに一任する。以上……」
選出されなかった騎士たちから大きなざわめきが起きた。
「マルスさま！」
真っ先に声をあげたのはカインだった。
今にも摑(つか)みかからんばかりの形相(ぎょうそう)をしている。
「納得できません！　なぜわたしが漏れたのですか!?」

「マルスさま！」

すかさず別の騎士が続いた。

「お願いです！　ぜひわたしも同行させて下さい！」

「我先にと志願しようとするみんなの気持ちは嬉しい。だが、遠征隊に選ばれることは決して名誉なことでも誇りでもない。選ばれなかった者こそ、心しなければならない。選ばれなかった者には、この城とこの国土と四八万の国民の命を守らなければならない重要な任務がある。それはアリティア騎士団としての義務であり責任である」

落ち着いたマルスの口調には威厳すらあった。

とたんにざわめきが静まった。

「カイン……」

澄んだ涼しげな双眸でマルスはじっとカインを見つめた。

「カインには、この城と国を任せる。ぼくに代わって、責任を持って守ってほしい」

マルスの眸には、カインに対するマルスの絶大な信頼と熱い願いがこめられていた。

そのことをはっきりと感じとったカインはもはやなにも言えなかった。

同時に、カインは責任の重さを痛いほど感じた。

4

その夜遅く、マルスは宮殿の三階にある姉エリスの部屋を訪れた。
エリスはちょうど、騎士や兵士たちが出陣の準備のために慌ただしく天守塔前の中庭を行き来するのを、部屋の窓から見ていたところだった。
マルスの姿に気づくと、
「出発はいつ？」
待ちかねていたようにエリスは駆け寄って尋ねた。
「明朝、一番の鐘の音とともに」
「長くなりそうなの？」
「そうならないことを願っているのですが……」
「そうよね。行ってみなければわからないものね」
エリスは思わず苦笑した。
長くなるかどうかマルスですら想像がつかないのは、エリスだって知っている。
知っていながら、あえて訊いてしまったからだ。
突然のグルニア遠征に動揺しているのが自分でもわかった。

そんなエリスの心を見越したように、
「でも、心配ありません」
マルスは明るく微笑んでみせた。
「ジェイガンやアランたちだっていますから」
「そうよね。あの方たちが一緒なら」
余計な心配をかけまいとして、エリスも微笑んだ。
「城の方はカインに任せました。なにかあったら彼に相談して下さい。それよりも誕生日、一緒に祝うことができなくなってすみません」
「うんん。いいのよ。仕方ないもの」
「これ、ちょっと早いけど」
マルスは首飾りを差し出した。
薄翠色(うすみどりいろ)の綺麗(きれい)な宝石に銀の装飾と銀の鎖がついている。
王都の貴金属商に特別にあつらえさせたものだ。
「誕生日おめでとう」
「わあ、素敵。ありがとう」
嬉しそうにエリスはそれを両手で握りしめた。
「あの……」

「なに？」
「マリクのことだけど……」
「マリクがどうかしたの？」
　エリスはつとめて明るく振る舞った。
　余計な心配をマルスにかけたくないからだ。
「いや、今度の誕生日に帰るのかなあと思って」
「どうして？」
「去年のアンリ祭に来ると言って来なかったから」
「さあ。なにも言ってこないけど」
「でも、手紙はきてるんでしょ？」
「な・い・しょ」
　エリスは悪戯っぽく微笑んだ。
「もしかしたら、いきなり現れて驚かすつもりかもしれないわね」
　冗談のつもりで言ったが、それはエリスの偽らざる願いだった。
　ありもしないことなのに、そう願わずにはいられなかった。
「そうなったら最高だね。じゃあ、おやすみなさい」
「おやすみ」

マルスが出て行くと、エリスは大きく溜め息をついた。
エリスは毎日マリクのことを考えて暮らしていた。
ことあるたびに、エリスは心のなかでマリクに話しかけ、マリクとの空想の会話を楽しむことによって、マリクから手紙の来ない寂しさを紛らわせていた。
どんな些細(ささい)なことでもよかった。
目の前で起きていること、身の回りで起こったこと、なんでもよかった。
だれかが目の前で躓(つまず)いて転んだだけでもよかった。
食事のとき、だれかがフォークを落としただけでもよかった。
季節の移り変わり、天気、なんでもよかった。
エリスが話しかけると、必ずマリクが答えてくれた。
暖炉のなかで勢いよく燃えていた薪(まき)が音を立てて崩れ落ち、一際大きな炎をあげた。
その炎を見ながら、エリスはまた溜め息をついた。
明朝、マルスが精鋭部隊を率いてグルニア遠征へ赴(おもむ)く。
ただそれだけのことなのに、なぜ自分がこんなに動揺しているのかわからなかった。
父コーネリアス国王の討ち死に――。祖国アリティアの滅亡――。母リーザの自害――。
弟マルスとの生き別れ――。ドルーア帝国の暗い湿った地下牢での六年間――。
屈辱と絶望の日々が、一瞬のうちに脳裏によみがえってきた。

〈先の戦争で、想像を絶するような体験をしたというのに……あれだけのことを体験したのだから、ちょっとやそっとのことではもう驚きはしないと自分のことをそう思っていたのに……今まで自分の身に起きたことに比べれば、グルニアの反乱の制圧など、とるに足らないことなのに……〉

それなのに、なぜ動揺しているのか、エリスは不思議でたまらなかった。

〈どうしてなのかしらマリク……〉

エリスは心のなかでマリクに話しかけた。

〈どうしてなのマリク……〉

だが、何度話しかけても、答えは返ってこなかった。

自分の心のなかで、エリスはマリクの言葉を見つけることができないでいた。

シーダは眠れないでいた。

何時（なんどき）が過ぎただろうか。気がつくと、涙で枕が濡れていた。

到着早々、マルスがグルニアへ遠征するとは想像もしていなかった。

四カ月振りのマルスとの再会だった。

この日がくるのを、秋からずっと待ちわびていた。

〈心配しなくていいよ。そんなに長くかかるとは思えない〉

そう言ってマルスはやさしく微笑んだ。

〈帰るまでアリティア城で待っていてほしい〉

とも言ってくれた。

帰国するまでアリティア城に滞在するのに異存はない。

マルスが言わなければ、自分から申し出るつもりでいた。

グルニア遠征がアリティア王国としてどうしても避けられないのなら、気持ちよくマルスを送り出してあげようと思った。

今、自分がマルスのためにできることはそれしかない——と。

だが、ベッドへ入ると、先の戦争のことが急によみがえってきたのだ。

タリス王国に落ちのびて来た一四歳のマルスと初めて出会った運命の日——。

そのときの吸いこまれるようなマルスの深い碧（みどり）の双眸——。

タリスの西の砦でマルスと過ごした二年間——。

マルスとともにタリスを旅立った日——。

ドルーア軍との壮絶な戦いの日々——。

死の恐怖と極度の緊張感のなかにいながらも、マルスとともに戦うことに限りない喜びを感じ、マルスのそばにいることの幸せに満たされていた日々——。

出会いからメディウスを倒すまでの戦いの日々が、喜びも悲しみもみんなマルスとともに

分かち合ってきたあの五年の日々が、次から次へと克明によみがえってくる。

なぜ過ぎ去った日々ばかりが思い出されるのか、シーダにはわからなかった。

〈これからの未来のことを見つめていかなければならないのに……〉

そう自分に言い聞かせても、思いはすぐ過ぎ去った日々へ返ってゆく。

〈だめ……未来のことを考えなければ……〉

そう思い直すそのたびに、シーダは寝返りを打ち、未来へ思考をめぐらす。

だが、それがどのような未来なのか、具体的に思い描くことができなかった。

確実なのは、明朝マルスがグルニア遠征へ旅立つということだけだ。

それが悲しかった。

その悲しみが、寂しさに変わった。

気がつくと、涙が流れていた。

翌朝、空はどんよりと曇っていた。

昨日の天気が嘘(うそ)のように、冷えこみが厳しかった。

また、いつもの冬の気候に戻ったのだ。

氷のように張りつめた寒気を切り裂いて、朝一番の大聖堂の鐘の音が聞こえてきた。

鐘の音が終わると、城門の巨大な鉄の門扉がおもむろに開いた。

そして、城門側の跳ね橋の床板が下りると、城門に近い跳ね橋から将棋倒しのように順々に床板が下り、やがて一〇の跳ね橋が一本につながると、城門から遠征隊が出て来た。
先頭の馬にはアリティア国旗を持ったドーガが跨っている。
そのあとに、アラン、ジェイガン、マルス、そして騎士たちの騎馬が続く。
さらに、武器や食料や野営の道具を積んだ馬車二台と歩兵部隊が続いた。
城の者が、城門の門扉まで出て、総出で見送っている。
エリスとシーダの顔がある。その横にエストの顔がある。
さらにカインの顔が、アベルの顔がある。
騎士団や歩兵隊の顔がある。料理人や召使いたちの顔がある。
跳ね橋を渡って、アリティア街道へ出ると、ジェイガンが背後に遠ざかってゆく美しいアリティア城を振り返った。
その目になんとも言えない寂しさが宿っていた。
そう長くはない任務のはずなのに、なぜかアリティアを離れがたいのだ。
〈ふっ。年がいもなく感傷的になって……〉
苦笑しながらも、何度も振り返った。
エリスとシーダもまた寂しさに必死に耐えていた。
マルスは最後の跳ね橋を渡ると、振り返って微笑んだ。

その涼しげな笑顔が、強く瞼に焼きついた。
そう長くはない別れのはずなのに、なぜか涙が零れそうになる。
ふと気を緩めてしまうと、その場で号泣してしまいそうだった。
それでも、エリスもシーダもそんな素振りはおくびにも出さなかった。
二人はつとめて明るく振る舞い、遠征隊を見送った。
一日も早く無事に帰国することを祈りながら――。

だが、運命の振り子は思いもしない方向へ動いていた。
災いの手が、遠征隊だけでなく、このアリティア城にものびていることを、このときだれも知る由もなかった――。

第2章　グルニア遠征

1

アカネイア大陸の東域のそのほとんどがアカネイア帝国の領土であるが、このアカネイア帝国の北に位置するオレルアン王国との国境に近いところに、大陸の交通の要衝である宿場町レフカンディがある。
このレフカンディを起点として、東西南北へ街道がのびている。
南へ向かうとアカネイア街道、北へ向かうとオレルアン街道、東へ向かうとガルダ街道だ。
アカネイア街道はアカネイア帝国の帝都パレスと、オレルアン街道はオレルアン王国の王都オレルアンと、ガルダ街道はアカネイア帝国の第三の都市である東海岸の港町ガルダと、それぞれ結ばれている。
そして、西へ向かう道がカダイン街道だ。

グラ、アリティア王国を経て、はるか西域の聖都カダインと結ばれている。
アリティア城を出発した遠征隊はこのカダイン街道をひたすら西へ進んだ。
なだらかな丘陵地帯の街道沿いには、宿場町の他にたくさんの町や村がある。
アリティアの南西部に当たるこの一帯は、麦の産地として知られていた。
最初の夜は、宿場町の顔見知りの長老宅に一泊した。
二日目の夜は、到着した村には宿屋がなく、村の聖堂を借りた。
アリティア城を出発して一時ほどは、隊員たちも緊張していたが、勝手知ったる領土内だけに、いつしか緊張感が薄らいでいた。
だが、天候は相変わらず真冬のそれである。
雪まじりの寒風が吹きつけ、日中でも底冷えがした。
三日目の夕方、一行はカダインとの国境に近いアブロの砦へ到着した。
アリティア国内にある六つの砦のなかのひとつで、三〇名の歩兵が常駐している。
遠征隊は睡眠をたっぷりとると、翌朝、夜明けとともに出発した。
やがて、丘陵地帯から荒涼とした砂漠へと地形が変わった。
カダイン自治地区の管轄区へ入ったのだ。
国境を越え、やっと隊員たちの顔に緊張感が戻ってきた。
カダイン自治区はそのほとんどが砂漠で、広さはアリティアの国土のおよそ一五倍、アカ

ネイア大陸西域の四分の三を占めていた。
さらに砂漠の後方には、前人未到の険しい山脈が地の果てまで連なっている。
真冬の砂漠の気候は、丘陵地のそれと違ってさらに厳しかった。
前方に見える地平線を、黒々とした砂塵の渦が掻き消したかと思うと、その砂塵が一瞬にして上空を覆いつくし、とてつもない巨大な生き物のように、地鳴りをあげて襲いかかってきた。
真冬のカダイン砂漠特有の砂嵐だ。
凄まじい烈風と砂塵が視界を遮り、時には一〇歩先すら見えなくなる。
日中の最高温度は氷点下をはるかに割っている。
一行は予定の行程の四分の一も消化できず、その夜、巨大な岩場の陰で野営した。
さすがに先の戦争を戦いぬいた経験豊富な騎士たちは、薄い毛布を体に巻いて横になると寝息を立ててすぐ眠ったが、ルーク、ロディ、ライアン、セシルら若い未熟な騎士たちは、吹きぬける風のうなりと、風に慌ただしくなびくテントの音を聞きながら、凍えるような寒さのなかで胴震いしたまま、まんじりともせず夜明けを迎えた。
砂嵐の行軍はさらに続いた。
三夜続きの砂嵐のなかの野営で寝不足がたたり、若い騎士たちは疲労困憊していた。
だが、砂嵐が過ぎ、比較的穏やかな日が二日も続くと、

若者たちの驚異的な回復力にジェイガンが思わず呟いたが、若い騎士たちの顔には精気がみなぎり、以前よりも闊達になっていた。

「若さとは恐ろしいものよのお」

アリティア城を出てから九日目の昼すぎ、カダイン街道とグルニア街道の分岐点である小さな宿場に到着すると、遠征隊はカダイン街道と別れ、グルニア街道を南下した。

そして、二日後、一行は国境の峠を越え、旧グルニア王国のカシミア地方へ入った。

峠を越えた山間に砦を兼ねた関所があって、二〇名ばかりのアカネイア帝国軍の国境警備隊が配置されていたが、アリティアの騎士団だとわかると、すぐさま門扉を開けた。

この関所をぬけて一時ほど進むと、急に視界が開けた。

一行は思わず目を見張って丘の上で馬を止めた。

眼下に壮大な美しい景色が広がっていた。

なだらかな丘陵の向こうに紺碧のカシミア海峡が静かに横たわってい、その海に小島が浮かび、さらにその向こうに高い山々を抱いたグルニア本島の陸地がある。

そして、丘陵と小島と対岸の陸地を、一本の長い橋が結んでいる。

ソウルフル・ブリッジと呼ばれるカシミア大橋だ。

赤レンガ造りの美しいこの大橋は、大陸本土とグルニア本島を結ぶ唯一の橋で、カシミア

海峡に浮かぶ小島を介して、北と南の二つの橋からなっている。

海峡に浮かぶこの小島に、とはいってもアカネイアの王都の島よりも大きいのだが、旧カシミア王国の王都だった城壁に囲まれた人口九〇〇〇人のカシミアの町がある。

一〇六年前――英雄アンリとともにドルーア戦争を戦ったグルニアの豪族出身のオードウイン・ルイという若者が、時代のアカネイア国王カルタスにその功績を認められ、故郷のグルニア地方へ帰国するとグルニア王国を建国した。

初代国王となったオードウィンはやがて強力な騎士団を組織し、近隣の未開部族や蛮族を次々に従えて、領土をグルニア本島全域にまで拡大した。

その後、オードウィンは長男に国王を譲ると、次男にカシミア地方を与え、カシミア王国として独立させたという。

そして、初代カシミア国王は風光明媚なこのカシミアの町の風景に調和するような華麗な美しい城を築いた。

だが、独立して一〇年後、恐ろしい悪性の疫病がこの地方を襲った。

国民の五分の三の人がその疫病に感染し、そのほとんどが感染して数日後に死んだ。

また国王も王家の人々もその被害者となり、国王が亡くなると、新生カシミア王国はあえなく滅亡し、再びグルニアの領土となった――。

カシミア大橋の入り口の検問所や橋の中央にあるカシミアの町の街門を、アカネイア帝国

軍の警備兵が固めていた。
　若い騎士たちは橋上からのカシミア海峡の景色や美しいグルニアの町並みに感嘆の声をあげていたが、カシミア海峡を一望できる丘の上でその美しい景色に思わず目を見張ったマルスの表情からは笑みが消えていた。
　マルスは、懐かしさや感慨とはほど遠い、苦い思いに捕らわれていた。
　先の戦争を戦いぬいた騎士たちもまた同じだった。
　二年半前の記憶がまだ生々しく残っているからだ。
　ドルーア帝国へ侵攻するためには、グルニア王国を経由しなければならなかった。
　二年半前、王都アリティアをドルーア帝国軍から奪還し、その勢いでカシミア海峡を一望できる丘の上まで歩を進めたマルスたちは、眼下に広がる景色に思わず見惚れた。
　その美しい眺望は、戦いの苦しさや緊張感を忘れさせてくれた。
　だが、それは打ち続く戦いのほんのつかの間のやすらぎにすぎなかった。
　一時後、この大橋とカシミアの町を舞台に、激しい戦いが始まった。
　マルスたちを迎え撃ったグルニア黒騎士団との戦いは、罪のないカシミア町民まで巻きこみ、多数の町民が犠牲になった。
　マルスたちは黒騎士団の固い守りを突破すると、一気にグルニア本島へ侵攻して行ったが、黒騎士団の無謀な攻撃のあおりをまともに食ったとはいえ、多数の町民に犠牲者を出したこ

とがマルスたちの心に苦い思いとして残った。

カシミア大橋を渡った遠征隊は、グルニア本島をさらに南下した。
島とはいっても、グルニア本島はアリティアの国土の約五倍、三五〇もの大小の町や村があり、六五万の旧グルニア国民が暮らしている。
本島へ渡ってから二日後の午後、一行は凄まじい豪雨に見舞われた。
時折、雨は滝のように激しく地面を打ち、数歩先すら見えなくなる。
マルスはその日の行軍を諦め、廃墟になっている砦の跡で野営することに決めた。
だが、先客がいた。
旧グルニアの都市・オルベルンを本拠に、二頭立ての馬車を一〇台も連ね、オルベルンとアカネイア王国の宿場町レフカンディを定期的に行き来している隊商だった。
完全武装の傭兵、荷役、人夫など、全員で七〇人ほどいたが、その三分の一は旅人で、子供連れの家族もいた。
先の戦争が始まると、大陸中を盗賊団や山賊が跋扈した。
そのほとんどが、血の臭いに敏感な禿鷹のようにドルーア帝国軍と反帝国軍の戦いを嗅ぎ分けては戦場に現れ、戦死した兵士たちの死体から武器や持ち物を略奪し、それらを武器屋や道具屋に売って金に替えるようなことをしていたが、なかにはドルーア帝国と手を組んで

町や村を襲った者たちもいた。
戦後、その数は減るどころか、さらに急増した。
祖国を追われた者や、土地や家族を失った者が、大陸中に溢れていた。
ほとんどの国が不作続きで、深刻な物不足に陥っている。
戦争が終わって戦がなくなると、武器を略奪する戦場もない。
腕に自信のある元兵士や流れ者やはぐれ者たちは、以前からある盗賊団や山賊の手下になるか、新たに同じ境遇の者たちと徒党を組むかして、新旧入り乱れて旅人や町や村を襲うようになった。
彼らは手段を選ばず、行動は残虐を極めた。すべてが生きるためだった。
また、組織に属さない一匹狼の盗賊はどれだけの数にのぼるのか計り知れない。
そこで、どうしても旅をしなければならない者は、金を払って、傭兵を雇っている隊商と一緒に行動するようになったのだ。
マルスは隊商の隊長を呼んでグルニアの反乱の情報を尋ねたが、四〇歳すぎのその隊長は大きな図体に似合わず愛想のいい顔で、
「申し訳ありません。なにも知りませんで……」
と、頭を掻くだけだった。
「知らないことはないだろう!?　現実に反乱が起こっているんだからな！」

業を煮やしてドーガが思わず怒鳴ったが、
「ほんとうなんです。ほんとうになにも……」
驚くでもなく動じるでもなく、隊長は落ち着いて答えた。
「なにも知らないで商売ができるのか⁉」
今度はアランが詰問した。
「商売人はだれよりも世の中の動きに敏感なはずだ！　でなければ商売人は勤まらんだろうが！　どうなんだほんとうのところは⁉」
「ですから、わたしはただ無事に物資を運ぶのだけが仕事でして……」
柔らかな口調とは逆に、隊長の態度は毅然としていて悪びれたところがない。
「いい加減にしろ！　おれたちはほんとうのことが知りたいだけなんだ！」
「もうよい」
マルスはアランを制した。
隊商はアカネイア帝国軍の本隊が駐留しているオルベルンに本拠を置いている以上、司令官のラング将軍から営業許可証と通行証を授かって商売を続けている。
しかも、マルスたちは支配者アカネイア帝国軍の援軍だ。
反乱軍を快く思っていなければ、それなりの情報を教えてくれるはずだし、逆に、仮に反乱軍に心入れしていたとしても、アカネイア帝国軍やラング将軍の統治に不平不満があった

としても、商売人としての自分たちの立場を考え、それなりのことは言うはずだ。
だが、隊長は「知らない」の一点張りである。
しかも、隊長はどちらの側に立っているのか自分の立場を明確にしない。
しかし、明確にしないことが、はからずもそれを雄弁に物語っている。
マルスはそこに旧グルニア国民としての反骨と誇りを見た。
「あなたはグルニアを愛しているのですね」
マルスはそう言って微笑むと、隊長はじっとマルスを見つめた。
そして、その目に尊敬と親しみの色が浮かんだ。
「どこに祖国を愛さない者がいるでしょうか」
隊長は初めて本心を語ると、
「とにかく、一日も早く平和になることを祈っています」
深々と頭を下げて立ち去った。
「なかなかの男ですな。しかし……」
ジェイガンは暗い表情でマルスを見た。
「なにも言わぬことがかえって……」
なにか計り知れないものがある——と言いたいのだ。
隊長と入れ替わりに、傭兵や荷役や人夫、同行している旅人たちに情報を聞きに行ってい

たゴードンが若い騎士たちを連れて戻って来た。
「口が固くてだれもなにも言いません」
「くそっ。あいつらもか」
ゴードンの報告を聞いてドーガが舌打ちした。
「隊長に禁じられているのでしょうか？」
マルスは遠征隊が砦の跡に到着したとき、遠征隊を見る先客たちの目に冷ややかなものを感じた。
おそらく彼らは、近づいて来た遠征部隊のアリティア国旗を見て、一目でアカネイア軍の援軍だと判断したに違いない。
そのときの彼らの顔を思い返しながらマルスはアランに尋ねた。
「他のみんなもグルニア人なのか？」
「そのようです」
マルスはジェイガンと顔を見合わせた。
「どうやらこれは単なる反乱ではなさそうですな。かなり根が深そうだ……」
ジェイガンは降りしきる雨を見ながら溜め息をついた。
「単なる杞憂であればよろしいのですが……」
翌朝、雨が止むと、遠征隊は隊商に別れを告げて南下した。

やがて右手に雪を頂いた険しいグルニア山脈が迫ってきた。
左手にはラーマン山地が連なっている。
このラーマン山地の麓(ふもと)に、古代遺跡のラーマン寺院があった。
かつてラーマン寺院は、聖都カダインの神殿と並んでアカネイア大陸の人々の厚い信仰を集めた二大聖地のひとつだった。
だが、今ではすでに廃墟となって人々から忘れさられていた。

遠征隊はグルニア山脈に沿ってさらに南下した。
ものものしいアカネイア帝国軍の兵士が街道筋の主要な町を警備していた。
兵士の姿が、南下するに従って数を増した。
そのただならぬ気配が、いやが上にも遠征隊の緊張感を高めた。
やがてグルニア街道はチルキという宿場町を過ぎると西へ大きく向きを変える。
そこから旧グルニア王国の都市オルベルンまでは徒歩で丸一日ほどの行程だ。
ところが、その宿場町の手前にある小高い丘にいた一〇騎のアカネイア帝国軍が、遠征隊の姿を見つけると、蹄音を轟かせながら丘の斜面を下り、街道に立ちはだかった。
ラング将軍の命を受けて、待機していたのだ。
アリティア城を発(た)ってから一九日目の昼過ぎのことだった。

2

冬の日の落ちるのは早い。
一〇騎のアカネイア帝国軍に案内され、討伐軍が待機している丘の上の軍営に到着したときには、眼下にある戸数三〇あまりの小さな集落が夕暮れの闇に沈もうとしていた。
集落の向こうの山の中腹に反乱軍が立て籠っている砦が見え、その背後に険しい山脈がそびえている。
グルニア街道を離れ、チルキの町から南下して、すでに二時ばかり過ぎていた。
討伐軍は一五〇騎の槍部隊、傭兵部隊、弓部隊と、およそ二〇〇名の歩兵部隊で構成されていた。
遠征隊が到着してほどなく、一〇騎ばかりの隊が蹄音を轟かせながらやって来た。
先頭の将がラング将軍で、引き連れて来たのはその親衛隊だった。
ラングは白髪だが、頭部が見事に禿(は)げあがっている。
また、白髯(しろひげ)が口から顎(あご)、さらには頬(ほお)まで埋めている。
ジェイガンより四、五歳若いが、齢らしからぬ肌艶と血色のよさをしていた。
ラングは自ら占領軍の司令官だと名乗ると、

「ほほおっ。これで全軍ですか」
傲慢無礼な態度でマルスに言った。
「しかも、今ごろお見えになるとは、随分と呑気なことですな」
たちまち遠征隊の騎士たちに険悪な空気が走った。
全員が睨みつけるようにラングを見ている。
「まあ、よろしい。反乱軍はわれらがあらかた討伐しました。あとはあの砦をひとつ残すのみ。はるばるグルニアまで赴いて来たのですからな、ロレンス将軍とその残党の始末はあなたにお任せしましょう」
「ロレンス将軍⁉」
マルスは驚いてジェイガンと顔を見合わせると、
「ロレンス将軍が反乱軍を率いているのですか⁉」
思わず聞き返した。にわかに信じられなかったからだ。
ジェイガンも、ロレンス将軍を知っている他の戦士たちも同じ思いだった。
今年六五歳になるロレンス将軍は、旧黒騎士団生えぬきの将軍として知られ、王家への忠誠と国民への奉仕を尊ぶグルニア騎士道の模範とも言えるような人物だった。
先の戦いで、第六代グルニア国王ルイがドルーア帝国に加担したため、ロレンスは王家への忠誠と国民への奉仕の狭間で悩んでいたが、マルスたちと知り合うと、マルス側について、

国王側から裏切り者の烙印を押された。
　だが、マルスたちが知っているロレンスは、なによりもグルニアを愛していた。
　そして、常に国と国民のことを第一に考えて行動していた。
　それゆえに、旧グルニア国民にも人望があった。
　また、どんな窮地に追いこまれても、決してうろたえたりするようなことはせず、いつも冷静沈着に状況を判断し、マルスたちの危機を何度か救った。
「しかし、なぜ彼がそのようなことを⁉」
「わしの知ったことではない。ただ、やつらがグルニアの王子と王女を匿っていることは事実だ」
「王子と王女⁉」
　マルスにも、他の騎士たちにとっても、初耳だった。
「元国王に世継ぎがおいでになったのですか？」
　先の戦争でグルニア王国の強力な黒騎士団がマルスたちとの戦いで壊滅すると、国王ルイは自らの非を恥じて自害し、グルニア王国は滅亡したが、王家の流れをくむ者たちもまた打ち続く戦いのなかで相次いで命を落としていて、少なくともマルスたちや他の国の者たちには、国王の死とともに、初代国王オードウィン・ルイの血が途絶えたものと信じられていた。
「おそらく、ロレンス将軍は、王子を擁立して、グルニア王国再興の夢でも見たのでござい

ましょうな。愚かなことよ」
「砦にはオグマもいるのですか⁉　タリス国から派遣されていたオグマ・スビルも⁉」
ラングはマルスを見つめたまま大きく頷くと、
「とにかく、あなたには、将軍の首を撥ね、グルニア王家の子らを捕らえてもらおう」
「将軍の首を⁉」
予想だにしないラングの言葉にさすがのマルスも動揺した。
先の戦いをともに戦いぬいたロレンスの首を撥ねるなどできるわけがない。
だが、そのことを承知の上で、ラングは無理難題を押しつけたのだ。
「やつらは反乱軍の指導者。そして、あなたはその反乱軍を制圧するために赴いた援軍。いかに親しかろうと、立場は明白。よろしいですな」
残忍な笑みを浮かべながらラングは念を押すと、
「われらはこれから逃げた反乱軍を追いかける。わがアカネイア帝国軍に歯向かった報いを存分に思い知らせてやらねばなりませんからな。反乱軍に参加した者たちの家族を皆殺しにし、反乱兵を匿った村はすべて焼き払い、二度とわれらに歯向かえぬようにな」
「な、なにもそこまでしなくても！」
「マルス殿……」
鋭い目でラングが睨みつけた。

「あなたは余計なことは考えずに、黙ってわしの命令に従えばよい。それとも、アリティアもまたわがアカネイアに逆らって、反乱でも起こすとでもいうのかな？」
「ま、まさか、そんなことは……！」
「ならば、おとなしく命令に従われよ」
「将軍！」
高圧的なラングの言動に耐え切れずにジェイガンが口をはさんだ。
「マルスさまに対して言葉が過ぎますぞ！」
他の騎士たちも殺気だった目でラングを睨みつけている。
「はっはは。思いあがっては困りますな、ジェイガン殿。よいかな、アリティア国などわしから見れば取るに足らぬ弱小国。マルス殿はそこの王子に過ぎぬ。わが帝国の力を持ってすれば、アリティアなどいつでも叩き潰せるのですぞ。それに」
ラングは高慢な視線をマルスへ向けると、
「わしはハーディン皇帝にグルニアの全権を任されておる。だから、わしの命令はハーディン皇帝のご命令と同じことと」
これ以上の問答は無用——と言いたげな強い口調だった。
反論できずにマルスはラングを睨み返した。
ラングもまた眼光鋭くマルスを睨みつけていたが、ふっと笑みを浮かべると、

「よおく心にとめておくのですな」
と言い残して、親衛隊を率いて馬で駆け去った。
「なんてやつだっ」
見送りながらドーガが悔しそうに舌打ちをし、
「ちっとも昔と変わりませんな……」
ジェイガンは肩で大きく溜め息をついた。
「いかなる理由で反乱を起こしたかは存じませぬが、あやつがあの調子でグルニアを治めておっては、反乱が起きてもなんら不思議はありませぬ」
軍営のあちこちから「反乱軍追跡」の号令の声が飛び、一五〇騎が蹄音を轟かせながら駆け去り、二〇〇名の歩兵部隊も慌ただしくそのあとを追った。
やがて、丘の上には、マルスたちの遠征隊だけが残った。
静まり返った丘の上を、冷たい風が地を這うように吹きぬけて行く。
丘の上の背後に険しい岩山がそそり立っていた。
その岩山の上から、じっと遠征隊を見下ろしているひとりの男がいた。
兜こそ被っていないが、男は鎧をまとい、馬に跨っている。
二五、六歳の体軀のいい、がっしりした男だ。
風になびく長い髪がその男の顔を隠しているが、髪の毛の間から鋭い目が光っている。

だが、マルスたちは気づくはずもない。
「いかがなされます、マルスさま……」
ジェイガンの問いに、騎士たちの視線がマルスに集中した。
「ロレンス将軍とオグマは……」
「わたしにはそんなことはできませぬ」
即座にジェイガンが答えた。
「わたしだって同じだ」
「しかし、マルスさま。ラング将軍の命令はわれわれにとっては踏み絵も同じ。命令に従わねば今度はどんな無理難題を押しつけてくるか……」
「それにしても、なぜハーディン殿があのような男を……」
アランが忌ま忌ましげに呟いた。
ドーガやゴードンもまた同じ思いを抱いていた。
「とにかく……」
マルスが一同を見た。
「ラング将軍のあのような命令には従えない」
とたんに騎士たちの顔に笑みが浮かんだ。
「それに、ロレンス将軍とは無駄な戦いはしたくない。明朝、砦へ接近して、ロレンス将軍

と直接話し合ってみようと思う。ロレンス将軍やオグマが反乱を起こすには、それなりの理由があるはずだ。その上で、ハーディンに事実を伝えるしかない」

そう告げると、マルスは野営の準備をするようアランに命じた。

その直後だった。マルスが背中に鋭い視線を感じたのは。

マルスは背後の岩山の上を振り向いた。

岩山の上にも闇が迫っていた。

だが、なんの気配もなかった。

風が吹きぬけて行っただけだった。

3

その夜更け——。

五基の篝火（かがりび）が寒風に激しく揺れていた。

その篝火の周りを当番の歩兵たちが警備し、すぐそばに設置された野営用のテントで、非番の兵士や騎士たちが長旅の体を休めていた。

この遠征隊の軍営に、ひとりの訪問者があった。

目の前の集落から来た、五〇がらみの農夫だった。

農夫は七五歳になる集落の老婆の使いで来たと兵士に告げた。
アリティアの王子が来たという噂が集落に流れると、老婆は夜が更けるのを待って、この農夫を迎えによこしたのだという。
兵士の報告を受けたマルスはさっそくアランを連れて集落へ向かった。
丘の上から集落まで、五、六〇〇歩しかない。
死んだようにひっそりと静まり返った集落の通りを、冷たい風が吹きぬけて行った。
農夫が案内したのは、集落へ入って六軒目の粗末な家だった。
「わざわざご足労願って、申し訳ありません……」
蠟燭（とも）が一本灯ったただけの暗い居間で、老婆は丁重にマルスとアランを迎えると、
「この齢になりますと、思うように足が動きませんで……」
どんな人物なのかを探るようにマルスを見つめた。
だが、すぐさま親しげな顔になると、
「噂通りのお方なので安心いたしました」
老婆は善良そうな笑顔を見せた。
一目で、この人なら信頼できる——そう判断したのだ。
「実は、シスターのレナさまから、マルスさまがどんなに素晴らしいお方かということをお聞きしておりました」

「レナから？」
マルスは驚いてアランと顔を見合わせると、尋ねた。
「レナ・クロードを知ってるんですか？」
「はい。昨年の夏、この村へお見えになりました」
女性僧侶のレナはマケドニア王国出身で、今年二〇歳になる。
先の戦争のとき、レナはマケドニア王国のミシェイル王子に見初められて求婚された。
だが、ミシェイルが竜騎士団を率いてドルーア帝国に加担していたため、レナはミシェイルを嫌ってマケドニアを出国し、修行と布教の旅に出た。
その旅の途中、ドルーア帝国の息のかかった悪魔の山を根城とする山賊に捕らえられたが、マルスたちに救出された。
その後、マルスとともに最後まで戦いぬき、戦いが終わると、マケドニア再建のために、王女ミネルバとともに故国マケドニアへ帰って行った。
「討伐軍と入れ替わりに夕方マルスさまの援軍が来たという噂を聞き、この機会を逃がしたらもう二度とないのではないかと思いまして……実は……お願いがあります……」
老婆が奥の部屋を見ると、ひとりの少年がおもむろに部屋から姿を現した。
齢は一二、三歳、髪の毛はぼさぼさで、顔は泥で汚れ、粗末な服を着ていた。
「この子は遠縁の子で、わけがあってうちで預かっておったのですが、この春からマケドニ

アへ行ってレナさまの弟子になることに決まっておりました」
「レナの弟子に？」
マルスは驚いて少年の顔を見た。
「じゃあ女の子なんですか？」
「マリーシア・ロキシと言います。マリーシアと呼んで下さい」
はっきりとした声でその子が答え、
「今年誕生日がくると一六になります」
歯並びの綺麗な白い歯を見せて微笑んだ。
声はたしかに女性のそれだ。
よく見ると、聡明そうな大きな眸をしている。顔立ちも整っている。
「どうか、お願いです。この子をこの村から連れ出して、レナさまがおるマケドニアへ逃がしてくれないでしょうか？」
「逃がして？」
「はい」
「でも、なぜ逃げるのです？」
「それが……」
老婆は躊躇（ちゅうちょ）した。

仮にもマルスはアカネイア帝国軍の援軍である。ラング将軍やアカネイア帝国軍のことを正直に述べていいかどうかわからないでいるのだ。

するると、老婆に代わってマリーシアが答えた。

「国中の若くて綺麗な女性はみんな帝国軍に連れて行かれるんです」

「こ、これっ」

老婆が慌ててたしなめたが、

「いいじゃない。ほんとのことなんだから」

「そうか。それで男の子の恰好を」

「これでも結構わたし美人なんです」

マリーシアはぺろりと舌を出して笑うと、

「でも、いくら変装していても、ここにいる限りいずれはばれて連れて行かれます」

「お願いです、マルスさま。どうかこの子を……」

老婆は何度も両手を合わせて哀願した。

「わかりました」

マルスは老婆の手を握って微笑んだ。

「安心してお任せ下さい。いつとは約束できませんが、いずれ必ずマケドニアのレナのところへ責任を持って送り届けますから」

「ありがとうございます……これでこの子も……」
老婆は涙をためながら何度も頭を下げた。
「それより、ラング将軍のことを詳しく聞かせてくれませんか？」
「えっ？」
「ラング将軍はグルニアでなにをしたのか、なぜロレンス将軍が反乱を起こしたのか、グルニア人なら知ってるでしょう？」
「で、でも……」
老婆は再び躊躇すると、
「どうですか、そこにいる方も一緒に」
マルスは後ろを振り向いて戸口に声をかけた。
大分前から二人の男が入り口の引き戸の外からなかの様子を窺(うかが)っているのをマルスもアランも気づいていたのだ。
だが、なにも返事がない。躊躇しているのだ。
マルスはさらに声をかけた。
「わたしたちはアカネイア帝国軍の援軍として来ましたから、警戒されるのは無理もありませんが、でも彼らとは一緒にしないで下さい。わたしたちはアカネイアの強い要請でグルニアへ来ただけで、なぜ反乱が起きたのか知らされておりません。ですから、本当のことが知

りたいのです。なにを言っても、どんなことを言っても、アカネイア帝国軍へは決して報告しませんから」
「大丈夫よ。マルスさまは信用のできるお方だから」
マリーシアが声をかけると、二人の男は引き戸を開けて入って来た。
マルスを案内して来た農夫と八〇歳ちかい老人である。
老人はこの一帯の長老だと名乗ると、
「これはあくまでも噂でございますが……」
と断って、おもむろに話し始めた。
老齢を感じさせないしっかりした口調だった。
「反乱の発端は……先の戦争で自害した元国王の遺児が生存していたことがアカネイアのハーディン皇帝に知られたからだとか……」
「ハーディンに？」
マルスは思わずアランと顔を見合わせた。
ハーディンが絡んでいるとは意外だった。
「ご存じかどうかわかりませぬが、国王にはお二人のお子たちがおられたのです。ユミナ王女とユベロ王子と申す双子のご姉弟で、たしか今年で一二歳になられるかと思います。あのお子たちは、先の戦争が始まってすぐ、カダインの大司祭ガーネフの人質としてカダインへ

送られ、暗い部屋に閉じこめられたのだそうです。かわいそうに……どんなに辛い思いをなされたか……当時、まだ四歳にもならない幼いお子たちだったのですからね……。国王がドルーア帝国の言いなりになってドルーアに併合され、ドルーアと手を組んで戦わなければならなくなったのは、そのお子たちを人質に取られたからだとも言われております……。そして、ウェンデル司祭がお二人を助け出したときには、今にも死にそうなほど衰弱しておったそうです」

「ウェンデル司祭が助け出した？」

再びマルスはアランと顔を見合わせた。

「その後、司祭はお二人をカダインの修道院に入れて見守ってくだされたとか……」

先の戦争が始まる前まで、アカネイア大陸の宗教の総本山であるカダインの神殿は、伝説の大賢人ガトーの高弟であるミロア大司祭とガーネフ大司祭の二人の高僧によって守られていたが、先の戦争が始まると、ミロアは暗黒竜王メディウスと手を組んだガーネフによって殺された。

このミロアに二人の高弟がいた。

そのひとりがミロアの直属としてカダインにいたウェンデル司祭だ。

だが、彼もまたガーネフによってカダインを追われ、オレルアン王国まで逃げたところでドルーア帝国軍に加担したマケドニア兵に捕まったが、オレルアン高原での戦いでマルスた

ちに救出されると、マルスと行動をともにした。
その後、マルスたちはドルーア帝国からアカネイア王国を解放すると、西域へ進んで聖都カダインをガーネフの手から奪還した。
そして戦後、カダインへ帰ったウェンデルは神殿の最高位の司祭としてカダイン再建の道を歩んでいた。
それにしても、なぜなのだろうか——マルスは疑問に思った。
ウェンデルもロレンスもマルスと行動をともにしていたから、二人の遺児のことをマルスが聞かされていてもなんら不思議はない。
それなのに、ウェンデルもロレンスも、なぜか遺児のことはなにも言わなかった。
あえて知らせる必要がなかったのか、知らせるとなにか不都合なことでもあったのか、秘密にしておかなければならないなにか理由でもあったのか——。
「いつのことですか？　司祭が二人を助け出したのは？」
ガーネフによってカダインを追われる前のことなのか、カダインをガーネフから奪還したときのことなのか、それとも戦後カダインへ帰ってからなのか——。
マルスはそれだけでも確認したかった。だが、
「さあそこまで詳しいことは……」
長老は首を横に振ると、言葉を続けた。

九カ月ほど前でしょうか。ロレンス将軍はウェンデル司祭からお二人を引き取ってこのグルニアで育てようとなさったのです。ところが、そのことがハーディン皇帝の、いや当時はまだ国王でしたが、お耳に入ると、お二人を引き渡すようロレンス将軍に命じられたのだそうです」

マルスは首をかしげた。

あのハーディンがなぜそのようなことにこだわるのか、理解に苦しんだ。

「しかし、お二人が殺されることを恐れたロレンス将軍は、その命令を無視し、お二人を匿われたのでございます。それからまもなくです、ハーディンさまがアカネイア帝国を宣言し、皇帝となられたのは。そして、ロレンス将軍は追放され、ラング将軍が新しい司令官として赴任して来たのです……」

長老はそこまで言うと、肩で大きく溜め息をついた。

溜め息は、喋り疲れたからなのか、これから説明しなければならないラング将軍の赴任してからの行動を思い返すのが辛いからなのか、わからない。その両方ともとれた。

すると、農夫が代わって言った。

「ラング将軍は王子たちを捜すために、そりゃあもうひどいことをしました。国中の家を一軒一軒回っては、ロレンス将軍と二人のお子らの似顔絵を踏み絵をさせ、ちょっとでもためらったりぐずぐずしていると、すぐ家に火を放ち、抵抗するとその家の者をみな殺しにした

んです。それに、年貢の追徴だと言っては、蔵や倉庫から昨年穫れた作物や食料を奪い取って行ったために、グルニアは今ひどい食料不足で、この冬になって寒さと飢えから、多くの人が死んでいるんです。我慢の限界なんてもんじゃねえ、これはもう地獄ですよ。ラングやアカネイア軍の悪口を言う者は片っ端からしょっぴいて、見せしめのために川原で処刑するわ、若い綺麗な娘を見れば有無も言わさず連れ去るわ……こんなことが許されていいんですか。あいつらグルニア人を虫ケラだとしか思ってねえんだ。だから、ロレンス将軍が我慢できずに反乱を起こすのは無理もねえですよ」

農夫は声を震わせながら一気にまくし立てると、

「でも、もう終わりだ……。反乱軍はもうロレンス将軍とわずかの兵しか残っていないというじゃないですか。グルニア人はみんなラングに殺されてしまうんだ……」

「いや、希望だけは捨てちゃいかん……」

長老は自分に言い聞かせるように農夫を慰めた。

「でも、長老……」

「とにかく、どうなろうが、我慢して生きのびることじゃよ。生きのびてさえいれば、グルニアにもいつかは必ず平和なときが来る。な、そう信じて……」

長老にやさしく肩を抱かれると、

「長老……」

農夫はやり場のない怒りと悔しさに激しく嗚咽した。
長老と農夫の話に、マルスとアランは少なからぬ衝撃を受けていた。

あのハーディンがなぜ――？
集落からの帰路、マルスはその問いを何度も心のなかで反芻した。
長老と農夫の二人は嘘をついているとはとても思えなかった。
二人の話を聞くまでは、グルニアの反乱はラング将軍の極悪非道な行動への反発が原因だと勝手に考えていたが、長老と農夫の話が事実だとするなら、ハーディンがラングの背後で糸を引いていることになる。
残酷な行動の具体的な指示はともかく、少なくともラングはハーディンの意図を忠実にくんで、このグルニアを恐怖のどん底に陥れていることになる。
そして、ハーディンをよく知っているジェイガンやゴードンやドーガたちもまた、マリーシアを連れて集落から軍営へ帰って来たマルスとアランの話を聞きながら、マルスと同じ思いを抱いた。
「それから、討伐軍があの砦に反乱軍を追いこんだのは七日も前のことだそうだ」
帰路、マリーシアから聞いたことをマルスは話した。
「七日も？」

ジェイガンが訝った。

「ということはマルスさま、それからずっと睨み合いをしていたということですか？」

「一度も戦いを交えてないそうだ。砦の兵はわずか三〇名、討伐軍はラングの親衛隊を入れるとその一二倍もある。いつでも攻めようと思えば攻められたのに」

「くそっ。ラングめっ」

忌ま忌ましそうにジェイガンは舌打ちした。

攻城戦や攻砦戦では、直接攻撃よりも、守備側の飢えと渇きを待ち、極度の疲労に追いこむ兵糧攻めの方が、効果が大きいとされている。

だが、それはあくまでも守備側にそれなりの兵がいる場合に限る。

兵が少なければ、直接攻撃で一気に城や砦は落とせる。

弓部隊の援護する間に、歩兵部隊が塁壁をよじのぼってなかに突入すればいい。

攻撃側の討伐軍三六〇名、反乱軍の守備側がわずか三〇名なら、砦を落とすのに半時とかからないのだ。

「それでは、最初からわれわれにロレンス将軍とオグマの首を撥ねさせ、王子と王女を捕らえさせようという魂胆だったわけですな」

「そういうことになる」

「あやつのことだ、逃げた反乱軍を追いかけるとのたまって軍を引きあげたが、おそらくそ

れは嘘でしょう。反乱軍が逃げてからすでに七日、ここでじっとしておったわけがない。われわれが来るまでに、全員を捕まえて処分したはず。きっとあやつはこの近くに潜んでわれわれの行動を見張っておるに違いありませぬ。単なる極悪人かと思っておったが……思いの外、計算高い、油断のならぬ男のようですな……」

そのとき、マルスたちのテントをセシルが覗いた。

そのあとからマリーシアが恥ずかしそうに姿を現すと、

「おおっ」

居合わせた者が思わず目を見張った。

セシルの手によって、マリーシアは見違えるほど美しい女性に変身していた。

ばさばさの髪がほどよく刈られ、丁寧に櫛で梳かれている。

泥を洗った顔には綺麗に薄化粧がしてある。

粗末な男の子の服から、洗い立ての女性のそれに着替えている。

そして、かすかに香水の匂いがした――。

4

アリティアのはるか南方にあたるグルニア本島の南部は、アリティアとは比較にならない

ほど温暖だ。
それでも、夜明け前の冷えこみは厳しかった。
風はないが、氷のような空気がぴんと張りつめている。
その夜明け前のまっ暗な空を、けたたましい笛の音が切り裂いた。
警備兵の緊急の笛だ。
「なにごとだっ！」
まどろみを破られた騎士たちは武器を手に口々に叫びながらテントから飛び出した。
「村が襲われてます！」
見ると、集落のあたりが赤く染まっている。
突然、真っ暗な北の山間にいくつもの炎が灯ったかと思うと、その炎は蹄音の轟きとともに闇を裂いて一気に集落へ向かって走ったのだ。
炎は松明（たいまつ）の明かりだ。
真っ先にマルスが蹄音を轟かせて馬を駆けさせると、すぐさまにアランが、そしてゴードン、ドーガらの歴戦の騎士が続いた。
マルスの鐙（あぶみ）が愛馬の横腹を蹴ったとき、マリーシアもまた猛然と走り出していた。
さらに若手の騎士たちとジェイガンが続き、そのあとを一五名の歩兵部隊が追った。
襲ったのは、鎖かたびらや鎧で武装した二〇騎ばかりの山賊の一味だった。

集落のほぼ中央に小さな聖堂があり、その前に広場がある。
その広場で頭領とおぼしき者が声を荒げながら馬上から指示し、松明を持った手下どもは馬を下りて民家を襲っていた。
逃げ惑う悲鳴が民家のあちこちからあがった。
そのときだった。闇を裂いて怒濤のような蹄音が接近してきたのは。
「な、なぜだ!?」
不意の出来事に、頭領は驚きと戸惑いを隠せなかった。
集落を襲撃してもアカネイア帝国軍は手を出さずに丘の上の軍営から見守っているものと山賊は勝手に踏んでいたのだ。
接近する騎士団の姿が闇のなかに見えてきても、頭領には、接近してくる騎士団の鎧の色や騎士が掲げている国旗がどこのものか、見分ける余裕はなかった。
先頭のマルスは山賊の一味と見るや、アリティア王家を継ぐ者だけに帯剣が許されている秘剣レイピアをかざした。
レイピアの柄には王家の紋章であるファルシオンの神剣の像が刻まれており、鏡のように青々とした長くて鋭い両刃は、今にも油がしたたりそうな光沢をしている。
「引けーっ!」
頭領が叫んだとき、マルスの馬が瞬時にその横を駆けぬけた。

同時に、閃光が鋭く宙を切り裂いた。
頭領は悲鳴をあげながら馬上にうずくまった。
だらりと垂れさがった右腕を左手で押さえている。
鎖かたびらが切れ、そこからおびただしい鮮血がしたたっていた。
だが、傷は骨まで達していない。それで充分だった。
マルスが他の山賊へ馬の向きを変えたときには、すでに山賊と騎士団との入り乱れての激しい戦いが始まっていた。
腕に自信のある凶暴な山賊どもだが、歴戦の戦士が相手では分が悪かった。
アランの銀の槍が敵の肩や腕を鋭く切り裂き、ゴードンの弓矢とドーガの槍が敵の股や足を鋭く突き刺した。
だが、腕の未熟な若い騎士たちは、山賊どもの攻撃をかわすのが精一杯だった。
やがて、集落に雄叫びが聞こえてきた。
騎士団のあとを追った歩兵部隊が集落のはずれまでやって来たのだ。
動揺した山賊どもは慌てて傷を負った仲間を連れて馬で逃げ、アランたち騎士団はすかさず追跡した。
部隊の到着と入れ替わりに、蹄音の轟きが遠くへ消えると、集落に静寂が戻った。
マルスとジェイガンを集落の人々が安堵の顔で遠巻きにしている。

そのなかにマリーシアと昨夜会った老婆の姿もあった。
いつの間にか、東の空がうっすらと明るくなっていた。
長老が礼を述べようとするのを制してマルスが尋ねた。
「被害はどうですか？　怪我人は？」
長老は村人を見回すと、村人たちは一様に首を横に振った。
なかには首を横に振る代わりに笑顔を見せる者もいた。
「どうやら心配ないようです」
長老がほっとして答えると、
「それにしてもなんと大胆なやつらだ」
ジェイガンは呆れて嘲笑した。
「われわれが近く軍営を張っておるというのに村を襲うとは」
「おそらく、やつらはマルスさまたちをアカネイア軍と間違えたのでしょう」
「アカネイア軍と？」
「実は……山賊や盗賊団に町や村が襲われても、ラング将軍やアカネイア軍は見て見ぬ振りをして、なにもしてくれないのです。ですから、アカネイア軍が近くにいても、今のように平気で襲撃してくるのでしょう。おそらく、やつらはあの砦が戦場になると思ってここまで来たのでしょうが、なかなか戦闘が始まらないので、業を煮やして村を襲ったのかもしれま

せん。なかには、アカネイア軍と手を組んでおる山賊や盗賊団もおるという噂です……」

「なるほど」

ジェイガンはマルスを見て溜め息をついた。

「グルニアを完膚なきまでに叩き潰すには、山賊や盗賊団を野放しにした方が結果的には手間が省けてよいということですか。ラングの考えそうなことですな」

「それより、深追いして大丈夫なのでしょうか？」

長老は心配そうに蹄音が消え去った北の山を見た。

そのころ、騎士団は北の山の谷にいた。

騎士団はこの谷まで山賊どもを追いつめ、再び戦いを交えたが、山賊どもがみな深手を負って散り散りに逃げ去り、ほっと一息ついたところだった。

だが、ただひとり返り血を浴びて胴震いしながら立ち竦んでいる若い騎士がいた。

ルークである。そして、その足元で血塗れの山賊が息絶えていた。

馬上から振り落とされたルークが死にもの狂いで応戦し、気がついたら手槍で敵の喉元を突き刺していたのだ。

初めて人を殺し、ルークは極限の心理状態のなかにいた。

やがて恐怖が消え、胴震いが止まると、

「お、お、おい、や、やったぜ！」

異様なほど興奮してライバルである同期のロディに叫んだ。
「おまえはどうだったんだよ!?　殺ったのか!?」
ロディが首を横に振ると、
「へへっ!　ざまーみろっ!　まずはおれの勝ちだなっ!」
「はしゃぐんじゃねえっ」
いきなりアランの平手がルークの頬に飛んだ。
「な、なにするんですか!?」
アランは不満げな顔のルークを睨みつけてたしなめた。
「初めての実戦だから興奮するのはわかるが、山賊といえども同じ人間だ。たとえ戦であろうが、人を殺したことには変わりはないのだからな」

5

重く垂れこめた鉛色の空からふわりふわりと白いものが舞い降りてきた。
遠征隊は谷川に沿った険しい道を進むと、やがて谷川を離れ、裸の木々と地肌が剥き出しの斜面に囲まれた急峻な道をのぼり始めた。
マルスたちが山賊を追いやってからすでに二時が過ぎていた。

そして、集落を出発して半時後、急峻な道が切れると、目の前に砦が現れた。
マルスはそこで遠征隊を止めた。
そこから門まで二〇〇歩あまりしかない。
砦の大きさはアリティア城の宮殿ほどもないが、石造りの高い塁壁に囲まれたその砦の背後には、切り立った崖が巨大な壁になって敵の侵攻を拒んでいる。
また、砦の前は深い自然の濠になってい、こちら側と砦を阻んでいる。
砦に接近するには、今来た道しかないのだ。
自然の地形をうまく利用して造られた強固な砦だった。
砦は不気味なほどしんと静まり返っている。
だが、城門や塁壁の上の狭間から弓を構えた兵士たちの緊張した姿が見える。
息を殺して遠征隊の動きを見つめる兵士たちの緊迫感がひしひしと伝わってくる。
あと四、五〇歩でも進むと、弓の射程に入る。
そこまで接近したら一斉に攻撃をしかけて来るつもりなのだ。
その一瞬に、全神経を集中させているのだ。
しかし、遠征軍は戦う態勢を敷いていなかった。
武器を構えるでもなく、ただ砦に対峙している。
アランが高々とアリティア国旗を掲げると、

「われわれはアリティアの騎士団だっ！」
大声で砦へ向かって叫んだ。
続いて、ゴードンが砦へ向けて長弓を構えると、矢をつがえ、力いっぱい引いた。
鏃と箆の継ぎ目の口巻には、ロレンス将軍宛の手紙が結わえられている。
次の瞬間、矢は音を立てて雪空を切り裂いた。
やがて矢は、放物線を描いて、城門と主塔の間に消えた。
待つこと、半時。砦からはなんの反応もなかった。
相変わらず砦の狭間から兵士たちが弓を構えて遠征隊の動きを見つめている。
雪はさらに密度を増し、いつの間にか騎士たちの鎧兜に綿毛のように積もっていた。
着いたときには砦のある山の中腹から下方の集落がはっきり見えたが、今は雪の白い帳のなかにその風景が吸収され、消されようとしていた。
矢文を受けてから半時、この間に将軍ロレンスがなにを考え、なにを決意したかを、このときマルスは想像もしていなかった。
そして、自分のいたらなさが悲劇の引き金を引いてしまったということも——。
「それにしても遅いですな……」
ジェイガンが言ったとき、砦の狭間にいた兵士たちが構えていた弓を下ろした。
そして、おもむろに砦の門の跳ね橋が下りた。

「……！」
マルスはジェイガンと顔を見合わせると、馬の横腹を蹴った。
あとにジェイガンがひとり続いた。
残りの騎士たちはその場で待機している。
砦の門を潜ると、中庭に出、そこでマルスたちは下馬した。
中庭の奥に主塔があり、その一階の広間で、ロレンスがマルスとジェイガンを迎えた。
ロレンスは白髪で、ラング同様、白髯が口から顎、頬まで埋めている。
また、若いころ視力を失ったという右目には黒い眼帯をしていた。
だが、頬はげっそりとそげ落ち、血色が悪く、疲労の色が濃かった。
ジェイガンとほぼ同じ年齢なのに、一〇歳も老けて見えた。
「敵の援軍が来たという情報を聞いておりましたが、あなたでしたとは……」
ロレンスはじっと左目でマルスを見つめた。
その目に悲しみの色が強く宿っていた。
「オグマはどこにいるのですか？」
マルスが尋ねると、
「三日前、ラングを葬ると告げて砦を出ました」
「ラングを葬る？」

「このままでは、砦が落ちるのは時間の問題。食料庫も底をついている。ラングを葬ってアカネイア軍を混乱させる以外われわれの生きのびる道はない……そう告げて……」
「そうですか……」
「それにしても残念です。こんな形であなたと再会するようになるとは……」
「でも、わたしはあなたと戦うつもりはありません。村の人たちからラング将軍がこのグルニアでどんなひどいことをしているかを聞き、驚いているところです」
「あなたの気持ちはありがたい……しかし、仮にもあなたはアカネイアの援軍……」
「でも、だからといって……」
「ラングの命令に逆らうおつもりか？」
ラングからどのような指令を受けてマルスが砦に来たのか、その内容を聞かなくても、ラングの性格をよく知っているロレンスには容易に察しがついた。
また、ラングの指令に従わざるをえないマルスの苦しい立場もよく理解できた。
「それではあなたの立場がなくなりますぞ。ひいては、アリティアへも影響が及びます。そして、アリティアの国民へも」
矢文を受けてからロレンスが考えたのは、まずそのことだった。
その上で、最良の方法を選ぼうと——。
「ラングをあなどってはいけませぬ」

「それでは、どうしても戦うと……」
ロレンスは首を横に振った。
アカネイア軍が相手なら、徹底的に抗戦し、いさぎよく散る覚悟ができている。
だが、ロレンスにはマルスと戦うつもりは毛頭ない。
戦わないとなれば、取るべき道はひとつしかなかった。
そして、すでに腹は決まっていた。
「では、どうしろと？」
「それはわたしが決めること」
ロレンスは毅然として言った。
「こう見えても、伝統あるグルニア黒騎士団の血が脈々とこの体に流れております。グルニア騎士道の精神と名誉と誇りはだれにも負けませぬ。それにしても、不思議なものですなあ……」
ロレンスはマルスから視線をそらして窓の外を見た。
「あなたと会ったのも、こんな雪の日だった……」
先の戦いでグルニアへ侵攻したマルスは、王都グルニア城郊外で、ロレンスと初めて会っている。
「グルニアにしては珍しく早い初雪でした……。あの雪の夜、あなたと一緒に戦うことを決

め、国王を説得しにわたしは城へ戻った……。実は、今まで秘密にしてきましたが……あのとき、国王へお土産があったのです」
お土産とは、ドルーアの人質としてカダインへ送られていた王子と王女のことだった。
ロレンスの説明によれば――。
グルニアがドルーア帝国に併合されたのは、昨夜マルスが集落の長老から聞いた通り、人質にとられた王子と王女が殺されるのを国王が恐れたからだという。
ところが、マルスと会う直前にロレンスは、ロレンスとマルスを仲介したウェンデル司祭から、カダインでグルニアの王子と王女を助け出し、安全なところへ匿ったと知らされたのだ。
それは、マルスたちがカダイン神殿でドルーア軍を破った直後のことだったが、ウェンデル司祭はドルーア軍やガーネフにそのことが知られるのを恐れ、ロレンスに告げるまで、だれにも秘密にしていたのだ。
ロレンスはさっそくそのことを国王に報告した。
そのことを聞けば、国王はドルーア帝国へ反旗を翻すものとロレンスは思っていた。
だが、国王は〈それはグルニア黒騎士団を味方につけるための反ドルーア軍の陰謀だ〉と言い張って、信用しようとしなかった。
そこで、ロレンスとウェンデル司祭は、王子と王女の身の安全を考え、平和なときがくる

まで、二人だけの秘密として隠し通してきたのだという――」
「戦後、グルニアは焦土と化しておったので、そのままウェンデル司祭に預けておいたので
すが、グルニアもいくらか落ち着いてきたので、昨年の五の月に、司祭にお二人を連れて来
ていただいたのです。ちょうど司祭が故郷のホルム海岸へ帰るついでだったものですから」
「ホルム海岸？」
「マケドニアの南西にある地方です。そこのパセロという村だと言ってましたが」
「実は、今度の反乱の発端は、その二人が生きていたことがハーディンに知られたからだと
村人から聞きましたが、ほんとうなのですか？」
「ええ……」
「なぜハーディンが二人のことにそんなにこだわるのですか？」
「おそらく、このグルニアをアカネイアの領土にするために、グルニア王家の血を引く者を
抹殺して、グルニア王国の再建の根を絶とうとしたのでしょう。そのためにラングを差し向
けたのです。ラングはグルニア人を徹底的に苦しめることによって、われわれを巧みに挑発
し、われわれを反乱軍に仕立てあげたのです。そして、反乱軍制圧を口実に、攻撃をしかけ
てきたのです。だから、われわれは立ちあがったのです……」
「しかし、ハーディンがそんなことを考えているなんて……」
「にわかには信じられぬのも無理はない。だが、ハーディン殿はすっかり人間が変わってし

まった。もうあなたの知っているハーディン殿ではない……」
「ニーナ王妃はハーディンの企みを知っているのですか？」
「わかりませぬ。マルス殿……」
ロレンスは改めてマルスを見据えた。
「あなたに、ひとつだけお願いがあります。この砦に、グルニア王家の幼い王子と王女が匿われている。どうか、その子たちを助けてほしい……」
「はい……」
マルスは頷いた。だが、頷きながらも、なぜ今ロレンスがそのようなことを言うのか、その意味を測りかねていた。
「どうか……」
ロレンスは再びそう言って頭を下げると、奥の部屋へ消えた。
マルスは、いやジェイガンも、ロレンスが王子と王女を連れて来るものと解釈した。
だが、ロレンスが部屋へ消え、数呼吸もしないうちに、
〈もしや――!?〉
マルスはさっと顔を青ざめてジェイガンを見た。
ジェイガンもまったく同じことを考えたようだ。
ロレンスの言った意味をやっと理解したのだ。

「将軍！」
マルスとジェイガンは慌てて部屋へ飛びこんだ。
ちょうどロレンスが胸に短剣を突き刺して床へ崩れ落ちたところだった。
短剣の柄を逆さ握りにし、刃先を左胸へ向け、ひと突きにしたのだ。
血飛沫(ちしぶき)が一面に飛び、さらに床を浸した。
「ロレンス将軍！」
思わずマルスが駆け寄って抱き起こした。
矢文を受け取ってから半時の間に、ロレンスは自ら命を絶つことを決断したのだ。
ラングの命令でマルスが砦へ来たということを知ったとき、さすがのロレンスも大きな衝撃を受けた。
同時に、マルスをそのように仕向けたラングに激しい怒りを覚えた。
ロレンスにはラングの思惑が手にとるようにわかった。
マルスがラングの命令に従えばそれでいいし、背(そむ)いたら反逆者に仕立てればいい。
だが、正義感の強いマルスの気性からすれば、結果として命令に背くことになることは火を見るより明らかだ。
ラングはそこまで読んでマルスを砦へ送ったのだ。
そして、マルスや遠征軍はアカネイア軍の攻撃の目標にされ、戦火はグルニアだけでなく

海を越えてアリティアにも飛ぶ。
　だから、自ら命を絶つことが、マルスの窮地を救う最善の策だと考えたのだ。
　取り返しのつかない最悪の事態になって、マルスはやっとそのことに気づいた。
「将軍！　なぜ早まったことを！」
「い、いい……こ、これで……い、いいのですよ……。い、いずれ……この……と、皆が
……お、落ちるときには……こうなった……はず……。こ、この命……す、少しでも……役
立てれば……」
　ロレンスは苦しそうに顔を歪めながらかすかに微笑むと、
「お、王子と……王女を……」
　あえぎながらやっと聞きとれるような声で言った。
　それっきりロレンスは動かなくなった。
「将軍！　ロレンス将軍！」
　マルスはロレンスを激しく揺すった。
　だが、ロレンスは二度と応えなかった。
　マルスの目から止めどもなく涙が流れてきた。
〈自分のいたらなさと配慮のなさが将軍を殺してしまった――〉
　悲しみと悔恨に、マルスは全身を震わせて嗚咽した。

そして、激しく自分を責めていた。
マルスはまず砦へ赴いてロレンスと話し合ってみようと思った。
それから対策を講じても遅くはないと思った。
だが、そのことが皮肉にもロレンスを窮地に追いこみ、結果として死を選択させることになるとは、そのときマルスには考えも及ばなかった。
ロレンスの立場や状況を考慮せず、自分たちの側からだけ物ごとを測っていたのだ。
そのことが悔しかった。情けなかった。
ロレンスがマルスの立場を考慮したのと同じぐらい、マルスがロレンスの立場を考慮すれば、砦に来ずに別の策を講じることも可能だったのだ。
そうすれば、少なくともロレンスは自らの手で命を絶つことはなかったはずだ。
いたらなかった自分への怒りと、マルスやロレンスをここまで追い詰めたラングへの怒りに、マルスは全身を震わせて嗚咽した。
ジェイガンも拳（こぶし）を握りしめ、涙を堪えていた。
そして、マルスと同じように自分を責めていた。
「申し訳ありませぬ……わたしがついていながら……」
そう言って唇を嚙（か）むのがやっとだった。
そのとき、突然、中庭に蹄音が轟き、蛮声と悲鳴があがった。

驚いてマルスとジェイガンが中庭の方向を見たとき、血塗れの砦の兵士がマルスがいた奥の部屋へ倒れこみ、それを追うようにラングと親衛隊がその部屋へ乱入して来た。
広間を慌ただしく走り回るアカネイア軍の怒鳴り声や騒々しい音が聞こえる。
主塔へ雪崩こんだ兵士たちが一部屋ずつ捜し回っているのだ。
隙間をぬって奇襲したアカネイア軍のあまりの手際のよさに、マルスは愕然とした。
降りしきる雪のなかに蹄音が轟いたかと思うと、約一六〇騎のアカネイア軍が怒濤のように砦の前に押しかけて来たのだ。
そして、慌てて制しようとしたアリティアの遠征軍を五〇騎の兵がすばやく取り囲み、残りの一一〇騎は勢いをつけたまま跳ね橋を渡って中庭へ突入したのだ。
不意をつかれた砦の兵士たちはなすすべもなく槍や剣を突きつけられた。
「ほほおっ」
ラングは床に横たわっているロレンスの死体を見下ろしながら意外そうな顔をした。
「ロレンスは自ら命を絶ったのですな」
「ラング将軍!」
マルスはラングを睨みつけた。
「砦をわたしに任せて、逃げた反乱兵を追っていたのではなかったのですか!?」
マルスは言いようのない屈辱感を覚えていた。

体よくラングに利用されたとしか思えなかったからだ。

マルスがロレンスと話し合いを申しこむことも、そしてロレンスがそれを受け入れることも、すべて計算ずくで動いていたとしか思えなかった。

そして、ころあいを見計らって一気に攻めこんできたのだ。

「正直なところを申すと……」

ラングはマルスの心を玩ぶように残忍な笑みを浮かべると、

「あなたがその手でロレンスの首を撥ねるところを、この目で見たかったのですよ。あなたのアカネイアへの忠誠の証を、この目で確かめたかったのです」

「なんですって!?」

「ふっははは。冗談ですよ。実は、あなたに急用があって駆けつけたのだ」

と、そこへ部隊長とおぼしき兵が報告に来た。

「将軍、反乱軍の兵は残らず捕らえました。それに、グルニア国王の王子と王女も」

はっとなってマルスはジェイガンと顔を見合わせた。

「よし、捕虜と一緒に城へ連行しろ」

「待って下さい将軍！　子供たちはわたしに任せてくれませんか!?」

「任せる？　はて、それは奇怪なことをおっしゃる」

「わたしはハーディンに会いに帝都パレスへ行こうと思う！　せめてそれまででも！」

「ならぬっ。捕虜や子供らは、二度とわれらに歯向かわぬよう見せしめのために民衆の目の前で処刑せねばならぬのだからなっ」
「なにもそこまでしなくても!」
「それよりも、あなたには直ちにマケドニアへ行ってもらう。マケドニアで軍の反乱が起き、王女が捕らえられたのだ」
「なに、ミネルバが!?」
「皇帝からあなたへ王女を助けるよう命令が下された。急用というのはそのことだ」
親衛隊の二人がロレンスの死体を運び、ラングが立ち去ろうとした。
「待ってくれ将軍! ミネルバを助けるためにマケドニアへは行く! だから、ハーディンに会うまで子供たちをわたしに——!」
「くどいっ! ならぬと言ったらならぬっ!」
吐き捨てるように言ってラングは踵を返した。
「将軍!」
「マルスさま!」
追おうとするマルスをジェイガンが慌てて引き止めた。
「離してくれ、ジェイガン!」
「落ち着いて下さい! ここでラングと争えば、われわれも反逆者にされてしまいます!

それに、今のわれわれにはラングと戦うほどの戦力はないのです！」
「しかし……！」
「とにかく、今は我慢を！　マケドニアへ行き、ミネルバ王女を救出できれば、マケドニアはきっとわれわれに力を貸してくれます！　今は我慢して、マケドニアへ行きましょう！　ロレンス殿の死を無駄にしないためにも！」
やがて、アカネイア軍が引きあげると、砦に静寂が戻った。
雪はさらに密度を増し、すでに踝の高さまで積もっている。
音もなく、雪は静かに降り続けた——。

第3章　マケドニア反乱

1

ドルーア本島の東側を、険しい二つの山脈が南北に貫いていた。
北部のドルーア山脈と南部のマケドニア山脈だ。
三の月の五の日、故国アリティアを出発してからちょうど一カ月後のこの日、遠征隊は北にドルーア山脈を、南にマケドニア山脈を見ながら、王都マケドニア城を目指してマケドニア東街道を西へ向かっていた。
マケドニア東街道は、マケドニア王国の幹線街道のひとつで、東海岸の港町ギルバとマケドニア城を結んでいる。
二の月の晦日(みそか)、遠征隊はアカネイアの軍船でグルニアの旧王都の郊外にあるオルベルン港を出港、グルニア本島とドルーア本島を隔てているグルニア海峡を渡った。

そして、三日前に東海岸のギルバに着くと、そのまま東街道を西へ進んで来た。
街道筋にはたくさんの町や村や集落があったが、まったく活気がなかった。
だが、それはクーデターの直接の影響とは思われなかった。
人々は、先の戦争の深い傷痕（きずあと）からまだ立ち直れずに、飢えと貧しさに耐えながらひっそりと暮らしているのだ。
また、不思議なことに、マケドニア軍の兵士をひとりも見かけなかった。
マケドニアもまた、必要以上の傭兵や志願兵を雇う余裕がまったくないのだ――ミネルバの祖国再建の苦労を想像しながらマルスはそう思った。
アリティアは他の国に比べて、順調に再建への道を歩んでいるが、それも国土が狭いからこそ、可能だった。
だが、マケドニアはドルーア本島の南半分を占めるこの広大な国だ。
約四五〇の町や村があり、八五万のマケドニア人が暮らしている。
国土はアリティアの六倍、人口は二倍ちかくある。
それだけに、滅亡寸前だった祖国を再建するまでには長い時間を必要とするのだ。
その苦難の道を歩み出したばかりなのに、軍がクーデターを起こした。
クーデターの原因はわからないが、ミネルバの心情を思うと、心が痛んだ。
かつてアカネイア王国の一地方だったマケドニアは、ドルーア戦争の勃発（ぼっぱつ）とともに、ドル

ーア帝国に併合吸収された。
そして、ドルーアの竜人族によってマケドニア人は奴隷同様の生活を強いられた。
食べ物や着る物もろくに与えられず、女子供までが強制労働にかり出され、多くの人が飢えと過労から命を落とした。
だが、そんな悲惨な状況のなかで、ひとりの若者が立ちあがった。
若者の名をアイオテ・ギルシアと言った。
アイオテは義勇隊を組織すると、ドルーア帝国に勇敢に戦いを挑んで戦い続けていた英雄アンリと手を組んで、ドルーア帝国を倒した。
その後、アイオテは時代のアカネイア国王カルタスにその功績を認められ、マケドニア地方を任されて、マケドニア王国を建国した。
アカネイア暦五〇三年のことだった。
義勇隊はその後竜騎士団と名を変え、マケドニア王国の発展に尽くした。
その後、マケドニアは強国として、竜騎士団とともに世界に名を馳せた。
ところが、ドルーアの地に暗黒竜王メディウスが復活して先の戦争が始まると、アイオテの子孫でアイオテの再来とも言われたミシェイル王子が、妹の王女であるミネルバの反対を押し切ってドルーア帝国に加担し、世界制覇の野望に燃えて各国へ兵を派遣した。
赤き竜騎士として知られていた王女ミネルバも仕方なく兵を率いてアカネイアへ遠征した

が、ドルーア軍の攻撃命令を無視して、ドルーア軍に人質にとられていた妹マリアの救出を試みたため、ドルーア軍に捕らえられてしまった。

だが、マルスに救出されると、ミネルバはマルスと行動をともにし、故国マケドニアで兄ミシェイルとの宿命の戦いに臨んだのだ。

そして、壮絶な戦いの末、マルスたちが強力な竜騎士団を打ち破ると、ミネルバは自らの手でミシェイルの命を奪った。

その後、ドルーア帝国が壊滅して平和が戻ると、ミネルバは祖国再建のためにマケドニアへ帰って来たのだったが――。

港町ギルバを出発して五日目の夜のことだった。

遠征隊はマケドニア城まであと三日の行程のところまで来ていた。

焚(た)き火を囲みながら、乾パンと干し肉と塩分のきつい具のほとんどないスープで夕食をとったあとだった。

「マルスさま！」

突然、東の空を指差しながら警備兵が叫んだ。

三日月を背に、白いペガサスが優雅に翼を広げて野営に向かって飛んで来る。

その馬上に、騎士の姿がある。

アリティアの騎士たちはいつでも対処できるように身構えた。
だが、ペガサスが野営に接近すると、歴戦の戦士たちは互いに顔を見合わせた。
風になびく騎士の長い髪は、女性のそれだったからだ。
しかも、見覚えのある白い鎧をまとっている。マケドニアの白騎士団のそれだ。
ペガサスが騎士たちを分けるようにして、マルスの前に着地すると、
「カチュア!?」
歴戦の戦士たちは顔を輝かせて美貌の白騎士に駆け寄った。
王女ミネルバの側近である白騎士三姉妹の次女のカチュア・タルサだった。
カチュアを知らない若い騎士たちは、アリティア城に残っているエストそっくりの顔を呆気にとられて見ている。
タルサ三姉妹は背かっこうも似ているものだから、無理もなかった。
「お久し振りでございます」
ペガサスから下馬したカチュアは懐かしそうにマルスを見あげた。
〝トライアングルアタック〟で名を覇せた長女パオラ、次女カチュア、末妹エストのペガサスナイト三姉妹は、王女ミネルバとともに先の戦争でドルーア軍を恐怖に落とし入れた。
その後もカチュアはマルスと行動をともにし、戦後ミネルバと一緒に祖国再建のためにマケドニアへ帰って来た。

「でも、カチュアがどうしてここへ？」
マルスはカチュアを焚き火に誘いながら尋ねた。
「この先の南の村で、アリティアの遠征隊がマケドニア城へ向かって行ったと聞いたので、慌てて追って来たのです」
「マケドニアの城でクーデターが起きてあのミネルバが捕らわれたというのは本当なのか？」
「はい。ちょうど二〇日前の夜明けのことです。突然、リュッケ将軍が指揮する反乱軍が蜂起し、ミネルバさまと妹のマリアさまを捕らえて、城を破壊したのです。不意をつかれて、わたしたちは逃げるのが精一杯でした」
「じゃあパオラは？」
「城を出るまでは姉と一緒でしたが、そのあとははぐれてしまいました。逃げるときの戦いでわたしは右腕に傷を負ったので、とりあえずこの先の村にいる親戚を頼って逃げて来たのですが、おそらく姉は城の近くのどこかへ潜んでいるのではないかと思います。傷もよくなったのでそろそろ姉たちを捜しに城の近くまで戻ろうと思っていた矢先、マルスさまたちの噂を聞いたものですから。それより、マルスさまたちこそどうしてマケドニアへ？」
マルスは今までの経緯をかいつまんで話した。
カチュアは驚いて聞いていたが、話が終わると、
「そうですか……ロレンス将軍が……」

と言ったきりしばらく口を噤んだ。
「ところで、なぜクーデターが起きたんだ？」
「ミネルバさまは帰国すると、先の戦争で国民を苦しめた将軍たちを追放し、軍の改革につとめました。でも、実力者のリュッケ将軍が、ミネルバさまのやり方にことごとく反対して……。おそらくそれが原因ではないかと……」
アルスト・リュッケは先の戦争でマケドニア軍の四天王と呼ばれた男だが、マケドニア軍が不利になると、真っ先にマルスの側に寝返った前歴の持ち主だ。
「リュッケ将軍はどの程度軍を押さえておるのかな？」
マルスに代わってジェイガンが尋ねた。
「騎士団は完全に将軍に掌握されています。でも、歩兵部隊の兵士たちは今のところおとなしく従っているだけなのではないでしょうか。兵士たちのなかには将軍を露骨に嫌っている者もたくさんいましたから」
「兵士の具体的な数字は？」
「クーデターが起こる前の数字ですが、竜騎士団はおよそ一二〇騎。内訳は、飛竜部隊、槍部隊、弓部隊、傭兵部隊がそれぞれ三〇騎。その他に歩兵部隊が三六〇名。クーデター後にマケドニア城は破壊されたので、それらが、リュッケの居城の他に五つの砦に配置されていました」

飛竜部隊はマケドニア軍にしかない特殊部隊だ。
飛竜はもともとドルーア地方に生息していたドラゴンで、鋭い二本の角と、紅蓮の炎を吐く大きな口と、自由に空を飛ぶことができる巨大な両翼と、強固な背びれを持っている。
体もペガサスよりひと回り大きい。
だが、恐ろしい容姿の割には、人間に従順な怪獣として知られていた。
昔からドルーアの竜人族は、この飛竜を軍馬の代わりに利用してきたのだが、ドルーア帝国が滅び、マケドニア王国が建国されると、初代国王のアイオテが大量の飛竜を捕獲してマケドニアへ連れて来た。
そして、強力なマケドニア竜騎士団を作りあげたのだ。
「たしか、ここから三時ばかり行った街道筋の森にも砦があったはずだが」
「コトルの砦です」
ジェイガンの問いに、カチュアは地図を取り出して、その位置を指差した。
先の戦争では、このコトルの砦での攻防戦はなかった。
先の戦争で、マケドニア軍が各国へ派遣した兵の数は七〇〇〇とも八〇〇〇とも言われていた。
だが、それらの兵が各国での戦いに破れて離散したため、マルスたちがマケドニアに侵攻して来たときには、マケドニアの守りが手薄になっていた。

そこで、ミシュイルは五つの砦を捨て、全軍を城に集めて守りを固めたのだ。
「コトルの砦は、クーデター後、先の戦争でリュッケ将軍の忠臣だったルーメル司令官が守りを固めていると聞いています」
「では、そのコトルの砦を突破しなければリュッケの居城へは行けぬのだな」
「はい。砦は検問所も兼ねていますし、砦の周りは一度踏みこんだら二度と戻れないと言われている原生林の深い樹海が広がっていますから」

2

翌日、遠征隊は夜明けとともに東街道を西へ向かった。
荒涼とした山間をぬけると、やがて街道は原生林ばかりの樹海地帯へ入った。
この樹海にぽっかり穴が開いたような草原があり、その中央に砦がある。
そして、砦からは南北に長くて高い塁壁が樹海まで築かれていて、この草原を東西に分断している。
砦のある草原へあと半時で着くというところまで来ると、遠征隊は行軍をやめた。
昼の間、樹海に身を隠し、夜を待って攻撃するためだ。
夜討ち朝駆けは戦いの常識である。

砦に接近するためにも、上空からの奇襲作戦に威力を発揮する飛竜部隊の威力を半減させるためにも、見通しの悪い夜の方がいいのだ。
隊ごと身を隠せそうな地形を探し始めた直後だった。
突然、太陽の光を遮って遠征隊の上に大きな影が落ちた。
上空の宙を切り裂く襲撃音に驚いて見あげると、飛竜の群れが接近していた。
二〇騎の飛竜部隊だった。
部隊は一〇騎の編隊に分かれ、交互に急降下しては紅蓮の炎を吐き散らした。
急襲に遠征隊は混乱し、歩兵部隊はばらばらに散りながら、原生林へ逃げこんだ。
だが、マルスや騎士たちは馬から飛び下りて馬を逃がすと、その場に踏みとどまって襲いかかる飛竜に立ち向かって行った。
ゴードンとライアンの兄弟は、原生林の巨木の幹を楯(たて)に、飛竜部隊に矢を放った。
急降下して来た一頭の飛竜がゴードンの矢を眼に受けて、鈍い音を立てながら頭から地面に落ち、血飛沫を散らして倒れた。
急上昇しかけた飛竜騎士の肩をライアンの矢が貫き、飛竜の背から落下した騎士は無残に地面に叩きつけられた。
そのとき、凄まじい蹄音が街道に轟き、前方の原生林の陰に待機していたマケドニア軍の三〇騎の槍部隊と傭兵部隊が強襲してきた。

遠征隊の歩兵部隊が原生林から飛び出し、激しい戦いになった。

マルスが秘剣レイピアをかざして猛然と敵の群れに突進し、すかさずアランとドーガが槍をかざしてそのあとを追う。

悲鳴があがり、血飛沫が飛び、敵の騎士たちは次々に落馬した。

若いルークやロディも、腕は未熟でも、気迫だけは歴戦の戦士に負けていなかった。

と、ゴードンの背後の薄暗い原生林を疾風のように走りぬけるひとつの影があった。

影は絡み合った原生林の根っこや突き出た岩を高々と飛び越えて、ゴードンの横に現れたかと思うと、持っていた弓ですばやく矢を射り、飛竜の喉元に命中させた。

二二、三歳の強靭な体格の若者だ。息の乱れはひとつもない。

ゴードンに勝るとも劣らない見事なその腕前に、ゴードンは思わず見惚れた。

若者は、鎖かたびらの上に、マケドニア王家の紋章である竜の像の意匠が染めぬかれた粗末な軍服をはおっている。

飛竜部隊の編隊から離れた上空で戦況を見つめている一騎の飛竜がいた。

五〇がらみの将で、眼光鋭く、鷲鼻(わしばな)で、頬がこけている。

砦を指揮する司令官のガサト・ルーメルだ。

遠征隊がマケドニアに上陸してからの情報を得ていたルーメルは、砦に接近するのを手ぐ

すねひいて待ち構えていたのだ。
そして、二〇騎の飛竜部隊と三〇騎の槍と傭兵部隊があれば、アリティアの少人数の遠征隊など簡単に壊滅できると高をくくっていた。
だが、その考えが甘かったことに、ルーメルは戦ってみてやっと気づいたのだ。
不敵な笑みを浮かべていたルーメルの顔はいつの間にか青ざめていた。
戦況は一目でわかった。遠征隊が圧倒的に押しまくっている。
なかでも、マルスやアランやドーガの活躍が一際目立つ。
「くそっ！」
ルーメルは舌打ちすると、鋭く指笛を鳴らした。

指笛の音が戦場に届くと、マケドニア軍は一斉に退散を始めた。
やがて、深手を負った一五騎を連れてマケドニア軍が砦の方向に消えると、地面には八頭の飛竜が無残な姿で息絶えていた。
そのうちの三頭はマケドニアの軍服を来た謎（なぞ）の若者が一発で射止めたものだ。
「ウォレン!?」
その若者を見てカチュアが叫んだ。
「なによ、その恰好!?　いつ軍に入ったの!?」

「強制徴兵されたのよ。他の猟師仲間とな」
「いつ!?」
「クーデターのあとさ。だが、やつらがあんまり威張り散らしてるから、気に入らなくてな。そのうち一泡吹かせてやろうと思っていたら、アリティアの遠征隊が制圧に来たっていうじゃねえか。これがいい機会だと思ってさ」
「じゃあ一緒に戦ってくれるのね!?」
「ミネルバさまやカチュアを敵に回して戦えねえだろ」
「よかった!」
カチュアはさっそくウォレンをマルスに紹介した。
ウォレン・スミラは猟師で、カチュアの幼友達だった。
マルスは微笑んで握手の手を差し出すと、ウォレンは、汚れた手を軍服で拭い、照れ臭そうにマルスの手を握った。
ウォレンの情報によれば、飛竜、槍、傭兵、各部隊二〇騎の計六〇騎と歩兵四〇名が砦を守っているという。
竜騎士団一二〇騎の半分を動員していたことになる。
だが、敵はさっきの奇襲作戦ですでに飛竜部隊八騎、槍と傭兵部隊一五騎を戦力として失っている。

その夜――。
コトル砦は遠征隊の攻撃に備え、総出で厳重な警備を敷いていた。
砦は南北に長い石造りの長方形の建造物で、そのなかは中庭になっている。
街道を東からやって来た通行者は東門を入り、この中庭で検問を受け、西門へぬけるように設計されている。
そして、この中庭を取り囲むように、砦の上は長方形の巡視路になっている。
この巡視路に竜騎士団が待機して、東の街道に目を光らせていた。
また、砦から樹海まで南北に長い塁壁がのびているが、この塁壁の上も巡視路になっていて、等間隔の距離をおいて弓や槍を持った歩兵が遠征隊を待ち構えていた。
黒い雲が東の空の三日月を覆い、砦一帯の草原がさらに暗くなったときだった。
突然、東の樹海から飛び出した数頭の騎馬が砦へ向かって疾走した。
先頭はアランである。そのあとに、ルークとロディの若い騎士が続いた。
砦は騒然となり、ただちに一二騎の飛竜部隊が出撃し、東門からは二〇騎の槍、傭兵部隊が出撃した。
飛竜部隊が目の前まで接近すると、アランたちは慌てて方向を変え、飛び出して来た樹海の方向へ逃げ出した。

アランたちは囮だった。
追った飛竜部隊に、樹海から闇を切り裂いて矢が放たれた。
樹海の巨木を楯に、ゴードンとウォレンとライアンの三人が鋭い矢を射った。
先頭の飛竜の眼に矢が命中し、飛竜は悲鳴をあげながら、一直線に樹海に突入し、凄まじい音を立てて巨木の幹に激突した。
すかさずゴードンが射、ウォレンが射、ライアンが射る。
三人の呼吸は見事に合っていた。
矢は間断なく闇を切り裂き、そのたびに飛竜の悲鳴が夜空へ轟いた。
アランたちは飛竜部隊の攻撃をかわしながら、再び砦へ向かって疾走し、飛竜部隊が追うと、すばやく方向を変えて、樹海の方向へ逃げる。
その飛竜部隊を再び矢が襲った。
やがて二〇騎の部隊が接近すると、アランたちは街道へ逃げ、街道を東へ進んだ。
二〇騎の部隊はなんの疑いもなく追走した。
街道の両側に樹海が迫ってきた。
何度目かのカーブを曲がったときだった。
アランたちが狭間を走りぬけると、樹海の両側から一斉に矢が放たれた。
一〇名の歩兵弓部隊が両側に分かれ、追跡して来たマケドニア軍を待ち構えていたのだ。

たちまち部隊から悲鳴があがり、傷ついた騎士たちは次々に落馬した。
アランたちは馬を止めて方向を変えると、槍をかざして、追跡して来た残りの部隊に突進して行った。
そのころ、砦は再び騒然としていた。
塁壁の南端の樹海に潜んでいたマルスが五名の歩兵槍部隊を率いて塁壁の上の巡視路にのぼると、攻撃して来た敵の歩兵を蹴散らしながら、一直線に砦へ向かったのだ。
そしてまた、塁壁の北端でも同じような光景が繰り広げられていた。
樹海に潜んでいたドーガが五名の歩兵槍部隊を率いて塁壁の上の巡視路にのぼると、敵の兵士を蹴散らしながら、砦へ向かったのだ。
巡視路の幅は三尋（ひろ）ばかりしかないから、左右、後ろを気にする必要がない。
前にいる敵兵だけを相手にすればいいのだ。
虚をつかれた敵の歩兵たちは、砦へ向かって逃げるしかなかった。
砦の本塔の上の巡視路で、飛竜に乗ったルーメルが顔を強張（こわば）らせながら戦況を見つめていた。
状況が不利になるたびに、ルーメルは何度も舌打ちをした。
中庭にまだ部隊が一〇騎残っていたが、手の施しようがなかった。
北と南から砦まで追われた兵士たちは、一〇騎の部隊に助けを求めるように巡視路の階段

を駆け下りて中庭へ雪崩こんだ。
そのとき、東の草原から蹄音が轟いてきた。
飛竜部隊を始末したゴードンたちだった。
さらに、街道からもうひとつの蹄音が轟いてきた。
追跡した敵の部隊を片づけたアランたちだ。
そのあとに一〇名の歩兵が続き、輸送部隊の荷馬車が続いた。
そのなかにジェイガン、マリーシア、ペガサスに乗ったカチュアの姿があった。
敵の兵士たちから諦めの大きなどよめきが起きたのと同時だった。ルーメルの飛竜が大きく羽ばたき、部下を見捨てて西の空へ逃げ去ったのは。
それを見た部隊や兵士たちも慌てて先を争って西門から飛び出して行った。
こうして、砦の攻防はほんの短時間で決着がついた。
この砦に、思いもよらぬ若い女性が捕らえられていた。
兵士たちが砦に残っていた武器や食料を探し出して中庭に集めていると、ひとりの兵士が地下牢からその女性を連れて来た。
「あっ……!?」
若い美しい女性を見て、マルスは一瞬自分の目を疑った。
先の戦争を戦いぬいた戦士たちも、信じられないような顔をしている。

「マルスさま……」
女性は憔悴(しょうすい)した顔をしていたが、マルスを見てやっと安堵の笑みを浮かべた。
「よかった……めぐり逢えて……」
故大司祭ミロアの娘で、魔道士のリンダ・ミロアだった。
先の戦いで、アカネイアの王都パレス近郊にあるノルダの市場で、マルスは奴隷商人に売られようとしていた男の子を救った。
それがリンダだった。ガーネフの手から逃れるために男の子に変装していたのだ。
その後、リンダはマルスと行動をともにし、戦後アカネイア王女のニーナとアカネイアへ帰って行った。
「どうしたんだリンダ!?」
マルスたちはリンダに駆け寄った。
「ニーナのそばでずっと暮らしていると思っていたのに」
「マルスさまにお会いしたくて、捜していたのです」
「ぼくに?」
「でも、マケドニアの兵士に怪しまれて、この砦に連れて来られて……。実は……」
兵士に預けていた革製のがっしりした箱を引き寄せると、
「ニーナさまからこれをお渡しするようにと言われて……」

おもむろに蓋を開けた。
「こ、これは!?」
マルスは思わずジェイガンと顔を見合わせた。
アカネイア国旗と同じ意匠の高貴な美しい楯が入っていた。
楯には黄金色の縁取りがしてあり、中央にやはり黄金色の燃え盛る炎の紋章がある。
その紋章から五つの方角に五個の台座のような飾りが彫られている。
アカネイア王家の家宝、紋章の楯だ。
この楯は、邪悪なる手から世界を救う者のみに与えられるものだと言い伝えられていて、先の戦争で、オレルアン高原でマケドニア軍を破ったあと、マルスはニーナからこの家宝の紋章の楯を託されたことがある。
「でも、なぜニーナはこれをぼくに?」
「わたしにはわかりません……。ニーナさまはなにもおっしゃらずに、ただマルスさまへ……とだけ……。でもなぜかとても悲しそうな目をされていました……。たぶん泣いておられたのだと思います……」
今この世界へ邪悪なる手がのびているとはとても思えなかった。
〈一体、ニーナの身になにが起きたのだろうか……？　いずれにせよ、この戦いが終わったらアカネイアへ行こう……〉

そう思いながら、マルスは栢を取り出して、把手を握った。
ぴたりと手に吸いついた。懐かしい感触だった。

3

マケドニア国の中央部になだらかな丘陵が広がっていて、この丘陵をはるか北方のドルーア山脈を源流とするドルーア川が縫うように流れている。
このドルーア川と東の山脈を源流とするマケドニア川が合流する台地に、荘厳華麗なマケドニア城と人口二万三〇〇〇の王都があった。
王都からは三方向に街道がのびていた。
東海岸の港町ギルバへ通じる東街道、ドルーア地方へ通じる北街道、南海岸の港町ソルテへ通じる南街道である。
王都の近郊に三〇もの町や村があり、そのほとんどがこれらの街道沿いにあった。
その中の一つにリュッケの居城もあった。
そして、王都から南街道を徒歩で一時ほど南下したところに、戸数八〇あまりの小さな村があり、村に一軒しかない宿屋の酒場兼食堂で、ひとりの男が沈んだ顔で人を待っていた。
先の戦争で、マルスと行動をともにした元盗賊のジュリアン・ミノザだった。

ジュリアンはアカネイアの港町ガルダの北方にある悪魔の山の盗賊団の一員だったが、盗賊団を裏切って、盗賊団に捕らえられていた若くて美しいシスターのレナ・クロードを牢から助け出して逃げ、追手に捕まりそうになったところをマルスに救出された。
そして戦後、レナについてマケドニアへやって来たのだ。
食堂はすでに店仕舞いをし、壁の燭台の蠟燭が一本灯っているだけだった。
と、遠くから蹄音が近づいて来たかと思うと、馬の止まる音がした。
ジュリアンが慌てて表へ飛び出そうとすると、それより一歩早く若い女性が戸を開けて飛びこんで来た。
美貌のその女性は白騎士三姉妹の長女のパオラだった。
パオラは、鎖かたびらの上にマケドニア王家の紋章である竜の像の意匠が染めぬかれた軍服をはおっている兵士を連れていた。
「すまねえ兄貴!」
とたんにジュリアンが土下座した。
兄貴と呼ばれた兵士はレナの兄のマチス・クロードだった。
先の戦争時に、レナがミシェイル王子の求婚を断ってマケドニアを出国すると、その戒め(いまし)のためにマチスは強制的に軍に入れられ、オレルアン王国へ送られたが、オレルアン草原での戦いでマルス側に寝返ると、そのままマルスと行動をともにし、戦後マケドニアへ帰って

来たのだ。
「この野郎！」
マチスはジュリアンの襟首を捕まえると、
「やめて！」
慌ててパオラが止めに入った。
「レナのことをあれだけ頼んだのにどういうことだよ！」
「すまねえ！」
ジュリアンはまた頭を下げた。
マケドニアの歩兵部隊は槍と弓と警備の三分隊で構成されていて、ミネルバの忠臣であるマチスは、歩兵部隊長として三六〇名の部下を持っていた。
伝統ある竜騎士団は世襲制で、歩兵部隊よりもはるかに格が上だ。
マケドニア軍では騎士団出身でなければ将軍にはなれないため、騎士団出身でないマチスは将軍の下の位に甘んじていたが、直属の部下の数はだれよりも多かった。
クーデターが起きた朝、マチスは当直で城に詰めていた。
だが、騎士団を中心とする反乱軍が一斉に蜂起したため、不意をつかれたマチスはなす術もなくやっと城の外へ逃げのびた。
マチスは家へ急いだ。妹レナに反乱軍の手が及ぶのは必至だからだ。

マチスとレナの兄妹の両親はすでになく、二人は両親が残してくれた王都のはずれにある家で、居候のジュリアンと三人で暮らしていた。
家へ駆けこむと、マチスはレナとジュリアンを連れて、王都の南の山中へ逃げた。
そこで、やはり城から逃げのびて来たパオラとばったり会った。
パオラは城を逃げ出したあと、妹のカチュアとはぐれ、この山中に逃げこんだのだ。
そして、山中で夜になるのを待って、南街道の小さな村へ逃げて来て、マチスの両親の縁戚に当たるこの宿屋に身を隠したのだ。
八日後、マチスの部下がマチスを捜してこの村へやって来た。
騎士のアギル・バルセオと二〇名ばかりの逃亡兵が、徒歩で一時ほど西にある山中に集結しているというのだ。
アギルはマチスと幼友達で、いずれは将軍になるであろうと嘱望されている名家出身の騎士だったが、ミネルバの信望が厚かったためリュッケ将軍と敵対していた。
マチスはレナとパオラをジュリアンに託し、仲間のところへ駆けつけて行った。
ところが、昨日の夜のことだった。
カダインの魔道士と名乗る六〇がらみの老人がレナを訪ねて来て外へ連れ出した。
半時してもレナが戻らないので、不安になったジュリアンが外へ出てみた。
だが、どこを捜してもレナの姿はなかったのだ。

そして、この夜になって、パオラがマチスにそのことを告げに行ったのだ。
クーデターが起きて、今日で二三日目を迎えた。
この間、反乱軍は黙って手をこまねいていた訳ではなかった。
逃亡兵が二〇名もいたことに、さすがのリュッケ将軍も、驚きを隠せなかった。
すぐさま兵を派遣し、徹底的に逃亡兵を追跡させた。
だが、まったく効果がなかった。
人々は反乱軍に冷ややかで、協力しようとしなかったのだ。
さらに将軍を立腹させたのは、逃亡兵を追ったはずの兵士のなかで行方(ゆくえ)をくらます者が相次いだことだ。
その脱走兵の数はすでに二〇名にもなっている。
逃亡兵と脱走兵の数を合わせると、四〇名にも及んでいた――。
「たしかにその男はカダインの魔道士だと言ったんだな!?」
マチスがジュリアンに尋ねた。
「はい」
「反乱軍の手先ではないんだな!?」
「そ、それは……」
断言できなかった。

「くそっ。せっかくアリティアの遠征隊がそこまで来ているってのによっ」
「えっ、アリティアの!?」
「一昨日(おととい)の夜、マルスさまたちがコトルの砦を破って、テルパの村のはずれまで来てるんだとよ」
テルパの村は東街道沿いにある小さな村だ。
この村から徒歩で二時もあれば行ける。
「リュッケは今、守りを固めるのに必死だっていうぜ。ルーメルの部隊をいとも簡単に破ったっていうからな。リュッケ側についた歩兵部隊はかなり動揺しているらしい。お前はこれからパオラと一緒にマルスさまたちと合流しろ」
パオラが同意するように頷いた。
「で、でもおれ……レナさんを捜さなくちゃ……」
ジュリアンは王都へ戻って、レナを捜すことを考えていた。
捜し出せなくても、なにか情報が得られるのではないかと思ったのだ。
「今更レナのことを心配しても始まらねえ。反乱軍を制圧するのが先だ。レナを捜すのはそれからだ。もしかしたら、リュッケの居城に捕らわれているかもしれねえしな。それにな、お前が必要なんだよ。な、パオラ」
「えっ?」

ジュリアンは思わずパオラを見ると、
「あなたのその腕がね」
パオラが微笑んだ。
どういう意味かジュリアンにはまったくわからなかった。
「おれはとりあえず仲間のところへ帰る。まだ数人仲間が増えそうなんでな。じゃあマルスさまによろしく伝えてくれ」
そう言い残してマチスは食堂を出て行った。
やがて、マチスの駆け去る蹄音が遠くへ消えると、
「じゃあ行きましょうか」
パオラが外へ飛び出し、慌ててジュリアンがあとを追った。
パオラのペガサスはいったん南へ向かった。
遠回りになるが、警備の手薄な南の山地を迂回したのだ。
ペガサスが遠征隊の野営に着いたのはそれから半時ほど経ってからだった。
村はずれの山間に設営された野営のテントでは作戦会議が開かれていた。
集まっている騎士たちの間に重苦しい空気が漂っていた。
正攻法以外、これといった作戦が考えつかなかったからだ。

正攻法だと、簡単に城へ突入できない。
城攻めに対して、城は様々な工夫がなされている。
しかも、遠征隊側よりもはるかに多くの兵が守っているのだ。
時間のかかる消耗戦になるのは明らかだった。
すると、カチュアが言った。
「ひとつだけいい方法があります」
戦士たちの視線がカチュアに集中した。
「実は、城には抜け穴があるんです」
「抜け穴？」
マルスは思わずジェイガンと顔を見合わせた。
「リュッケの城は、もともとは旧都にあたる王家の離宮で、城の中に抜け穴が作られてあるんです。天守塔の地下の、宝物殿の横にある部屋と、城の裏山の洞窟が繋がっているんです。これは王家の人々しか知りませんが、ミネルバさまがわたしたち三姉妹にだけ教えてくれたんです」
「なるほど、抜け穴から侵入すれば簡単に城は落とせる」
ドーガが勝ち誇ったように言い、
「なんでそれを早く教えてくれなかったんだよ」

ゴードンが乱暴にカチュアの肩を叩いた。
「ただ……鍵が必要なんです」
「鍵？」
戦士たちは互いに怪訝な顔を見合わせた。
「その鍵は王家の方しか持っておられないのです」
「ミネルバしか持ってないというのか？」
マルスが尋ねた。
「はい……」
とたんに一同は沈黙した。
と、突然、警備兵たちのざわめきが聞こえ、
「何事だっ!?」
警備兵が報告に来る前にアランが真っ先に飛び出し、マルスたちがそのあとを追った。
兵士たちが指差す南西から一頭のペガサスが飛んで来た。
手綱を握っているのは女性だ。その後ろで男が大きく手を振っている。
やがて、ペガサスは野営に着地した。
「パオラ!?」
「ジュリアン!?」

顔見知りの騎士たちが次々に声をあげ、
「あっ！」
カチュアが思わず顔を輝かせた。
姉パオラの無事な姿を見て安心したが、それよりもパオラがなぜジュリアンを連れて来たのか、その意味を即座に理解したのだ。
パオラもまたカチュアと同じ作戦を考えていたのだ――。

4

翌日の夜――。
旧都の人々はまんじりともしない夜を迎えていた。
アリティアの遠征軍が旧都の近郊まで来ているという噂がその日の朝のうちに旧都の人々の耳に入り、午後には近郊の都市や村の人々にまで行き渡っていた。
リュッケの居城をめぐっての激しい戦いはもはや時間の問題と思われた。
ドルーア川とマケドニア川の合流地点の台地に街壁のある旧都があり、その北側の森に囲まれた小高い丘にリュッケの居城が聳(そび)えている。その背後は険しい山だ。
城も町も緊迫した空気に包まれていた。

城は外郭と内郭の二重の城壁に囲まれている。
城門のある外郭の城壁の上の巡視路には二六〇名の歩兵部隊の兵士が、天守塔と宮殿のある内郭の城壁の上の巡視路には二〇騎の飛竜部隊と四〇騎の槍と弓部隊が配置され、アリティア遠征隊が現れるのを目を光らせて待っていた。
この季節にしては異様なほど暖かかった。風はまったくなかった。
三日月のほのかな明かりが不気味なほど静まり返った旧都を照らしている。
夜は、何事もなく更けていった。
朝一番の大聖堂の鐘が鳴るまでまだ一時もあった。
突然、けたたましい鐘の音が、夜の闇を切り裂いて旧都に鳴り響いた。
朝一番の鐘の音はもっとゆったりと時を告げるが、この鐘の音はその倍の速さだ。
鐘の音は、旧都から徒歩で一時もある町や村までも聞こえたという。
ただならぬ鐘の音に、旧都の人々は我先にと家を飛び出し、旧都の街門へ殺到した。
リュッケの城を攻撃するとなれば、地形上、旧都側からしか考えられなかった。街門を突破し、まず旧都に攻めこむしかない。
となると、旧都は戦場と化す――町のだれもがそう考えた。
だから、戦いが始まる前に、一刻でも早く旧都を脱出したいのだ。
門前を埋めた群衆と門を開けようとしない警備兵がもみあい、騒然となった。

だが、殺気立った群衆の圧倒的な力の前にたまらず警備兵が扉を放つと、群衆の波はマケドニア川にかかる街門前の橋を渡って旧都を離れた。
大聖堂の鐘はしばらく鳴りやまなかった。
鐘楼で鐘を鳴らしていたのは大聖堂の司祭スマル・キレントとその弟子たちだった。
レナや白騎士三姉妹と懇意にしていたキレント司祭は、この日の昼過ぎにパオラの使いの者から一通の手紙を受け取り、手紙の文面に従って行動したのだ。
けたたましいこの鐘の音が、宣戦布告だった。
鐘の音とともに、飛竜部隊二〇騎が東と南と西の三隊に分かれ、城の上空へ移動した。
城の東方をマケドニア川が北へ向かって蛇行している。
川の西に当たる城側には険しい山が聳え、川の東には深い森が広がっている。
川幅は徒歩にして一五〇歩あまり。
一番深いところでも人間の膝(ひざ)までしかないが、流れは速い。
この川の東側の深い森から、数頭の騎馬の黒い影が飛び出すと、月光にきらきら輝く川明かりのなかを、水飛沫をあげて渡り始めた。
先頭はアランである。そのあとに、ルークとロディの若い騎士が続いた。
東に目を光らせていた飛竜部隊の一隊がすかさずこの姿を見つけて急行し、他の二隊もそのあとに続こうとしたが、

「待ていっ！」
ルーメルが慌てて止め、その場に待機させた。
コトル砦と同じ囮作戦に乗ってたまるか――と思ったのだ。
砦での戦いから、ルーメルは遠征隊の槍部隊は三名から五名、騎馬は多くて一〇騎、歩兵部隊二五名と踏んでいた。
だが、川へ急行した一隊が攻撃態勢に入ると、闇を切り裂いて矢の嵐が襲った。
飛竜の悲鳴とともに、青い鮮血が次々に宙に飛び散った。
深い森から間断なく矢の嵐が放たれる。
ルーメルはまた遠征隊の弓部隊は一二、三名と踏んでいた。
だが、矢数はその数倍も多い。ルーメルは愕然となった。
と、森から別の数騎が川を渡り始めた。マルス、ドーガ、セシルだ。
そのあとに、ジュリアンを乗せたパオラとカチュアの二頭のペガサスが続いた。
騎馬の数を見てルーメルは囮作戦でないことを悟り、慌てて二隊を率いて急行したが、そのときはすでに、矢の嵐とアランたちのかざした槍先を浴びて傷ついた騎士や血塗れの飛竜が無残な姿で次々に川へ落ちていた。
弓部隊はゴードン、ライアン、ウォレンの他に約三〇名いた。
マチスとアギル率いる四〇名の逃亡兵が半時前に遠征隊とこの森で合流したのだ。

四〇名のうち弓部隊と槍部隊は約半々である。
囮作戦をとる必要はなかった。
弓部隊は木々の幹を楯に攻撃した。
一班が一斉に射ると、呼吸も置かずに二班が射、続いて三班が射る。
そのたびに飛竜の悲鳴が夜空へ轟いた。
加勢した飛竜部隊もすでに半分に減っていた。
「うぬぬっ！」
上空で戦況を見ていたルーメルが剣をかざし、マルス目がけて急降下した。
コトルの砦で破れて城へ逃げ帰ったルーメルは、七〇騎の竜騎士団の目の前で、リュッケに散々罵倒（ばとう）された。
そして、司令官から一部隊長へ格下げになった。
もはや、これ以上の失態は許されなかった。
刺し違えてでもマルスを倒さなければならないのだ。
ルーメルの飛竜が紅蓮の炎を吐きながらマルスの頭上に接近した。
だが、マルスは炎をかわし、ルーメルの剣を弾き返した。
そのとき、鋭い槍先が闇を裂いた。次の瞬間、
「ぐあっ！」

ルーメルは悲鳴をあげ、顔を大きく歪めた。
カッと見開いた眼球が宙を睨み、右手にかざした剣がむなしく落ちた。
槍先がルーメルの首を突きぬけ、血飛沫が飛んでいる。即死だった。
ちょうど川を渡り切ったアランが、マルスに攻撃を仕かけたルーメル目がけて、すばやく手槍を投げたのだ。
ルーメルの体が大きく傾いたかと思うと、飛竜の背から無様な姿で落下し、川の浅瀬に水飛沫を立てて頭から落ちた。
おびただしい血が死体の周りの清流を赤く染めた。
そのとき、他の竜騎士たちもすでに矢の嵐を浴びて川面に浮いていた。
マルスたちは川を渡り切ると、待っていたアランたちとともに、山裾の森へ消えた。
そして、弓部隊もそれを確認すると、森の奥へ消えた。

蠟燭の明かりを頼りにマルスたちは抜け穴の闇を奥へ進んだ。
穴は腰を屈めなければならないほど小さくて狭かった。
地盤の弱いところは木の梁で支えられていたが、梁が腐れて、天井が半分崩れ落ちているところもあった。地下水が滲みて、水溜まりになっているところもある。
山裾の岩場に抜け穴の出口を見つけると、マルスたちはそばの木の幹に馬とペガサスを繋

ぎ、この抜け穴を逆に進んで来たのだ。
四分の一時ほど進むと上にのぼる石段があった。
その石段をのぼると頑丈な鉄の扉に突き当たった。
「ジュリアン！」
先頭のアランが顔を輝かせて叫んだ。
一行の中ほどにいたジュリアンが騎士たちを掻き分けて扉の前に出ると、懐から革製の道具入れを取り出した。
道具入れには数本の細長い鋼の棒とそれを細工するための工具が入っている。
元盗賊のジュリアンは錠開けの名人だった。
ジュリアンは細長い鋼の棒を一本取り出すと、扉のノブの下の鍵穴にそれを差しこんで鍵形を探った。
そして、鋼の棒を鍵穴から抜くと、それを折り曲げたりしながら細工し、また差しこむ。
ジュリアンは首をかしげながら、それを何度も繰り返した。
だが、錠はなかなか開かなかった。
ジュリアンは苛立って何度も舌打ちをした。
一同も苛立っていた。蠟燭の控えが切れ、今燃えているのが最後の一本だ。
しかも、その芯が残り少なくなってきている。

わずかに蠟燭立ての釘の部分しか残っていない。
「急げ、ジュリアン！」
アランが焦（あせ）って怒鳴ったときだった。
「あっ！」
ジュリアンが思わず顔を輝かせた。
同時に、カチャ――錠が開く音がした。
「やった！」
一同は扉を開けて奥へ進んだ。
そこはカチュアが言ったように、天守塔の地下にある宝物殿の隣の部屋だった。
アランが部屋の壁に取りつけてある蠟燭立てから蠟燭を取り、消えかかった火をそれに移すと、一同はその明かりを頼りに、パオラとカチュアに案内されながら、足音を忍ばせて地下牢へ向かった。
だが、牢には牢兵の姿がなかった。
そして、真っ先に牢の鉄格子へ駆け寄ったカチュアとパオラが愕然となった。
鉄格子のなかも無人だった。
王女ミネルバとマリアの姿がどこにもなかったのだ。
「どういうことだ、これは⁉」

マルスは思わずアランと顔を見合わせた。
ジュリアンもまた溜め息をついた。
レナが牢に捕らえられているかもしれないという淡い期待が消し飛んだのだ。

5

東の空はうっすらと明るくなりかけていた。
マチスとアギル率いる逃亡兵四〇名あまりとゴードン率いる遠征隊の歩兵部隊二〇名の連合軍が、旧都の街門前のマケドニア川にかかる橋を渡り始めた。
最後部に遠征隊の輸送部隊一〇名が、そのあとにジェイガンとマリーシアが続いた。
街門の上の巡視路を固めた一〇名の警備兵たちは、上層部からアリティアの遠征隊は三〇名あまりと聞かされていたが、兵は明らかにその倍以上いる。
警備兵たちは驚き慌てて迎撃態勢に入った。
だが、先頭のマチスとアギルの姿を見たとたん、彼らに大きな動揺が起きた。
マチスは警備兵たちの元直属の上司に当たるのだ。
「街門を開けろーっ！」
マチスはマケドニア軍旗をひと振りし、毅然とした態度で叫んだ。

警備兵たちはうろたえた。どう対処したらいいかわからないのだ。
だが、マチスが二度叫ぶと、警備兵たちは慌てて巡視路から下りて街門を開けた。
そして、連合軍が街門を入ると、警備兵たちも逃亡兵に合流したのだ。
連合軍は旧都の大路を進み、マケドニア城の城門の二〇〇歩余り手前で立ち止まった。
城門の前にはマケドニア川から引きこんだ深い水濠がある。
その向こうに要塞のような巨大な城門があり、その奥に天守塔が聳えている。
城門や外郭の城壁の上の巡視路にある狭間で、息を殺して弓を構えていた歩兵たちが、先頭にいるマチスとアギルの姿に気づいたとたん、街門の警備兵と同じような大きな動揺が兵士たちに起きた。
連合軍の姿が大路に見えたとき、内郭の城壁の上で待機していた騎士がすぐさま天守塔の一階の大本営である広間へ飛んで行き、そのことをリュッケ将軍に告げた。
そのとき、リュッケはちょうど苛立ちの頂点にいた。
「ええいっ、どうなっておるのだっ！」
リュッケは五名の側近の騎士に当たり散らした。
四分の一時ほど前、飛竜部隊が全滅したという報せがリュッケにもたらされたが、それからなんの情報も入ってこなかった。
それが、リュッケの不安を高め、苛立ちとなって爆発した。

そこへ騎士が血相を変えて飛んで来たのだ。
「七〇!?」
兵士の数を聞いて、さすがのリュッケも驚いた。
〈遠征隊は三〇名あまり、あとの四〇名の兵士は――?〉
リュッケは即座に逃亡兵だと解釈した。それだと計算が合う。
「くそっ!」
リュッケが忌ま忌ましそうに舌打ちをし、指令を出そうとしたときだった。
突然、剣や槍をかざした一団が広間へ突入してきたのだ。
「うっ!? おまえたちは!?」
想像だにしなかった展開にリュッケは愕然とした。
マルスとアランとドーガだった。
そのあとにパオラやカチュアたちも姿を現した。
広間は騒然となった。
側近の騎士たちが慌てて剣を抜いて迎撃した。
だが、そのときマルスは高々と頭上に飛んでいた。
アランとドーガは凄まじい速度で猛進する。
続けざまに鋭い閃光が宙を斬り、悲鳴があがった。

騎士たちは腕や肩を斬られ、股や足を刺され、次々に床にうずくまった。
「うぬぬっ！」
慌ててリュッケが逃げ出し、すかさずマルスたちが追った。
リュッケは天守塔の上の階へ逃げた。
城壁の巡視路にいた騎士たちが騒ぎを聞いて次々に駆けつけて来るが、マルスたちは騎士たちの剣や槍を弾き返し、リュッケを追った。
ついにリュッケは天守塔の屋上へ追い詰められた。
東の空に、たった今太陽が出たところだった。
リュッケは鋼の槍をかざしてマルスに突進した。
だが、横に飛んだマルスの剣がその槍先を弾き飛ばした。
その拍子に、剣先がリュッケのペンダントの鎖を切った。
ペンダントは鶏卵の半分ほどの大きさをした透明な青い美しい宝石だった。
宝石が朝の光を浴びてきらきら輝きながら床へ落下したとき、マルスはリュッケを鉄柵へ追い詰め、リュッケの喉元に剣を突きつけていた。
それを見て、追って来た騎士たちは手出しできなかった。
「ミネルバはどこだ!?」
「お、王女は……」

「どこへ隠した⁉」
「ミシェイル王子が連れ去った」
「なに⁉　ミシェイルが⁉」
思いもしない名前に、アランたちも怪訝な顔をしている。
マルスは自分の耳を疑った。
「一昨日の晩、この城に現れた」
「ミシェイルが生きているというのか⁉」
マルスにはとても信じられなかった。
「わしにも信じられなかった。だが、たしかにミシェイル王子だった」
「し、しかし……！」
ミシェイルがミネルバに胸を刺されたところをマルスたちは目撃しているのだ。
先の戦争で、ミシェイル率いる竜騎士団との戦いに決着がついたあとである。
あのとき、ミシェイルはわざとミネルバに刺されたような節がある。
血を分けた実の兄妹が、互いに敵として戦わなければならなかった。
敗戦を意識したとき、ミシェイルは自分の死を意識したはずだ。
そのとき、ミシェイルはだれに殺されるよりも、実の妹に殺されることを望んだのだ。
だから、抵抗する素振りを見せなかった。

刺された瞬間、ミシェイルは微笑みさえ浮かべた。
そして、血塗れになったミシェイルは崖から転げ落ち、マケドニア川の急流に呑まれていったのだ――。
と、突然、朝日に剣先が光った。
マルスの一瞬の隙をついて、腰の剣を抜いたリュッケがマルスの喉元を目がけて力任せに突きあげたのだ。
「ぐわあっ！」
だが、悲鳴をあげたのはリュッケだった。
マルスはすばやく体をかわし、剣先が兜をかすめた。
その瞬間、アランの槍先が逆にリュッケの喉元を一刺しにしたのだ。
血飛沫が凄まじい形相のリュッケの顔を赤く染めた。
リュッケの体がぐらりと傾いた。と、
「うわわわっ！」
悲鳴をあげながら鉄柵の向こうに倒れ、そのまま天守塔から姿を消した。
天守塔は五階建てである。その屋上から中庭の石畳へ落下したのだ。
その光景に、騎士たちは抵抗する気力を失い、茫然と立ち尽くしていた。
「リュッケの死」の報せがたちまち城内に広がった。

兵士たちはしばらくの間、あ然としていた。

だが、やがて、城門前の水濠に跳ね橋が下りた。

そして、連合軍を迎え入れるために城門の扉が開いた。

マルスは足元に落ちていた透明な青い美しい宝石を拾いあげた。

宝石には研磨したあとや細工したあとは見られなかった。

巨大な宝石のひとかけらのように思えた。

空にかざして見ると、宝石の中央に、一際輝く白い光があった。

その光を取り巻くように、同じように白く輝く一一の光が点在している。

それらの光は四の月の下旬から西の空に見ることができる星座の金牛の形をしていた。

だが、この透明な青い美しい宝石があとで重要な意味を持つということを、このときマルスたちは知る由もなかった。

カーン……カーン……カーン……。

大聖堂の鐘の音が再び旧都に響き渡った。

だが、夜明け前のそれと違い、ゆったりと間を置いて鐘は鳴った。

その鐘の音を聞いて旧都の人々は、恐る恐るマケドニア川にかかる橋を渡った。

そして、街門を潜り、大路を進み、城門の前まで来て、やっとそれが戦いの終わりを告げ

る鐘であることを知った。
　人々は安堵し、人々にやっと笑顔が戻った――。

　リュッケの城の天守塔の広間では、マルスの前に四名の牢兵が呼ばれていた。
　広間には遠征隊の騎士の他にマチスとアギルがいた。
「クーデターが起きたその真夜中のことでした」
　マルスの問いに一番高齢の牢兵が答えた。
「リュッケ将軍が魔道士を連れて牢へやって来ました」
「魔道士？」
「どこの魔道士だったんだ、そいつは？」
　すかさずマチスが聞いた。
「カダインじゃねえのか？」
「さあ、そこまでは……」
「六〇ぐらいの背の小さい男だろ？」
　続いてジュリアンが聞いた。
「はい……」
「くそっ」

「同じ野郎だ……」
マチスとジュリアンは顔を見合わせて舌打ちをした。
「一昨日の晩、ミシェイルが現れてミネルバを連れ去ったというのは本当なのか？」
マルスが尋ねると、牢兵は頷いた。
「では、ミシェイルを見たのだね、その目で？」
「はい。リュッケ将軍と一緒に牢へお見えになりましたが、最初は亡霊かと思いました。以前とだいぶ違って、肩まである長い髪をしておられましたが、でも間違いなくミシェイルさまでした。ミネルバさまも大層驚かれておりました」
「しかし、もし……仮にですよ、仮にミシェイル殿が生きておるとして……」
ジェイガンにはミシェイルの生存がまだ信じられないのだ。
そして、マルスも先の戦争を戦った戦士たちも同じ思いだった。
「なぜ今ごろになって現れたのでしょう？　なぜクーデターが起きたあとに？　しかも、この大事なときに、なぜミネルバさまを……？」
そこへ、兵士が血相を変えて駆けこんで来た。
「隊長！」
「なんだ!?」
マチスが答えた。

「アカネイア軍が来ました！」
「なに!?」
その場に居合わせた者たちは驚いて広間を飛び出して行った。
内郭の中門まで行くと、跳ね橋を渡って城門を入ってくるアカネイア軍が見えた。
親衛隊を従えたラング将軍が先頭で、そのあとに一五〇騎の槍部隊、傭兵部隊、弓部隊が、さらに二〇〇名の歩兵部隊が続いた。
グルニアで反乱軍を追っていたあの討伐軍だった。
突然のアカネイア軍の出現に、マルスは言いようのない腹立たしさを覚えた。
「気にいらねえ……」
マルスの気持ちを代弁するようにアランが吐き捨てた。
アリティアの他の騎士たちもマルスと同じ気持ちだった。
ロレンス将軍が自害した砦のときとまったく同じやり方だったからだ。
自分たちは手を汚そうとしないで、ころあいを見計らって忽然(こつぜん)と現れる。
反乱軍制圧の指示を出しておきながら、これだけの軍を率いてマケドニアまで来、しかも反乱軍を制圧した直後に計ったように現れるということは、かなりの緻密な計算の上で動いているという証だ。
ラングの描いた筋書きに沿って、ラングの思惑通りに、その掌(てのひら)の上で踊らされているよう

な気がして、不快さを覚えた。
　ラングはマルスたちの前まで馬を進めると、
「さすがですな、マルス殿」
　馬上から見下ろして言った。
「ところでミネルバ殿の姿が見えないが、どうなされた？」
　正直に答えていいものかどうか、マルスは一瞬躊躇した。
「それとも、わしがはるばるマケドニアまで来たというのに、挨拶は必要ないとでもおっしゃるのかな？」
「ミネルバは……いない」
「いない？　どういうことですかな、それは？」
「何者かに連れ去られた」
　マルスはあえてミシェイルの名を言わなかった。
　それ以上説明するのが面倒だったからだ。
　だが、意外なことに、ラングはそれ以上追及しなかった。そして、
「なるほど」
　にんまりと頷いた。
「ならば、マケドニアはわがアカネイア軍が預かりましょう」

「預かる!?」
ラングの唐突な言葉に他の戦士たちも驚いている。
「あなたはわがアカネイア軍の援軍として、わしの指示に従い、ミネルバ殿のために反乱軍を制圧した。だが、王女がいないとなれば、話は別。わがアカネイア軍がマケドニアを治めるのが当然の道理というものではありませぬか」
「そんなばかな！　それはあなたの身勝手というものだ！」
「なに!?」
「ミネルバがいなくても、マケドニアのことはマケドニア人に任せるのが一番いい！」
「わしに指図をするというのか、マルス殿!?」
「ラング将軍！」
そのとき、アギルが口を挟んだ。
「この国のことは、われわれが解決します！　それに――！」
アギルはラングを睨みつけると、
「わがマケドニア軍には、まだ三二〇名の兵士がいます！」
すると、アギルの横にいたマチスが言った。
「たとえどんな事態になろうと、われわれの国はわれわれが守る！　わがマケドニアの名誉と誇りにかけてもな！」

アカネイアの討伐軍はラングの親衛隊を入れて三六〇名。今、ラングが力ずくでもマケドニアを治めるというなら、それに対抗するだけの兵力がマケドニアにはある――アギルとマチスはそう言いたいのだ。
「クーデターも阻止できずに、よくそのようなことをおめおめと！」
ラングは鼻先で笑った。
「よかろう！」
ラングにとって今ここで戦うのは得策ではない。
アリティアの遠征隊がマケドニアに加担すれば、勝負はどう転ぶかわからない。
だが、面子にかけても、このまま軍を引きあげることはできない。
「ただし、しばらくの間、わが軍をマケドニアに駐留させる！」
「駐留!?」
アギルはマチスと顔を見合わせると、
「その必要がない――と言ったら」
ラングを睨みつけたままアギルが答えると、
「必要があるかないかはわしが決める！」
ラングは一際強い口調で言い切った。
これ以上はラングとしても譲れないのだ。

それに、次の手を打つまで、アカネイア軍の力だけは誇示しておく必要があった。
「わがアカネイア帝国をあなどるでない！　ここにおる兵はわがアカネイア軍のほんの一握りに過ぎぬのだからな！」
アギルとマチスは悔しそうに唇を噛んだ。
ラングの言うように、目の前にいるアカネイア軍と戦うなら勝ち目もあるが、大国アカネイアを相手にまともに戦えば、マケドニアが滅亡するのは火を見るより明らかだ。
それに、たった今反乱軍との戦いが終わったばかりで、兵士も国民も動揺している。
まず国内を平定することが先決なのだ。
「よいかな、わしはマケドニアのことを思い、マケドニアが安定政権を確立するまで協力しようと言っておるのだ！　これ以上クーデターや反乱が起きてはかなわぬからな！」
二人はラングを睨みつけたままなにも言えなかった。
「やっとわかってもらえたようだな」
ラングはにやりと笑うと、
「ところでマルス殿。あなたには新しい任務がある。グルニア王都の城が何者かに襲われ、グルニアの王子と王女が連れ去られた」
「えっ!?」
「おそらく賊は、タリス国のオグマ・スビルではないかと思われる」

「オグマが!?」
「やつらはマケドニアへ逃げこんだらしい。ただちに王子と王女を連れ戻すのだ」
アリティアの戦士たちは、マルスの答えに注目した。
戦士たちは我慢の限界にきているのだ。
マルスは戦士たちの期待を裏切らなかった。
「断る!」
マルスは毅然として言った。
「なに!?」
「あなたの指図は二度と受けない!」
その言葉にアリティアの他の戦士たちは強く頷いた。
「どうしてもわしの命令に従わぬと言うのだな!?」
「いかにも!」
と、マルスの代わりにジェイガンが答えた。
「ジェイガン……」
思わずマルスはジェイガンを見た。
「わたしとて気持ちはマルスさまと同じ」
ジェイガンはマルスにそう告げると、

「ラング将軍！　わがアリティアの王子に対しての度重なる無礼な振る舞い、もはやこれ以上許せませぬ！」
「前にも言ったはずだが、わたしの命令は皇帝の命令………！」
ラングはマルスの本意を確認するように睨みつけた。
「その命令に逆らうことは、反逆と同じことなのですぞ！」
「なんと言われようと、嫌なものは嫌だ！」
「その言葉、皇帝に報告してもよいのだろうな!?」
「好きにするがよい！　いずれわたしは王都パレスへ行って、ハーディンやニーナ王妃と話をするつもりだ！」
「あとで後悔せぬようになっ！」
ラングはにやりと笑うと、
「それっ！」
馬の横腹を蹴り、親衛隊を引き連れて駆け去った。
その蹄音が城門の外へ消えると、
「マルスさま、ホルム海岸へ参りましょう」
ジェイガンが言った。
「ラングが言うように、オグマがグルニアの王子と王女を連れ出してマケドニアへ逃げて来

たのが事実なら、おそらくウェンデル司祭を尋ねてホルム海岸のバセロという村へ向かったに違いありませぬ」
アギルとマチスはさっそくその日から騎士団と軍の再組織に着手した。
アカネイア軍は今は亡きリュッケの城に駐留していたが、特別な動きは見せなかった。

一〇日後――。
遠征隊は、マチスやパオラ、アギル、ウォレンたちに見送られて旧都を出発し、南街道を南下した。
遠征隊のなかに、カチュアとジュリアンとマリーシアの顔もあった。
カチュアはホルム海岸までの道案内を買って出たのだ。
ジュリアンとマリーシアの二人は、カシミア海岸の先のカダイン街道とグルニア街道が合流する宿場まで同行し、そのあとレナを捜すためにカダインへ行く予定だった。
マケドニア南部は、アリティアよりはるか南に位置する。
アリティアに比べて一カ月ほど春の訪れが早かった。
日差しは暖かく、街道筋の木々はすでに芽吹いていた。
小川の水もぬるみ、川辺には名もない白い水花が咲いている。

「ホルム海岸へ着くころは、桜が満開ですよ、きっと」
カチュアが楽しそうに言った。
マルスはオグマを捜し出して、グルニアの王子と王女を保護したら、いったんアリティアへ帰国し、そのあとアカネイアの王都パレスへ向かうつもりでいた。
だが、そのころ王都アリティアでは、想像だにしないことが起ころうとしていた——。

第４章　悲しみの花吹雪―

１

川沿いの満開の桜並木が月明かりに照らされていた。
生暖かい風に薄紅色の花びらが優雅に舞っている。
その花びらのなかを南へ進む三つの人影があった。
先頭は筋骨逞しい大男である。
その大男が二人の子供を連れている。
オグマ・スビルとグルニアの王子ユベロと王女ユミナだった。
山間を流れているこのウチタ川が、やがて西のマケドニア山脈から流れてくるイホマ川と合流し、大海へと注ぐ。
その河口の南方の岬に、目指すパセロの村があるはずだった。

アカネイア軍の追跡を逃れてマケドニアに来てからすでに二〇日あまり経っていた。昼の間は森や林に身を隠して仮眠し、人目につかない夜を待って、街道を歩き続けて来たのだ。

だが、二人の遺児はまだ一二歳になったばかりだ。オグマの足の速さの半分しか歩けなかった。

「疲れたよ……」

ユベロがまた立ち止まって肩で大きく息をすると、

「しっかりしてよ」

姉のユミナが叱咤した。

「さっき休んだばかりじゃない。男でしょ」

「でも……」

ユベロは今にも泣き出しそうな顔をした。

この双子の姉弟は、一卵性双生児のように顔がよく似ている。

聡明な可愛い顔立ちをしている二人だが、まだ幼いというのに、すでに王家の血筋を引く者にふさわしい品性を持ち合わせていた。

「ねえオグマ、ぼくたちどこまで逃げたらいいの?」

「あと一日か二日で、ウェンデル司祭がいる村へ着けます。さあ、元気をだして」

「でも……もう逃げ切れないよ……。先生の村へ行っても安全だという保証はなにもないんだから……」
マケドニアに来てからも、アカネイア軍の追跡隊の影があちこちでちらついていた。
今日、夕暮れを待って食料を買いに寄った街道沿いのウチタの村でも、アカネイア軍が数時前に南下して行ったという噂を聞いたばかりだ。
「情けないこと言わないで。わたしたちはもうあなたと二人っきりなのよ。あなたがしっかりしてくれなきゃ、わたしだってどうしたらいいか……」
ユミナは涙を浮かべた。
気の優しいおとなしいユベロに比べ、ユミナは勝気で気丈な子だったが、長い逃亡生活の疲れからか、ユベロが弱音を吐くと、涙をこぼすことが多くなった。
「ごめん……頑張るから、もう泣かないでよ」
ユベロが気を取り直して歩き出そうとしたときだった。
「しっ！」
オグマが二人の身をかばいながら前方を睨んだ。
ざざざっ……満開の花びらを散らしながら、一陣の風が吹きぬけて行った。
花吹雪がおさまると、
「うっ！」

オグマが剣を抜いた。
一五〇歩ほど前方に、一〇騎あまりの黒い影が立ちふさがっていた。
アカネイア軍の追跡隊だった。隊長とおぼしき兵が、
「やっと見つけたぞオグマ・スビル！」
勢いよく馬の横腹を蹴ると、追跡隊は蹄音を轟かせて襲ってきた。
「くそっ！」
オグマは二人の遺児を連れて街道脇の草地へ逃げた。
追跡隊は方向を変え、枯れ草を蹴散らしながら追ってくる。
草地のなかに樹齢何百年という一際大きな満開の桜の木があった。
オグマはその太い桜の陰に二人の遺児を追いやると、すばやく身構えた。
追跡隊はすでに三〇歩ほど手前まで迫っている。
と、突然、左手から疾風のように黒い騎馬の影が飛んできた。
驚いた追跡隊の馬がいななきをあげ、慌てて立ち止まろうとした。
その前を、黒い影が猛然と横切った。
同時に、月明かりを受け、剣先が闇を切り裂いた。
追跡隊から悲鳴があがり、たちまち二人の兵が深手を負って落馬した。
黒い騎馬の影が方向を変え、再び追跡隊に突進した。

目の周りを白い仮面で隠している二六、七歳の騎士だった。
その剣先が鋭い閃光を発すると、悲鳴とともに、血飛沫が宙に飛び散った。
仮面の騎士の攻撃をかろうじて逃れた数騎がオグマに襲いかかった。
だが、オグマも仮面の騎士に負けていなかった。
高々と宙に飛んだかと思うと、振り下ろした剣で一騎の腕を斬り、着地するや返す剣先で別の一騎の足を突き刺した。
「引けっ、引けーっ！」
隊長が顔色を変えて叫んだとき、無事な騎馬は四騎しか残っていなかった。
追跡隊は深手を負った兵を連れて、蹄音を残して駆け去った。
「かたじけない」
オグマが礼を述べると、
「怪我はないか？」
仮面の騎士は剣を鞘に納めながら二人の遺児に尋ねた。
ユベロとユミナが首を横に振って微笑むと、
「アリティア軍がマケドニア山脈の峠を越え、ホルム海岸へ向かっているそうだ」
仮面の騎士はオグマに言った。
「マルス王子が率いてな」

「なに、マルスさまが⁉」
「おそらく、明日の夕方か明後日にはこの川の河口へ着くだろう」
「おぬし、マルスさまと知り合いなのか⁉」
「いや……」
「しかし、なぜマルスさまがこんなところへ⁉」
「それはマルス王子に会って直接聞くんだな」
「わかった。だが、なぜ見も知らぬわれらを……？」
「アカネイア軍が嫌いなだけだ。それに……」
仮面の騎士は二人の遺児を見た。
「この子らを救いたかった……」
「お二人を知っているんだな⁉　グルニアの元騎士か⁉」
その問いに、仮面の騎士は答えなかった。
オグマはどこかでこの騎士と会ったことがあるような気がした。
だが、どうしても思い出せなかった。
「この子らを頼む……」
そう告げると、仮面の騎士は去ろうとし、
「名は⁉」

オグマが慌てて呼び止めた。
「名は……」
仮面の騎士は一瞬言い淀むと、
「シリウスという旅の者だ」
そう言って、蹄音を残して駆け去った。

2

マケドニアの南西に位置しているホルム海岸は、辺境の地だが、ドルーア本島のなかで最も温暖なところとして知られていた。
マケドニア山脈の雪解け水で水量を増したイホマ川は西へ向かって流れていた。
両岸には険しい山が迫っているが、川沿いの街道を満開の桜が埋めていた。
アリティアの遠征隊は、この桜並木の下を、川の流れに沿って行軍していた。
南街道を一路南下した遠征隊は、旧都マケドニアを出発してから五日目に、南街道の終着点である港町ソルテへあと一時というところで、街道を西へ折れた。
そして、ひたすら西へ進み、マケドニア国を南北に縦断するマケドニア山脈の南端のイホマ峠を越え、桜が満開の山間のこの川に沿って下って来たのだ。

幻想的で壮観な花びらの舞は、今までの苦しい戦いや緊張感を忘れさせてくれた。
花の乱舞を見ていると、グルニアや旧都マケドニアでの出来事がまるで遠い夢のように思えてくる。
戦士たちは、アリティアを出発してから、初めてやすらぎを感じていた。
「それにしても、見事な花じゃのお……」
ジェイガンはまた同じことを言い、戦士たちは思わず苦笑した。
ジェイガンがまったく同じ台詞を吐いたのは、まだ昼まではたっぷり時間があるというのに、朝からこれで四度目だったからだ。だが、
「うまい具合にオグマと会えれば、われわれは桜前線とともに北上して行くことになる。ずっと満開の桜と一緒という訳だ。そして、われわれがアリティアへ帰ったときは、アリティアもまた桜が満開だ……」
その言葉に、戦士たちは思わず郷愁を誘われた。
アリティアを旅立ってからすでに二カ月になろうとしている。
今ごろ、アリティアにもやっと春の足音が近づいているのだ。
日ごとに暖かさが増し、川や海の水がぬるみ、木々が芽吹いているころだ。
そして、あと一カ月もすれば、王都や近郊の島々は満開の桜で埋まるのだ。
マルスは愛しいシーダと優しい姉エリスの二人の笑顔を思い出していた。

考えてみれば、グルニア本島に上陸してから、ほとんどシーダのこともエリスのことも思い出したことがなかった。その余裕もなかった。
戦士たちもまたそれぞれの脳裏に、美しいアリティアの風景や、懐かしい家族や王都の人々の笑顔を思い浮かべていた。
ジェイガンが言うように、うまくオグマと出会えれば、一カ月後には帰国できるのだ。一行はアリティアに思いを馳せながら行軍を続けた。
三時後、遠征隊は、イホマ川が北から流れて来るウチタ川と合流して海へ注ぐところまであと半時ほどのところまで進んでいた。
そして、川沿いの戸数五〇あまりの小さな集落を過ぎたときには、西のマケドニア山脈の稜線（りょうせん）に太陽が沈もうとしていた。
マルスが野営地を探すようアランに命じようとしたときだった。
「あと一時半もあればアルツの村へ着けます」
カチュアがマルスに告げた。
「遅くなっても、レイソル殿は歓迎してくれると思います」
「しかし、あまり遅くなっては」
「いえ、余計な気遣いは必要ありません。このまま行きましょう」
レイソルの性格を知っているカチュアはそう言って微笑んだ。

結局、カチュアの言葉に従うことにし、そのまま行軍を続けた。
アルツの村は海賊レイソル一族の本拠地で、頭領スペリオ・レイソルの館がある。
そして、ウェンデル司祭の故郷の村パセロの村は、このアルツの村から徒歩で三時ほど南下した岬にあった。
一〇六年前、アカネイア王国の一地方だったマケドニアが、ドルーア戦争の勃発とともにドルーア帝国に併合吸収された。
そのとき立ちあがった若者がアイオテ・ギルシアだった。
このアイオテの仲間として戦ったのがツルシオ・レイソルという海賊の頭領だった。
アイオテが義勇軍を組織してドルーア軍に戦いを挑むと、ホルム海岸を本拠地に、世界中の海域にその名を轟かせていたツルシオ・レイソルは、一〇〇名の部下を率いて、アイオテのもとに駆けつけたのだ。
戦後、時代のアカネイア国王にマケドニア地方を与えられたアイオテが、マケドニア王国を建国すると、マケドニア王国からホルム地方を切り離し、ツルシオ・レイソルにホルム地方を任せた。
だから、マケドニア王国のなかで、ホルム地方はマケドニア王家の力が及ばないもうひとつの独立国家のような存在だった。
ホルム地方は辺境の地で、険しい海岸線には、痩せたわずかばかりの土地しかない。

人々は目の前の荒れた海で細々と魚を獲るだけの貧しい暮らしを強いられていた。
それが一漁師の子供として生まれたツルシオ・レイソルを海賊稼業に走らせた。
ツルシオ・レイソルは貧しい人々を部下として雇い、世界の海へ飛び出して行った。
レイソルの海賊団は、単に航海中の商船を襲って積み荷を略奪するだけではなかった。
ツルシオ・レイソルは、他の海賊を次々に支配下に置くと、闇の販売ルートを組織して、海賊どもが運びこんだ略奪品を世界中にさばいたのだ。
それで財と人脈を得たツルシオ・レイソルは、密貿易にまで手を広げた。
ツルシオ・レイソルの扱う物資は多岐にわたっていた。
穀物やお茶、香辛料、酒、衣料などの生活物資から貴金属、骨董品の類にまで及んだ。
必要とあれば奴隷や武器までも扱った。
いわば、世界中の裏社会を仕切る大物だったのだ。
この恩恵によって、ホルム地方の貧しかった人々の生活が潤うようになった。
そのことを知っていたからこそ、アイオテはホルム地方をツルシオ・レイソルに任せ、ツルシオ・レイソルの稼業を見て見ぬ振りをしたのだ。
ツルシオ・レイソルの死後、その末裔が代々頭領を継いできた。
スペリオ・レイソルはツルシオ・レイソルの六代目に当たった。
先の戦争で、ミシェイル王子がドルーア帝国に加担したため、スペリオ・レイソルはそれ

まで続いていたマケドニア王家との親交を絶ったが、戦後ミネルバ王女が祖国再建に立ちあがると、再び親交を結んだ——。
遠征隊は山間の桜が満開の街道をさらに西へ進み、街道が北からの道と合流する地点まで来ると、あたりはすっかり夜の闇に覆われていた。
その先で、イホマ川が北から流れてきたウチタ川と合流し、海に注いでいる。
河口のはるか向こうの水平線の上に赤みがかった月が出ていた。
そして、左手に海に突き出た岬の黒々とした山影が見えた。
「あの岬を回ればアルツの村です」
カチュアが説明したときだった。
突然、前方の街道脇の葦(あし)の原から三つの黒い人影が飛び出した。
「おーい！」
先頭の大男が手を振りながら二人の子供を連れて遠征隊へ向かって走って来る。
月明かりを背に受けているので顔はよく見えない。だが、
「オグマ!?」
戦士たちがだれとなく叫んだ。
「オグマだ！」
近くまで来ると、顔がはっきり見えた。

オグマとユベロとユミナだった。
マルスや顔見知りの戦士たちがすばやく馬を下り、
「よく、無事だったな！」
オグマと肩を叩き合ったり、握手をしたりして再会を喜んだ。
「もう心配はいらない。安心していいよ」
マルスがユベロとユミナに微笑むと、
「旅の者からマルスさまたちがこっちへ来るというのを聞いて、この先の山に隠れて待っていたんです！」
オグマがマルスに言った。
「それにしてもなぜこんなところへ!?」
「オグマを捜しに来たんだよ」
「えっ!?」
「アカネイアの援軍としてグルニアへ赴いて来たんだが」
「なんですって!?　どういうことですか、それは!?」
「実は……」
マルスは二人の遺児を見て言い淀んだ。
二人の遺児がロレンスの死を知っているのだろうか。ロレンスの死体と一緒に砦から連れ

去られたのだから知っていても不思議はないが、もし知らなかったとしたら、そのことを二人の前でオグマに告げていいのかどうか――そう思って躊躇したのだ。
咄嗟にそれを感じ取ったカチュアが、
「ねえ、喉渇いてない？」
二人の遺児に話しかけて輸送部隊の方へ連れて行った。
「実はなオグマ……」
マルスが説明を始めた――。
やがて、話がロレンスの自害に及ぶと、
「そういう経緯があったとは知りませんでした……」
オグマは涙を浮かべた。
「将軍が死に、二人がラングに捕らわれているという噂がグルニア中に広まっていました……。だから、王都グルニア城に忍びこんであの二人を連れ出したのですが……」
「あの子らは知っているのか、将軍のことを？」
「砦から連れ去られるとき、ラングに将軍の死体を見せられたのだそうです」
「なんと酷いことを……」
マルスは唇を嚙んだ。
そのとき、東の街道から蹄音を轟かせて一〇騎の騎馬がやって来た。

ただならぬ気配に、歩兵部隊は二人の遺児と輸送部隊をかこみ、その警護を固めた。
やって来たのはアカネイア軍の追跡隊だった。
先頭の隊長が目敏くオグマと二人の遺児を見つけると、
「アリティアの援軍だな!?」
「アカネイア軍がなんの用だ!?」
マルスが言い返した。
「われわれにその男と――!」
隊長はオグマを顎で指した。
「グルニアの王子と王女を引き渡して欲しい!」
「断る!」
「どうしても渡さぬと言うのか!」
隊長がマルスを睨みつけると、
「ならば!」
勢いよく剣を抜き、一斉に追跡隊が攻撃をしかけてきた。
と、北の街道と西の街道から、けたたましい蹄音が轟いた。
一〇騎ずつの別の追跡隊が駆けつけて来たのだ。
後続隊の二〇騎が加わり、激しい戦いになった。

だが、先手を取られた戦士たちが敵の攻撃をかわして、攻勢に転じた。
マルスが高々と宙に飛んで剣をかざすと、オグマもまた高々と宙に飛んでいた。
アランが槍を振り回しながら敵に突進し、そのあとにドーガとゴードンが続く。
ルーク、ロディ、セシル、ライアンの若い騎士たちも必死に斬りかかって行った。
剣先や槍先が月明かりに閃光を発しながら鋭く宙を切り裂いた。
追跡隊から次々に悲鳴があがり、鮮血が闇に飛び散った。
三〇騎のうちすでに一〇騎は傷を負って落馬している。
と、突然、東の街道が騒々しくなった。
先頭の騎馬が武装した七、八〇名の歩兵を従えて駆けつけて来た。
それを見た追跡隊の兵士たちはさっと顔色を変えた。
追跡隊の反応が早かった。
そのなかの一騎がすばやく逃げ出すと、つられるように追跡隊は深手を負った兵士を連れ、蹄音を残して西や北の街道へ散って行った。
入れ替わりに七、八〇名の武装軍が遠征隊のところへ駆けつけると、
「おお、カチュアではないか!?」
先頭の騎馬の大男がカチュアの姿を見つけて叫んだ。
齢のころは三四、五。オグマやドーガに負けぬ巨漢だ。

黒々とした総髪がかすかに風に揺れている。
眉（まゆ）が濃く、眼光は鋭い。黒鬚（くろひげ）が口の周りから顎まで埋めている。
海賊の頭領スペリオ・レイソルだった。
そして、武装した兵士たちはレイソルの手下だった。
「なーに、アカネイアの連中がこの辺りをうろついているというので、ちょうど警備を固めていたところだったのよ。このホルム海岸であんなやつらに好き勝手なことをさせるわけにはゆかねえからな」
レイソルは頑丈そうな白い歯を見せてにっと笑った。
すると、兵のなかから弓を持った男が飛び出して来て、
「お久し振りです、マルスさま！」
と、懐かしそうに微笑んだ。
「あっ!?」
先の戦争を戦った騎士たちが思わず叫んだ。
オグマが真っ先にその若者に駆け寄った。
「カシムじゃないか!?」
タリス出身の元猟師カシム・ベイロだった。
先の戦争で、カシムは病気の母の治療費を稼ぐためにガルダの海賊団で働いていたが、マ

ルスと知り合うとマルスの側につき、戦争が終わるまでマルスと行動をともにした。
「どうして、こんなところに!?」
マルスが尋ねると、
「戦いが終わっていったんタリスへ帰ったんですが、これといった仕事がないんで、母の治療費を稼ぐために、タリスの近くに来ていた頭(かしら)を訪ねて行って、世話になることにしたんです。まあ、一種の出稼ぎのようなものでして」
照れ臭そうに頭を掻きながらカシムは答えた。

3

荒波が打ち寄せる岬の道を進むと、突然切り立った断崖が行く手を阻んだ。
この断崖に強固な石門が造られていた。村の街門だった。
厚い鉄扉を潜って街門を入ると、その先は岩穴の巨大な隧道(ずいどう)になっていた。
二〇〇歩ばかりあるこの隧道をぬけ、マルスたちは思わず目を見張った。
目の前に、波静かな美しい入り江が広がって、五五〇戸あまりの民家が密集していた。
その民家に灯った無数の明かりが、入り江の波にゆらゆら揺れている。
入り江には波止場もあり、明かりを点(つ)けた五隻の大型帆船が停泊していた。

集落の背後には険しい山が入り江を取り囲み、巨大な壁のように聳えているが、その全山が薄紅色の満開の桜で埋まっている。
村明かりと月明かりに照らし出されたその妖しいまでの美しさと壮観さに、マルスたちはしばらく立ち止まって見惚れていた。
「ホルムというのは旧マケドニア語で桜のことを意味するのですよ」
レイソルはそう説明すると、
「夏になれば、山は鮮やかな緑一色に変わり、秋になれば血のようにまっ赤に染まる」
そう言ってアルツの村の景観を自慢した。
通りには市場を中心に、食堂、酒場、道具屋、鍛冶屋などが軒を並べていた。
入り江の一番奥に、やはり満開の桜で埋められた小高い丘があった。
この丘の上に、砦のような石造りのレイソルの館があった。
マルスたちが館に到着すると、広大な庭に五基の篝火が焚かれ、その炎の明かりに、満開の桜の花が鮮やかに照らし出された。
レイソルの手下たちがさっそく宴の準備にとりかかった。
その準備が終わるのを待ちながら、
「これからどこへ行きなさるのですか?」
レイソルがマルスに尋ねた。

「ウェンデル司祭に会いにパセロの村へ行こうと思っているのですが」
「司祭に会いに？」
「はい。昨年、故郷のパセロの村へ帰ったと聞いたものですから」
「しかし、司祭はアカネイア軍に連れ去られたままですが」
「えっ!?」
マルスは思わずオグマと顔を見合わせた。
「い、いつですか!?」
「たしか、昨年の一二の月のことでさあ。昨年の九の月に、司祭はたしかにパセロの村へ帰っていまさあ。この村を通らなければ、パセロへは行けませんからね、そんとき司祭はうちで一泊されました。ところが、パセロから帰りのことでさあ。ここから北へ一日ばかり行ったところにウチタという村があるんですがね、その村まで司祭が行ったとき、待ち受けていたアカネイア軍に連れ去られたというのですよ。そんとき、おれは仕事で村をあけていたから、帰って来て聞かされたんですがね」
「あの、司祭はカダインへ帰る途中だったのですか？」
「たぶん、そうじゃないんですかね」
と言いながら、レイソルは宴の準備をしている手下たちを見て、
「おおっ、準備ができたようだな」

すでに庭には大きな卓がいくつも作られ、その上に酒瓶がずらりと並べられている。
レイソルの手下たちは、巨大な鍋を炊いていた。
何種類もの魚を手際よく切って貝や野菜と一緒に鍋にぶちこんでいる。
「カチュア、クーデターのことをもっと詳しく話してくれ」
ガイルはカチュアを呼んで中央の席につくと、
「急だったんで、なにもないが、ホルム特産のチェリー酒ならいくらでもある。さあ、やって下さい。そのうち、海賊鍋もできますから。さあさあ」
マルスたちに席を勧め、チェリー酒の瓶の封を切った。
アリティアの戦士たちには、二カ月振りの酒だった。
一時後、酔いがまわったドーガやゴードンは、若い戦士たちを相手に、アリティアへの帰国のことを話題にし、盛りあがっていた。
別の卓では、歩兵部隊の兵士たちもまた同じ話題で盛りあがっている。
「やつらは単純に喜んでおるが……」
ジェイガンが戦士たちを見ると、
「ラングは簡単にはグルニアを通してくれないでしょうな」
とマルスに言って、大きく溜め息をついた。
ジェイガンの横で、アランはいつものように淡々とチェリー酒を飲んでいる。

一陣の風が吹きぬけていき、宴席に花吹雪が舞った。
いつの間にか月が消え、暗雲が上空を覆っている。と、
「頭ーっ！」
突然、レイソルの手下が叫んで北西の空を指差した。
山の稜線から二つの影が飛来した。
宴席にいた者は全員立ちあがって空を見ていた。
二頭のペガサスだった。ペガサスは優雅に翼を広げて接近して来る。
それぞれのペガサスの背に騎士が乗っていた。
長い髪が風に大きくなびいている。馬上の二人は女性であった。
二頭のペガサスが満開の桜の上空に飛来すると、篝火の照り返しを受けて、二人の顔がかすかに見えた。
「シーダ⁉」
「シーダさま⁉」
マルスとオグマが叫んだのは同時だった。
ペガサスに乗って来たのはシーダとパオラだった。
二頭のペガサスが庭に着地すると、
「どうしたシーダ⁉」

マルスが駆け寄った。
「どうしたんだ、こんなところまで来るなんて!?」
馬から下りたシーダの顔は青ざめて憔悴している。
「なにがあったんだ、アリティアで!?」
「マルス……」
紺碧の眸が涙に濡れていた。
「ア……アリティアが……」
「アリティアがどうしたんだ!?」
マルスは思わずシーダの肩を掴んで揺すった。
「帝国軍に襲われて……」
「なに!?」
戦士たちに衝撃が走った。
「お、襲われたって……!?」
「ちょうど七日前の夜……アカネイアとグラとオレルアンの連合軍がアリティア城を奇襲して……騎士団が……」
「騎士団が……どうしたんだ!?　カインたちは!?」
「ぜ、全滅……」

「！」

戦士たちは愕然としたまま動けないでいた。

「城は完全にアカネイア軍の手に渡って……」

「なぜだ!?　なぜアリティアが!?」

「わ、わたしには……」

シーダは首を横に振るばかりだった。

と、一際強い風が吹き、花吹雪が激しく舞いあがった。

同時に、ピカーッ……暗雲を稲光が切り裂いた。

頭上を覆った無数の花びらが、一瞬その光に目映く鮮明に照らし出された。

アリティア城が奇襲を受けた夜――。

王都やアリティア城は小雨に煙っていた。

春を目の前にしたこの時期、アリティアは雨が多い。

そして、一雨ごとに、春に向けて暖かさを増してゆく。

城が寝静まった直後だった。

突然、緊急を告げる警備兵の笛が雨の城内に響き渡った。

雨に煙る東の海上に三隻の軍船が姿を現したのだ。

城内は騒然となり、騎士団や歩兵部隊が、東側の城壁の警備を固めた。
だが、それはアリティア城の手薄な警備をついた敵の囮作戦だった。
東の城壁に警備が集中した隙に、王都のある西の海上に一〇隻あまりの軍船が現れたのだ。
それらの軍船は城の西側の城壁に接岸すると、軍船から飛び下りた兵士たちが縄梯子(なわばしご)を使って城壁をのぼり、次々に城内に突入した。
虚をつかれたアリティアの騎士団や歩兵部隊が必死に応戦した。
敵はアカネイアとグラとオレルアンの連合軍だった。
その数は騎士一五〇名、兵士四〇〇名。アリティア軍の五倍もあった。
連合軍はあっという間にアリティア軍を撃破すると、中門を突破して、天守塔や宮殿のある城の中枢部へと雪崩こんで行った。
そして、四分の一時後、神剣ファルシオンをあしらったアリティア国旗は下ろされ、雨に煙るアリティア城の天守塔に、太陽と光をあしらった朱色の大旗が翻った。
アカネイア帝国軍の旗だった――。
重苦しい沈黙のあと、
「マルスさま……」
気を取り直して、ジェイガンが言った。

ようか」

「でも、あのハーディンがわがアリティアを攻めるなんて……！」

ハーディンが、グルニアをアカネイアの領土にするために、グルニア王家の血を引く者を抹殺し、グルニア王国再建の根を絶とうと企てていることを、ロレンス将軍から聞かされたが、それと今回のアリティア襲撃が関係あるとは、どうしてもマルスには思えなかった。

「ハーディンはぼくが本気で反乱を起こしたとでも思ったのだろうか⁉」

「いや、それにしては、あまりにも手際がよすぎるとは思いませぬか。七日前に襲われたということは、われわれがホルム海岸へ向けて旧都マケドニアを出発したその日のことですぞ。そのちょうど一〇日前に、われわれはマケドニアの反乱軍を制圧し、そのあとラングの命令を拒否した。そのほんの一〇日の間に、ハーディン殿がラングの報告を受けてアリティアへ出撃するということは、時間的にも物理的にも不可能に近い。よほど周到な準備ができていなければ、こう早くは攻撃できますまい」

再び稲光が闇を切り裂き、雷鳴が轟いた。

「おそらく……グルニア遠征そのものが、仕組まれた罠だったのかも知れませぬ。そしてマケドニアの反乱も……」

たしかにジェイガンの言う通りだった。

グルニア遠征が仕組まれた罠なら、マケドニアの反乱もまたハーディンとラングがリュッケ将軍を利用して仕組んだ罠だったとしてもなんら不思議はない。
ロレンスが自害した直後、ラングは計ったように絶妙の間合いで砦に現れた。
マケドニアの反乱軍を制圧した直後もまったく同じだった。
計算された手際のよさに、マルスや戦士たちは、言いようのない腹立たしさを覚えた。
ラングが描いた筋書き通りに、ラングの思惑通りに、その掌の上で踊らされているような気がして、不快さを覚えた。
今、ジェイガンの言うことを聞きながら、その腹立たしさや不快さは、単にラングの傲慢で高圧的な態度によるものだけではなかったということに、マルスや戦士たちは気づいたのだ。
腹立たしさや不快さは、仕組まれた罠にも起因していたのだ。
その匂いを、腹立たしさや不快感として、なんとなく感じとっていたのだ。
だが、感じとっていながら、その罠にいとも簡単にはまってしまったのだ。
悔やんでも、悔やみきれなかった。
マルスや戦士たちは、屈辱感と後悔の念に全身を震わせながら、いたらなかった自分自身を激しく責めていた。
「ハーディンはわれわれをアリティアから遠ざけておいて、われわれがいない間にアリティ

「ハーディンは最初からそのつもりで、ラングにわれわれを挑発させたというのか!? ラングはわれわれに無理難題を押しつけて、われわれが拒否するのを待っていたというのか!? アリティアを攻撃する口実を作るために!? そんなばかな!」

　やり場のない感情をマルスはジェイガンにぶつけた。

「アを襲うつもりだったというのか!?」

　マルスは信じたくなかった。
　だが、今となってはそうとしか考えられないのだ。
　ジェイガンは黙って頷くしかなかった。
　軍師としてジェイガンもまたそれ以上の屈辱感を味わっていたのだ。
「くそっ!」
　アランが全身を震わせながら、チェリー酒の入ったグラスを力任せに握りしめると、
　ガチャッ——グラスは音を立てて手のなかで粉々に砕けた。
　ピカッ……ピカピカーッ……。
　一際大きな稲光が闇を切り裂き、雷鳴が大地を揺るがした。
「それでシーダさま、他の者はどうしたのですか?」
　ジェイガンが尋ねた。
「エリスさまはご無事なのですか?」

「他の方は……」

シーダは首を横に振った。

「エリスさまは、わたしを逃がすために身代わりになって……」

そう言ったとたん、シーダの眸から大粒の涙がぽろぽろ零れた。

「ごめんなさい……マルス……。わたしだけ逃げて来るなんて……。でも、あなたにこのことをどうしても伝えたくて……。やっとマケドニアの王都に着いたら、こちらへ向かったというので……」

それでパオラに案内されて来たのだ。

「シーダ……」

マルスはやさしくシーダを抱きしめた。

「わかってるよ……。シーダだけでも無事でいてくれてよかった……」

マルスの目にもまた涙が滲んでいた。

「アリティアはどんなことがあってもかならず取り戻す！　たとえハーディンと戦うことになっても、きっと取り戻してみせる！」

ドーガとゴードンは唇を嚙みしめ、涙を浮かべていた。

若き騎士ルークも、ロディも、セシルも、ライアンも。

そして、ジェイガンとアランも——。

歩兵部隊の兵士の間から、すすり泣きが漏(も)れた。
そのすすり泣きが兵士たちの間に静かに波のように広がった。
やがてすすり泣きが、嗚咽に変わった。
雷光はさらに激しさを増した。
風は間断なく花吹雪を舞いあげる。
その花吹雪のなかで、だれもが怒りに震えていつまでも立ち尽くしていた。
やがて風は雨を含んだ。春の嵐だった――。

――第二巻に続く――

スーパークエスト文庫

ファイアーエムブレム
紋章の謎

VOL.1

1994年5月20日　初版第1刷発行
1995年5月10日　　　第3刷発行
定価はカバーに表示してあります。

著　者
高屋敷英夫

編　集
久保田あゆみ(MASK)
久保雅一(小学館)

発行者
田中一喜

発行所
株式会社　小学館
〒101-01　東京都千代田区一ッ橋2－3－1
編集　03(3230)5998　　販売　03(3230)5739

印刷所
共同印刷株式会社

ISBN4-09-440221-7

ファイアーエムブレム

―44マップ綿密な攻略―

大充実の内容166ページ!!

大好評発売中／定価980円

任天堂公式ガイドブック

ファイアーエムブレム

〜紋章の謎〜

小説／**高屋敷英夫**（たかやしきひでお）

岩手県出身。脚本家。『ルパン三世』『あしたのジョー』『めぞん一刻』映画『はだしのゲン』『火の鳥』シリーズ、『がんばれ!!タブチくん!!』シリーズなど数多くの人気アニメやアイドルドラマの脚本を手がける。著書に『小説スケバン刑事上・下』『小説ドラゴンクエスト』シリーズなど。

イラスト／**おち よしひこ**

昭和36年9月26日、東京都に生まれる。昭和59年、『ゾイド創世紀』（月刊コロコロコミック）でデビュー。代表作『Ｇｏ！Ｇｏ！ミニ四ファイター』『スーパービックリマン』『イグドラシル』ほか。

ISBN4-09-440221-7

C0193 P550E

定価550円
（本体534円）

SUPER QUEST BUNKO